

# 第11回 保育実践研究・報告集

平成 29 年 3 月



社会福祉法人 日本保育協会

## はじめに

保育所や認定こども園等に対する地域の要望は様々であるが、子育て専門機関、専門の職員が常駐する場所は地域ではそれらをおいて他にない。日々の保育実践の中から課題を見つけ、複数の職員の手でそれを分析し、検討を加え、より良い方向へと改善することが保育の質を高めることに繋がる。

この「保育実践研究・報告」は、「研究論文」と「報告と考察」の2つの方向性により、保育者の実践について募集したものである。第11回目を迎え、会員各位のご協力により、13件の提出をいただいたことに感謝申し上げます。また、業務多忙の中、応募された皆様に対し、敬意を表する次第である。

第7回から、課題研究の取り組みを評価することとし、各賞の区分の見直しを行い、従来3区分だったものを5区分に変更している。

なお、この事業はあくまで保育実践の研究・報告について募集したものであり、各施設における保育内容の評価を目的としたことではないことを申し添える。また、第11回より保育所、認定こども園等における保育実践・研究について幅広く応募いただくという意味で、これまでの「保育所保育実践研究・報告」を「保育実践研究・報告」とした。

会員の皆様にはより積極的に応募していただけるよう課題等について更に検討を加え、第12回の募集に生かしたいと考えている。内容がより充実していくことを期待し、併せて積極的に保育研究を行っていただくことを願うものである。またこの報告への応募を、保育現場がいかに様々なことを行っているかを発信する手段としても活用していただくことを願っている。

平成29年3月

「保育実践研究・報告」企画審査委員会

## 第11回「保育実践研究・報告」募集要綱（概要）

### 1. 目 的

日本保育協会では、保育の専門性の向上を図るため、日々の保育を振り返り、検証していく保育実践に関する研究・報告を募集します。

応募いただいた研究・報告は審査を経て表彰し、報告集やホームページ、「保育界」等で公表することにより、今後の保育内容の向上と充実に資することを目的とします。

### 2. 主 催

社会福祉法人 日本保育協会（日本学術会議協力学術研究団体）

### 3. 応募資格

日本保育協会会員施設の施設長、職員（個人研究、施設内グループ研究、地域のグループ研究等）及び保育科学研究所研究会員（保育所等との共同研究を含む）

### 4. 部 門

#### (1) 課題研究部門

以下からテーマを選び、課題や取り組みについてまとめてください。関心を持ったきっかけ、疑問などの課題又はどのような仮説を立てたのか、保育にどのように取り組んだのか、そこからどのような発見、気づきがあったかを、出来るだけ掘り下げてください。必ずしも問題解決の成果や成功例を求めているわけではなく、課題の発見とその解決に向けたプロセスをまとめてください。保育所保育指針をもとに、具体的にどのように実践されているかを示す機会としてお考えください。

##### ① 人との関わり

子どもが人への信頼感や主体性、社会性を形成していくために人間関係は大切です。子どもと人との関係性をつないでいくための関わりについて取り組みをお寄せください。

##### ② 遊びと学び

遊びや日々の生活においても子どもが学ぶ機会はたくさんあります。日常的な遊びや生活が学びにつながっていくことについての取り組みをお寄せください。

##### ③ 子どもの健康・安全

施設での保健活動、感染症対策、事故防止対策、防災等の危機対応などについて、具体的な取り組みの内容をお寄せください。

#### (2) 実践報告部門

テーマは自由です。日誌に記載された日常の実践や、地域・保護者に向けて実施した調査結果など、保育実践・事例報告・調査報告等を対象とします。日々の記録の中から得られた事柄や傾向の変化など、客観的な記録・報告をもとにした考察に注目するものです。

- (例)
- ・施設での実践事例（感染症・食中毒への対応、特別な配慮の必要な子どもの保育、乳児保育での課題、苦情解決の取り組み、保育環境向上のための取り組み（物的、人的）、入所の際の配慮、保育日誌の工夫・改善等）
  - ・施設（地域）での調査など
  - ・施設として実施した子育てに関する特別活動、子育て家庭への支援・地域との連携など
  - ・災害への対応（防災計画の策定等）

### 5. 審査において評価する内容

応募作の評価は企画審査委員会が行います。目的や課題を明確に示し、それに対しどのように取り組んでいったかという経過等について、事実を基に客観的・具体的に記述され、その結果に対して考察がなされていることが大切です。また、問題提起が明確か、論旨が通っているか、オリジナリティはあるか、データは適切か等についても評価を行います。

## 第11回「保育実践研究・報告」入賞作一覧

### ○優秀研究賞（課題研究部門）

該当なし

### ○研究奨励賞（課題研究部門）

・課題研究①人との関わり

「共同体感覚・自己肯定感を育むさくらちゃん保育」

田中 ミサ（福岡市・社会福祉法人香蘭育成会 しおばる保育園）

・課題研究③子どもの健康・安全

「保育を高めるリスクマネジメント～ヒヤリハット集計後の事故回避の取り組み～」

守屋 美智子・李 美和

（大阪府・社会福祉法人都島友の会 都島第二乳児保育センター）

### ○優秀報告賞（実践報告部門）

・実践報告

「家庭福祉員（保育ママ）との交流、連携そして今後の展望

～夜間保育園としてできること～」

井上 名花（東京都・社会福祉法人こうほうえん キッズタウンうきま夜間保育園）

### ○実践奨励賞

・課題研究③子どもの安全・健康

「保育園におけるアタマジラミ感染時の対応と取り組み～事例を通して～」

小島 祐子（東京都・社会福祉法人東中川会 亀有りりおっこ保育園）

・課題研究③子どもの安全・健康

「未然に事故を防ぐための保育士のリスク・マネジメント

～保育環境と事故・ヒヤリ・ハットを通して見えてきた事から～」

運天 美咲（沖縄県・社会福祉法人玉重福祉会 第2 愛心保育園）

・実践報告

「園庭のない保育所の環境設定～楽しく身体を動かす室内遊びの工夫～」

杉浦 悠（東京都・公益財団法人鉄道弘済会 南千住駅前保育所）

・実践報告

「子どもが楽しく絵を描くには～はじめてのお絵描きから描く楽しみへ～」

鳥井 美幸（新潟市・公益財団法人鉄道弘済会 新津保育所 さくら保育園）

・実践報告

「壁でつながる0歳児からの発達～我が園の名物となった『壁のぼり』～」

笠井 博嗣・片桐 広絵・小橋 紀子

（大阪府・社会福祉法人都島友の会 都島東保育園）

・実践報告

「いろいろな遊びを楽しもう！～健やかな心と体の育ちのために～」

渡部 靖子・津田 祐子（島根県・公益財団法人鉄道弘済会 松江保育所）

・実践報告

「子どもの笑顔は、保育士の笑顔から

～保育士の幸せな笑顔が絶えない保育園は子どもの笑顔もあふれている～」

新城 利奈子（沖縄県・社会福祉法人玉重福祉会 愛心保育園）

## ○奨励賞

- ・課題研究②遊びと学び

「絵本の環境設定」強まる親子の絆・広がる心の世界」

北村 法子・飯嶋 和美・石井 美沙紀

(東京都・社会福祉法人東京弘済園 弘済保育所 (おひさま保育園))

- ・実践報告

「見直そう保育—よりよい保育をするために—」

渡部 忍 (兵庫県・宗教法人願行寺 みなと保育園)

- ・実践報告

「月齢にあった歩育生活を楽しむ

～体を動かして楽しく園生活を送る為の体づくりを目指して～」

中崎 朋美 (鹿児島県・幼保連携型認定こども園建昌保育園)

## 目 次

はじめに

第11回「保育実践研究・報告」募集要綱（概要）

第11回「保育実践研究・報告」入賞作一覧

1. 総評 .....	1
総 評.....	3
委員長 小林 芳文	
2. 入賞作の紹介及び講評 .....	5
(1) 研究奨励賞 .....	5
〈課題研究部門〉	
・ 課題研究①人との関わり	
「共同体感覚・自己肯定感を育むさくらちゃん保育」	
～夜間保育園としてできること～	
田中 ミサ（福岡市・社会福祉法人香蘭育成会 しおぼる保育園） .....	7
・ 課題研究③子どもの健康・安全	
「保育を高めるリスクマネジメント～ヒヤリハット集計後の事故回避の取り組み～」	
守屋 美智子・李 美和	
（大阪府・社会福祉法人都島友の会 都島第二乳児保育センター） .....	13
(2) 優秀報告賞 .....	19
〈実践報告部門〉	
・ 「家庭福祉員（保育ママ）との交流、連携そして今後の展望	
～夜間保育園としてできること～	
井上 名花（東京都・社会福祉法人こうほうえん キッズタウンうきま夜間保育園） .....	21
(3) 実践奨励賞 .....	31
〈課題研究部門〉	
・ 課題研究③子どもの安全・健康	
「保育園におけるアタマジラミ感染時の対応と取り組み～事例を通して～」	
小島 祐子（東京都・社会福祉法人東中川会 亀有りりおっこ保育園） .....	33
・ 課題研究③子どもの安全・健康	
「未然に事故を防ぐための保育士のリスク・マネジメント	
～保育環境と事故・ヒヤリ・ハットを通して見えてきた事から～」	
運天 美咲（沖縄県・社会福祉法人玉重福祉会 第2 愛心保育園） .....	42

〈実践報告部門〉

- ・「園庭のない保育所の環境設定～楽しく身体を動かす室内遊びの工夫～」  
杉浦 悠（東京都・公益財団法人鉄道弘済会 南千住駅前保育所）……………51
- ・「子どもが楽しく絵を描くには～はじめてのお絵描きから描く楽しみへ～」  
鳥井 美幸（新潟市・公益財団法人鉄道弘済会 新津保育所 さくら保育園）…58
- ・「壁でつながる0歳児からの発達～我が園の名物となった『壁のぼり』～」  
笠井 博嗣・片桐 広絵・小橋 紀子  
（大阪府・社会福祉法人都島友の会 都島東保育園）……………65
- ・「いろんな遊びを楽しもう！～健やかな心と体の育ちのために～」  
渡部 靖子・津田 祐子（島根県・公益財団法人鉄道弘済会 松江保育所）…………75
- ・「子どもの笑顔は、保育士の笑顔から  
～保育士の幸せな笑顔が絶えない保育園は子どもの笑顔もあふれている～」  
新城 利奈子（沖縄県・社会福祉法人玉重福祉会 愛心保育園）……………81

**(4) 奨励賞** ……………89

〈課題研究部門〉

- ・課題研究②遊びと学び  
「「絵本の環境設定」強まる親子の絆・広がる心の世界」  
北村 法子・飯嶋 和美・石井 美沙紀  
（東京都・社会福祉法人東京弘済園 弘済保育所（おひさま保育園））……………91

〈実践報告部門〉

- ・「見直そう保育—よりよい保育をするために—」  
渡部 忍（兵庫県・宗教法人願行寺 みなと保育園）……………96
- ・「月齢にあった歩育生活を楽しむ  
～体を動かして楽しく園生活を送る為の体づくりを目指して～」  
中崎 朋美（鹿児島県・幼保連携型認定こども園建昌保育園）…………… 115

「保育実践研究・報告」企画・審査委員会

- 天 野 珠 路（日本女子体育大学准教授）
- 井 桁 容 子（東京家政大学ナースリールーム主任保育士）
- 石 川 昭 義（仁愛大学教授）
- 岡 田 澄 子（見和めぐみ保育園園長）
- 委員長 小 林 芳 文（横浜国立大学名誉教授・和光大学名誉教授）
- 酒 井 かず子（金目保育園園長）
- 日 吉 輝 幸（平和こども園園長）

---

# 1. 総 評

---

総評 委員長 小 林 芳 文



今、我が国では「保育に関わる事柄」に熱い視線が注がれ、多くの意味から「保育の新時代」としてのステージに入りつつあります。日本保育協会では、10年以上前から保育の専門性の向上を図るため、保育士等が日々の保育を振り返り、検証していく保育実践に関する研究・報告が可能となる機会を作り、それに関わる研究募集を行い平成28年度で第11回を数えるに至りました。募集要綱は、機関誌「保育界」4月号(平成28年)の付録として協会の全会員施設に配布し、昨年11月の締め切りでは全国から多数の応募がありました。保育関係者が日々の保育等で研究・実践に十分な時間を費やせないと思われる現実の中で、子どもたちの成長や発達を願って意欲的に取り組まれ、前向きに応募された保育士等関係者に、賛辞を送り感謝を申し上げます。

募集要項に挙げている「実践に関する研究・報告の部門」については、課題研究部門と実践報告部門の2部門を設けています。テーマを選んで研究を行う課題研究部門は、①人との関わり、②遊びと学び、③子どもの健康・安全のテーマを定め、また、自由なテーマでの実践報告部門は、日誌に記載された日常の実践事例、日々の記録の中から得られた報告、施設(地域)での連携、特別な配慮の必要な子どもの保育、子育てに関する家庭支援に関するもの等になっています。今回は、課題研究部門が5件、実践研究部門が8件、合計13件の応募がありました。

審査委員会では、応募作の研究・報告を評価し協議して各賞を決定しました。最も評価の高い「優秀研究賞」には今回該当が無く、課題研究部門で「研究奨励賞」が2件、実践研究部門で「優秀奨励賞」が1件という結果になりました。応募状況を見れば、同じ法人の複数の園からの応募や、以前に発表した報告を継続したものなど法人としてこの事業への応募を一つの目標に向けて取り組んでいることが伺われました。

テーマとなる取り組みの内容としては、これまでの応募作では食育に関する報告が多く、近頃は事故防止対策や運動遊び等の報告が目立っていますが、今回は、園庭の無い園の保育の取り組みや近隣の保育ママとの連携事例の報告、配慮を要する子どもの保育実践等、保育に関わる多様な時の課題に対応しようとする報告が見られるようになりました。

なお、応募作の審査は、企画審査委員会が行い応募していただいた全ての研究・報告に対して、各3名の審査委員からそれぞれの講評を添え、応募者の努力を称え、今後の保育実践や保育内容の向上と取り組みの充実に資するようフィードバックに繋げた評価をしました。応募作の審査では、「実践研究・報告の目的や課題を明確に示し、それに対してどのように取り組んでいったかの経過等について、それが客観的・具体的に記述され、それに対して適切な考察がなされ、また問題提起が明確か、オリジナリティーはあるか、資料(データ)は適切か等」で全体として評価を行いました。

今回、タイトルや背景、目的から見ても分かるように取り組み作に新規性を強く感じました。それは今後の保育の方向性を定める先駆性にも繋がることであり、保育の幅の広い包括性を確認できたことになり大変満足しています。更なる研究・報告を期待したいと思います。



---

## 2. 入賞作の紹介及び講評

---

### (1) 研究奨励賞

#### 〈課題研究部門〉

- ・課題研究①人との関わり

「共同体感覚・自己肯定感を育むさくらちゃん保育」

田中 ミサ（福岡市・社会福祉法人香蘭育成会 しおぼる保育園）

- ・課題研究③子どもの健康・安全

「保育を高めるリスクマネジメント～ヒヤリハット集計後の事故回避の  
取り組み～」

守屋 美智子・李 美和

（大阪府・社会福祉法人都島友の会 都島第二乳児保育センター）



## 課題研究① 人との関わり 共同体感覚・自己肯定感を育むさくらちゃん保育 ～年長児ひかり組25人、1年間の成長記録～

福岡市・社会福祉法人香蘭育成会 しばる保育園 田中 ミサ

### 1. はじめに

これは、年長児ひかり組25人と過ごした1年間（2015年4月～2016年3月）の保育実践記録であり、研究記録でもある。私は、それまで13年間の保育士歴をもち、年長児も3度担任している。発達障害など特別な支援が必要な子どもと関わった経験もけっして乏しいわけではない。そうした経験をふまえても、ひかり組の子どもたちとの出会いは衝撃的であったし、これからの1年間を思うと不安でいっぱいだった。

経験で培ったものだけでは乗り越えられないと感じたとき、はじめて本気で保育・教育・心理学に関する専門書や研究論文を貪り読んだ。子どもをどう受けとめたらよいか、クラスをどのような方向に導いたらよいか、そのための具体的方法は何かなど、次々と問いが生まれた。その問いに少しでも応えてくれそうな手がかりがあれば、さっそく次の日に実践で試してみるという毎日だった。そういう日々の積み重ねのなかで、いつのまにか当初抱いていた不安は消え、子どもと過ごす一日を朝から楽しみにしている自分がいた。

そこで本稿では、第一に、ひかり組の子どもたちとの出会い、私が子どもの姿を現実としてどう捉えたか、1年間の保育のねらいをどのように設定したかまでの経緯を述べる。第二に、そのねらいを実現するための方法として、赤ちゃん人形のお世話（以下、さくらちゃん保育）を導入した経緯について述べる。第三に、ひかり組の子どもたちに、さくらちゃん保育を通して具体的にどのような変化があらわれたか、さくらちゃんと子どもたち、子どもたち同士の関係性という視点から整理する。最後に、1年間の保育の成果を振り返りながら、さくらちゃん保育の果たした役割についてまとめた。

### 2. ひかり組の子どもたちとの出会い

私は、年長児ひかり組の担任をする前年度、つまり2014年度は、2歳児を担当していた。同じ園内の園児なので、当然のことながら、当時4歳児クラスであった子どもたちの様子について職員会議等でたびたび報告も受けていた。クラス運営の困難さは傍で見てもよくわかった。さらに、その困難さのもとになっているのは、発達障害、虐待経験、片親家庭と複雑な背景をもつA男であることもわかっていた。障害の特徴である攻撃性、衝動性を抑えられないA男は、乱暴な言動が見られるため、他の子どもたちからも恐れられていた。

4月、担任としてはじめてひかり組の子どもたちと関わったとき、気になったのは、子どもらしい関連さがほとんど見られなかったことである。何をすることも担任の顔色を伺い、許可を求める言動も気になった。

子ども同士の関係性は不安定そのものであった。意欲が感じられず、発する言葉は弱々しく、皆が自信のない様子だった。自分に自信をもってほしい。自分に短所や欠点があっても、子どもたち一人ひとりが、自分の存在を自分で受け入れる気持ちをもってほしい。これが最初に設定した保育のねらいであった。

それでは、そのために保育者は何をしたらよいのだろうか。以下は、紆余曲折を経て、そうした保育のねらいを実現するために、さくらちゃん保育を開始するに至るまでの経緯を整理したものである。

### 3. 自己肯定感を高めるということ

自分に自信をもつということ。自分の存在をあるがままに受け入れること。近年、こうした考え方は、自尊心や、自己効力感・自己有用感・自己肯定感などと呼ばれ、教育・保育の世界でもさかんに注目されている（以下、自己肯定感に統一）。

これは個人の問題にとどまらない。一人の子どもが自己肯定感を保てないことで、日々の生活のなかで、さまざまに傷つき、不安を抱えたり、無力感を覚えることが増える。そのストレスがうまく処理できなければ、その感情は、より弱い他者へと向けられるようになる。それは悪循環サイクルとなって、クラス全体へと波及する。子ども同士のいじめなどはその典型である。

その一方、自己肯定感を高めるためにどのような方法が最も有効であるかについて、統一した見解がないこともわかってきた。一般的に考えられるのは次のような方法であろう。それは、それぞれの子どものもつ、好きなことや優れたところを、大人（親や保育者）が褒めてあげる、というものである。絵を描くことやスポーツなど、その子ならではの得意なことに価値を認めてあげれば、自信につながり、それを積み重ねることで、その子らしさというアイデンティティの形成に役立つ、というものである。しかし、これには思わぬ落とし穴もある。ここでの評価は大人から子どもへの一方的なものであり、他の子どもとの比較によって、かえって自己肯定感を低下させるということになりかねないからである。

これに対し、自己肯定感を、他者との関係から捉え直

すという動きもあることがわかった。自分がどう評価されるかということよりも、他者をありのままに見つめ、受容する。他者のために自分ができることを行い、そこに喜びを見いだすという経験が、自己受容、ひいては、自己に対する見方を肯定的なものにするという考え方である<sup>(1)</sup>。

#### 4. アドラーの「共同体感覚」と「勇気づけ」

こうした考察を続けていくうちに、心理学者アルフレッド・アドラー (Alfred Adler 1870~1937) の提唱した「共同体感覚」<sup>(2)</sup> という概念に出会った。アドラーは、私たちは他者に対して貢献、つまり役立っていると感じるときに、自分が価値のある存在であることを実感できるとした。集団や全体に貢献しているときに抱く感情を「共同体感覚」と呼び、それは生まれつきのものではなく、意識的に発達させなければならない先天的な可能性である<sup>(3)</sup>、と述べている。また、アドラーは、教育困難と見なされる子どもたちは、他の人の幸福に関心がないこと、さらに、共同体感覚、楽観主義、勇気を欠いている<sup>(4)</sup>、とも述べている。

ここから、ひかり組の子どもたちにとって、「共同体感覚」を身に付けることが最も大切であることを直観した。しかし、そのためにどのような方法が有効であるのか、どのような手順で進めていけばよいか見当もつかなかった。その後、アドラーに関連する研究書を読み進めるうち、ヒントや手がかりになるものを見つけた。

たとえば星一郎は、アドラーの心理学を大人が「子どもと対等に付き合うためのノウハウ」<sup>(5)</sup> であると位置づけ、なかでも、「勇気づけ」が最も重要であるとした。星は、勇気づけの最終目標は、「仲間とともに生きる感覚を養うこと」<sup>(6)</sup> とし、次のように述べる。

勇気づけの目的は、自分が世の中に役立っている人間だということ、そして最終的には世の中はみんなの協力で成り立っているんだという共同体感覚を育てることです<sup>(7)</sup>。

星と同様に、アドラー心理学における「勇気づけ」の価値を重視する古庄高も、「親や教師は、まずくほめる一叱る>やり方をあらためて、<勇気づけ>の方法を学び、<勇気づけ>を実践する必要があります」<sup>(8)</sup> と述べる。古庄によれば、その勇気づけの方法とは、次のようなものである。

勇気づけはまず、日常のさりげない行為に対して、ひと言声をかけることから始まります。子どもが手伝ってくれたら「ありがとう」「助かった」とお礼を言い、子どもが頑張っていて活動していたら、「楽しくやっているみたいだね」「一所懸命にやってくれて、うれしいな」「うまくいっているね」と声をかけます。……

中略・・・他者への関心や思いやりを示すときなど、たとえそれが当たり前で平凡なことであっても、ひと言声をかけ、勇気づけます。それが大事です<sup>(9)</sup>。

日々の保育を、子どもへの「勇気づけ」を柱として組み立て直すことはできないか。それによって、子どもたちの他者に対する思いやりや自己肯定感が高まり、ひかり組全体が良い方向に変わるのではないか。ここで生まれたアイデアから、かすかな希望の光が見えてきたように感じた。

#### 5. さくらちゃん保育の始まりと子ども同士の関係性の変化

##### さくらちゃんのお披露目

子どもの得意なことに「すごいね」ではなく、当たり前でさりげない平凡な行為に「ありがとう」と声かけできるような機会をもうける。そこで出会ったのが、畑野相子らの論文である。この論文は、介護施設に入所している認知症のお年寄りに、心理療法として、赤ちゃん人形のお世話をしてもらったところ、攻撃性がなくなり、症状の改善がみられた他、家族を思いやる言動が見られるようになったというものであった<sup>(10)</sup>。

4月下旬、さっそく園で赤ちゃん人形を購入してもらい、それを子どもたちがさくらちゃんと名付けた。子どもたちに伝えたのは、さくらちゃんをひかり組26人目の仲間として受け容れてもらうこと。ただ、まだ赤ちゃんであるので、みんなでお世話をしてほしい、ということの二つだった。

受け止め方は子どもによって様々だった。お世話をしたいと目を輝かせる子どももいれば、興味や関心を全く示さない子どももいた。願っていたのは、子どもたちに、自分より弱く助けを必要としている存在をいつも気にかけて、大切にしてほしいことだった。それをみんなで認め合うことで、ひかり組全体の「共同体感覚」を育てたいと思った。

アドラーによれば、「人間がもつすべての悩みは対人関係の悩みである」<sup>(11)</sup> という。ひかり組という共同体において、子どもたちが互いに人間関係の悩みを乗り越え、良好な関係を結ぶことが安心な居場所づくりとなり、自己肯定感の向上を促すことにつながってほしい。以下、さくらちゃんと子どもたち、子どもたち同士という、2つの関係性の変化についてみていきたい。

##### さくらちゃんと子どもたちとの関わり

さくらちゃんを導入したことの効果は、想像をはるかに超えていた。それは、一番に飛びついたのがA男であったことと関係しているかもしれない。A男はさくらちゃんに誰よりも興味を抱き、またお世話をしたかった。それまで他の子どもたちへ向けられていたA男の攻撃性のエネルギーは、まるでさくらちゃんが吸収してくれて

いるかのように沈静化した。保育士の「ありがとう」という言葉に、A男はいつも満足そうな笑みを浮かべた。

また、A男に限らず、他の子どもたちも、先を争うようにさくらちゃんのお世話をしたがるようになった。また、お世話をしたがるのは、家庭の事情で保護者からの愛情を十分に受けていない子どもたちであることにも気がついた。同時に、それらの子どもたちは、担任からの「ありがとう」の言葉をいつも求めているようだった。この

ように、さくらちゃんを通して、子ども一人ひとりの抱えている家庭での問題が見えてきたことは大きな発見であった。6月上旬には、さくらちゃんのお世話で小競り合いが起きることもあったので、二人一組のパディシステム<sup>(12)</sup>で行うことにした。当番表をつくって子どもたちに提示したところ、この提案を素直に受け入れてくれた。



## 子ども同士の関わり

A男の行動に落ち着きがみられたことで、他の子どもたちのA男に対する見方も徐々に変化していった。それまでA男を怖がってばかりいた子たちが普通に接することができるようになったのである。もちろん、A男の予期せぬ行動が無くなったというわけではなかったが、A男のさくらちゃんへ注ぐ「やさしさ」を認めているためか、A男が起こす迷惑行為にも見通しが持てるようになり、A男のさくらちゃんの独占ぶりを「しょうがないなあ」と言いながら、譲ったり受け容れようとしているという印象を受けた。

不思議なもので、A男に対する見方の変化は、やがて、どんな子どもにもよい面と悪い面があるということ、お互いがあるがままに受け容れようとする空気の変化をクラス全体にもたらした。これは子ども同士がけんかをしなくなり仲良くなったという意味ではない。うれしかったこと、怒っていることなど、自分の感情をきちんとお



互いにぶつけてもいいということ。その安心感が生まれて、お互いの存在を認め合えるような関係がつくられていったのではないかと思う。存在を認め合うということは、そこに居場所が生まれることだと思う。

さくらちゃんを導入してから5ヶ月後の9月には、10月の運動会に向けて、練習の日々が続いたが、ひかり組として結束力はもちろんのこと、年長児らしく全体を引っ張っていきこうという責任感やたくましささえ感じられた。さらに、12月の生活発表会では、さくらちゃんを劇に登場させたいという子どもたちからの要望を受け、完成していた脚本を急遽書き換えることになった。子どもたちはこれらの園行事に限らず、日常の生活場面においても、いつもさくらちゃんを気にかけてくれた。さくらちゃんは、ひかり組にとって「思いやり」の象徴のような存在だった。さくらちゃんをめぐる心温まる楽しいエピソードは翌年3月の卒園式まで絶えることはなかった。



## 6. まとめ

問題を抱える子どもがいる。保育士がその子どもの対応に振り回され、クラス全体に目が行き届かなくなり、やがて日々の保育活動に大きな支障が出るようになる。これは、どの園においても起こり得ることであるし、現実に起きていることであろう。1年間のさくらちゃん保育を通して学んだことは、ひとつの問題に固執せずに、全体として何が問題なのかをじっくり考えるということだった。全体としての問題に対処することで、実際に、子ども一人ひとりの課題がより鮮明に見えてきたり、子ども同士の人間関係に変化があらわれることがある。小さな変化を見逃さず、そこに喜びを見出し、クラス全体の人間関係へとつなげていくということ。そうした日々の保育の営みは、保育者の自信へとつながり、やがて子どもたちとの絆をより深いものにするということも、この実践を通して学んだ。

また、さくらちゃん保育は、園長先生をはじめとして、

他のクラスの先生の協力なくしては成り立たなかったこともここで付け加えておかなければならない。さくらちゃんをひかり組の一員と認め、ひかり組の子どもたちに温かい声かけをしてくれた先生、冬休みにさくらちゃんを自宅に連れ帰ってお世話をしてくれた先生、すべてがさくらちゃんのために洋服をつくってくれた先生、すべてがさくらちゃん保育の実践者である。2016年3月、ひかり組の子どもたちの卒園を見送ったさくらちゃんは、今年度、新たな年長児クラスの一員として変わらぬ存在感を発揮し続けている。

## 註および引用文献

(1) 対人関係療法という分野でそうした動きがみられる。その利点は、自身の能力を高めることよりも他者への認識を変える方が容易であるし、それによって、人との関係性も改善し、自己肯定感も高まるというもの。(たとえば、水島広子『自己肯定感、持っていますか？—あなたの世界を変える、

たったひとつの方法―』大和出版、2015年。)

(2) フロイトやユングと並んで臨床心理学を体系づけたアドラーの心理学理論において、「共同体感覚」は重要な概念であり、近年、心理相談や、教育実践分野、とりわけ学級経営において有用な理論と技法を提供していると注目されている。

(3) 岸見一郎『アドラーを読む―共同体感覚の諸相』アルテ、2006年、42頁。

(4) A.アドラー著、岸見一郎訳『教育困難な子どもたち―アドラーセレクション』アルテ、2008年、168頁。

(5) 星一郎『アドラー博士の子どもを勇気づける20の方法』サンマーク出版、2008年、43頁。

(6) 同上書、38頁。

(7) 同上書、39頁。

(8) 古庄高『家庭と学校に活かすアドラー心理学』二瓶社、2013年、61頁。

(9) 同上書、64頁。

(10) 畑野相子ほか「認知症高齢者の攻撃性に対する赤ちゃん人形療法の効果」『人間看護学研究第9号』2011年、21～35頁。

(11) このことは、次の文献にくわしい。岸見一郎、古賀史健『嫌われる勇気―自己啓発の源流「アドラー」の教え―』2013年、ダイヤモンド社。

(12) バディとは、もともとは男同士の友達・仲間を指す言葉であるが、二人一組になって、お互いを見守り助け合う方法をバディシステムとって教育現場でも近年よく用いられるようになっている。

講評：共同体感覚・自己肯定感を育むさくらちゃん保育  
～年長児ひかり組25人、1年間の成長記録～

評者：天野 珠路

年長児を受け持った保育士が、子どもたちの自己肯定感を高めるために試行錯誤しながら取り組んだ1年間の記録です。家庭に問題を抱え不満を発散したり、大人の顔色をうかがったりと子どもらしい闘達さがない様子を案じ、模索する保育士の真摯な態度が文面から伝わってきます。

様々な専門書を読み、手がかりを探す保育士が出会ったのはアドラー心理学でした。アドラーが提唱した「共同体感覚」をキーワードに、子どもたち一人ひとりが人の役に立ち価値のある存在であることを実感できるようになるにはどうしたらよいか、保育士は考えます。そして、一種の心理療法として行われている赤ちゃん人形の世話を取り入れようとしています。ここに見られる保育士の探求心や、4月下旬にはさっそく実行に移すその行動力に感心させられます。

かくしてひかり組26人目の仲間として「さくらちゃん」を受け入れ、世話をしたり、可愛がったりすることを通して子どもたちが変化の様子が報告されます。さくらちゃんをめぐる心温まるエピソードがもっと具体的に記されていれば、さらに園の乳児や小さい子どもたちとの関わりにつながられていれば、厚みのある実践研究となったでしょう。

評者：岡田 澄子

今まさに我が園の4歳児もクラス運営が困難で、担任が青色吐息で保育をしている状態なので、大変興味深く読み、田中先生の保育に対する情熱、勉強熱心な姿勢に感銘を覚えました。

介護施設等でお年寄りに使われる「赤ちゃん人

形」をひかり組の仲間にししましたが、これが縫いぐるみや小動物だったらどうなったのか少し気になりました。

写真も添えられていて読みやすいレポートにはなっていますが、写真にコメントがあるとよかったですのではないかと思います。

また、ほかのクラスの先生たちはさくらちゃんのお世話はしたようですが、A男くんにはどのように接していったか等も記載した方がよかったです。

A男くんたちの卒園を見送ったさくらちゃんは新たな年長児クラスの一員になったとあります。そのクラスでのさくらちゃんと子ども達の様子も知りたくなりました。

評者：小林 芳文

本研究は、今日的な保育における子ども同士の間関係に結びつくテーマ設定として受け止め、特に「自己肯定感の向上」に結びつく保育研究として大変興味を持って読ませていただきました。研究の背景には、発達に障害を持ち、虐待の経験があるA男の保育をどのように進めたらよいか、そこにA男のみならずクラスの子どもたちにとって「共同体感覚」を身につけることの仮説をあげて、「さくらちゃん人形」を介在しての展開、保育園ならではの素晴らしい実践研究でした。人形導入の保育効果は、想像を遙かに超えた姿として変化したこと、攻撃性のエネルギーは、人形が吸収してくるかのよう沈静化したこと、子ども同士の関わりもスムーズになったり、生活発表会まで人形が登場した報告があり素晴らしい実践研究になっています。願わくば、A男の発達の詳細や写真の簡単な説明があれば、より説得力のある実践研究になったかと思えます。

## 課題研究③ 子どもの健康・安全 保育の質を高めるリスクマネジメント ～ヒヤリハット集計後の事故回避の取り組み～

大阪府・社会福祉法人都島友の会 都島第二乳児保育センター 守屋 美智子・李 美和

### はじめに

社会福祉法人都島友の会は、大阪市内に幼保連携型認定こども園3ヶ園、保育園を5ヶ園、児童発達支援センターを運営しています。約1,100名の園児に、安全安心な保育教育・療育を提供するため、平成25年度より、法人のリスクマネジメント部会で、法人各園から提出された「ヒヤリハット」を分析し、対策を立てる取組みを実施しています。

第9回「保育所保育実践研究・報告」募集に、当法人のヒヤリハット事例の集計結果を分析した研究「保育の質を高めるリスクマネジメント～ヒヤリハットを共有し事故を回避する～」を応募し研究奨励賞を受賞しました。審査委員会から、今後、「安全対策の具体的な取組を行い、それがヒヤリハットの軽減にどのようにつながっていったかを検証できるように研究が継続されることを期待する」「分析を生かした具体的な対策を実施し、保育の充実向上につながることを期待する」「保育の質を高めるといことと、リスクマネジメントとの関連性をさらに深く研究し実践していかれることを期待する」との講評をいただいたところです。

ご指摘の通り、ヒヤリハットの集計そのものが事故を回避するわけではなく、そこからの気づき・考察をどう実践し、事故の回避に繋げるかが本来の目的です。過去のデータをもとに各園で対策を実施していますが、平成27年度実践した事例から、「リスクマネジメント委員会」が、全職員を対象とする研修会で発表した事例を3件ご報告します。

### 【事例1】トイレ誘導の時間変更による事故防止 こども発達サポートステーションそれいゆ

こども発達サポートステーションそれいゆは、障がい児通所施設です。園児数は30名で、職員体制は、障害の程度にかかわらず4：1の対応となっています。平成27年度も重度の子どもが多く、日々対策を考えて取り組んできました。

例えば、ブロック遊びで家を作っているところにお友だちが走ってきて壊されてしまう、狭い場所や園児の密度が高い場所では過度の接触となり、自己防衛のためつい手が出てしまうなどのトラブルが発生しやすく、また、小さなトラブルでも自分の気持ちを言葉で伝えることが難しい子どもが多いため、すぐに手が出たり、囁

みつきに繋がります。1人の泣き声などでパニックになるなどの二次的なトラブルが起こることもあります。

### ●13：00の時間帯に集中するヒヤリハット

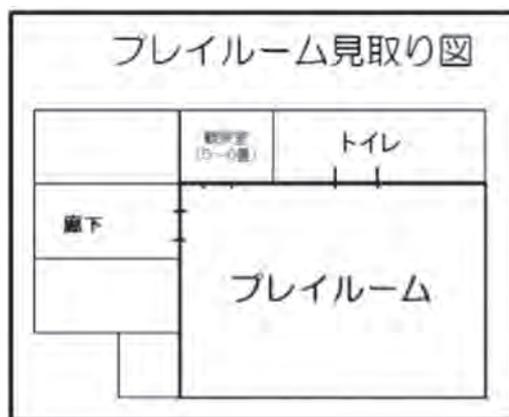
平成27年7月～9月の集計によると、この時間帯の中でも「嘔みつき・ひっかき」のヒヤリハット件数は、プレイルームで、給食後に30名がクラス合同で過ごす自由遊びとトイレ誘導の15分ぐらいの時間に集中していました。

### ●原因と防止策の検討

原因として次の3点が考えられました。

#### ①トイレがプレイルームにしかない

食後13：00から13：30までは、園庭やプレイルームなどを使用し、子どもたちの興味に合わせて分かれて過ごしています。しかしトイレが1か所にしかないため、どうしても混み合ってしまう。



②トイレ誘導のクラス間の時間差が短い

トイレ誘導はクラスごとに時間差を設けているものの、個別対応を行うのでどうしても時間が重なり、職員の手がとられる。結果、プレイルームで全体を見守る職員の数が少なくなる。

③トイレ誘導の間は、クラス合同となり30人がプレイルームにいる。

その対策として、クラスごとに時間差をつけてプレイルームに入り、トイレ誘導を終えるごとに、各療育室に戻るようにしました。時間差をつけることにより、プレイルームに同時間帯でいるのは15人～20人となりました。

その結果、13：00時間帯のヒヤリハット件数は実施2か月後、表2の通りとなり、噛み付き・ひっかきの件数も半減しました。

表1

	園庭遊びを終える時間	療育室に戻る時間
きりんぐみ	13：20	13：40
うさぎぐみ	13：30	13：50
ぼんだぐみ	13：40	14：00

表2

(噛み付き・ひっかき)			
	13：00時間帯	実数	未遂
7月～9月	38件	31件	2件
	↓	↓	↓
10月～11月	24件	17件	1件

●所見

事故、けがが起こらないように、日々対策を考えていますがなくなることはありません。しかし、ヒヤリハットを記入して集計し数値化することで、問題点に気づくこともでき、職員一人ひとりの意識づけもできました。さらに、噛み付き・ひっかきの実数、未遂の件数が減少したので、取り組んだ成果が数値としてあらわれ、よかったと実感できました。

【事例2】ヒヤリハットの用紙・集計の工夫と危険個所リストの作成

都島乳児保育センター・都島第二乳児保育センター

ヒヤリハット事例があれば、日毎に、名前・発生した時間・場所・トラブル・状況・職員の配置と意識の項目に沿ってヒヤリハット用紙に記入しています。

施設内のリスクマネジメント委員会で用紙の項目について検討した結果、トラブルの記入方法が個人により差がありケガの状況・原因について詳細が分からない、記入者が誰なのか分からない、「冷やり！ハッ！」とした事例があっても記入し忘れるという点でした。また集計がやりにくい、解りづらいなどの意見があり、平成26年度から改善を行いました。

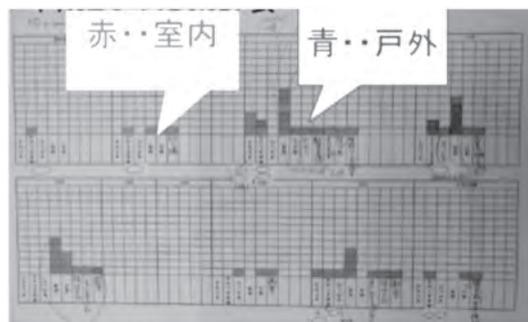
●ヒヤリハット用紙の項目の見直し

- (1) 平成26年度からトラブルの欄を「ケガ」と「原因」に分け、用紙の下欄に記入例文を載せるようにしました。例えば、噛み付きであれば「ケガ」は「内出血」、「原因」は「噛み付き」となります。また、他クラスの職員が噛み付きや、ひっかきの傾向がわかるように、「噛み付いた子ども」「噛み付かれた子ども」双方の名前も記入するようにしました。
- (2) 記入者の欄を設けました。
- (3) 記入漏れについては、園長・主任の検印をもらうことで提出前にお互いに声を掛け合うようになり、記入漏れはほぼなくなりました。

●集計表の見直し

毎月、ヒヤリハット事例を時間帯毎に集計しています。平成26年度から集計表の記載方法を工夫し、園内の事例の傾向や、事故防止のための職員の共通認識をより作りやすくしました。

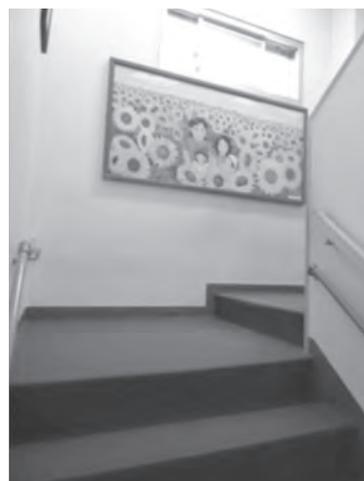
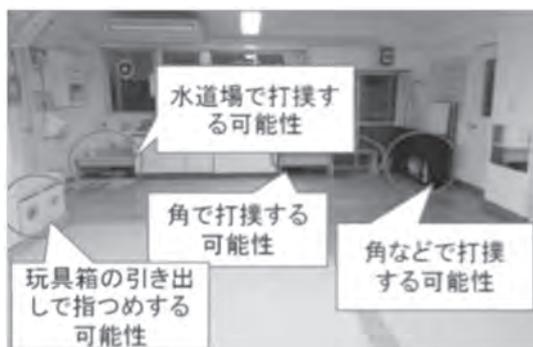
具体的には、色分けをして一目でわかるようにしました。室内で起きたヒヤリハットを「赤色」、戸外活動中に起きたヒヤリハットを「青色」で示し、戸外は場所が異なるため、公園の名前なども具体的に記入しています。また、「噛み付いた子ども」「ひっかいた子ども」の名前をグラフの下に記入し1カ月間の件数を確認できるようにしています。



●事故の未然防止のために～危険箇所リストの作成

園児の行動は予想を超えるものがあり、事故を未然に防止するためには、職員一人ひとりが事故の発生する可能性がある場所を知っておく必要があります。とりわけ新人職員が気をつける個所を認識することは重要です。このため、平成26年度の初めに各クラスの保育室・トイ

レ・階段などの全体の写真を撮り、クラスの職員間で話し合い、打撲する可能性、つまづく可能性、指を挟む可能性などを再チェックし、危険箇所を把握しました。写真は53枚になりました。職員全員に共通意識を作るため、この危険箇所リスト用紙を各クラスに回覧するとともに、事故防止に活用しています。



【事例3】噛み付き児（1歳児）への保護者対応  
幼保連携型認定こども園 成育児童センター

1歳児で噛み付きの多い園児（一人っ子）がありました。職員が気をつけていても1日に10回程、また1人の園児に集中することもあり、園では噛み付きの原因、防

止策と保護者への対応について検討していました。この園児は、クラスの他の子どもの声でイライラする、大きな声を出すといった様子が見られたので、噛み付き防止のため少人数でスキンシップをとることにする、気分転換のために外に出ることとしました。このような中、園児が母親の肩を歯形がつくほど噛ん

でしouxことがあり、家ではどのような時に嘔んだりするのかが聞いてみると、「特に理由のない時もあるが、思い通りにいかない時などの場面が多い」との答えでした。

園でもそのような場合に友だちを嘔むことがあることを伝え、園としては「外でたくさん遊ぶようにしたり、必要に応じて少人数で部屋を離れ園内を散歩したり、気分転換を図れるようにしている」と伝えました。

その時に、家庭での過ごし方を伝えたわけではなかったのですが、たまたま父親が保育士の免許を取得していることも関係したのか、それ以後、保護者からは、「涼みがてらに家族3人で出かけたり、週末もたくさん遊んだ」ということが「おいたちの記」（保護者と園との連絡ノート）に記されていました。

これ以後、2カ月ほどでこの1歳児のかみつきは日ごとに軽減していったのです。

嘔み付きなどのヒヤリハット事例を減少するためには、園での取り組みとともに、保護者にその対応について理解をいただくことが重要ではないかと考えています。

## まとめ

以上、ヒヤリハット事例の検証、リスクマネジメントの観点からの各園の取り組みの一部を報告しました。ヒヤリハット事例の提出や集計が、リスクマネジメントのモチベーションを上げ、リスクマネジメントを真摯に実行する動きに繋がったといえるのではないかと考えています。

法人のリスクマネジメント部会では、今統計を縦軸にみることも試考しています。

年度ごとに統計をみるだけでなく、4～6月・7～9月・10月～12月・1月～3月というような季節ごとの集計を、数年間を通して見る試みです。

子どもの年齢によって事故やヒヤリハットの内容はかなり違います。ヨチヨチ歩きもあれば、走ってのぶつかり合いもあります。その年度内、わずか1年の間であっても、子どもたちの成長や年中行事によって、事故やヒヤリハットの様子はかなり変わってきます。データをもとに、事前に、「この時期ならこうした事故やヒヤリハットが多くなる」というような、いわば予見的な事故防止のマネジメントができるのではないかと考えています。

また、子どもたち個々への声かけにも工夫することで、子ども自身も「気をつけよう」とする気持ちがより伝わるのではないかと。そして子どもの年齢に応じ発達しなければいけない筋力等の関係にも目を向けることで事故防止ができるのではないかと話し合っています。『継続こそ力なり』ではありませんが、積み重ねたデータの力と子どもたちの体の発達関係を観察することで、より多くの事故を防止できればと考えております。

ヒヤリハットの集計が、事故防止のデータとなるためには、時節ごとの数年度にわたる集積と観察する目こそが大切ではないか、このテーマについては、今後も継続して調査したいと考えています。

講評：保育の質を高めるリスクマネジメント  
～ヒヤリハット集計後の事故回避の取り組み～

評者：石川 昭義

今回の研究は、平成26年度の研究（第9回研究奨励賞）を踏まえた継続的な研究であり、9施設を運営する法人として「リスクマネジメント部会」や「リスクマネジメント委員会」を設置して事故回避に取り組んでいることを評価したい。

事例1においては、数値による検証結果が示されたことはエビデンスを示すという意味で大変有効である。この客観的な数値化を今後の研究に取り入れることが望ましい。事例2においては、ヒヤリハット用紙の記入項目を工夫するとともに危険個所リストを作成したことが新人職員への啓発に生かされたことがわかりやすく説明されており、他の園の参考になると思われる。したがって、そのような啓発によって、新人職員はもとより新人以外の職員にどのような影響があったかについても考察があるとよかった。今後は、危険個所リストのより有効な活用方法を提案してもらいたい。また、一連の取組を通して職員にどのような意識を作り出し、実際どのように事故の軽減につながっているのかの検証ができるように研究が継続されることを期待したい。

評者：岡田 澄子

とても簡潔にまとめられたレポートで、第9回の実践研究・報告で研究奨励賞を受賞し、それを継続した報告です。

9か所の施設を運営する法人で、リスクマネジメント部会が「ヒヤリハット」を分析し、対策を立てる取組を実践。そして、研究を継続発展させました。それを全職員を対象とする研修会で発表しました。

全職員が同じ方向を向いて保育をすると、事故をどのように回避したらよいか等事故の未然防止につながっていくでしょう。

危険個所リスト用紙は、危険個所を写真入りでさらに写真にコメントを付けたので見やすいものになっています。新人職員や転勤した職員も保育しやすいのではないかと思います。

保育園、特に乳児室では、噛み付きが悩みの種になることがあります。やはり保護者との連携が大切だと痛感しました。

今後も継続して調査したいと記していますので、次回の応募が楽しみです。「継続は力」といいますので、頑張ってください。また、この報告書により、貴法人のリスクマネジメント部会のような会が多く誕生することを望みます。

評者：小林 芳文

本研究は、第9回の実践研究を受けてその継続として取り組まれ、今回の研究に活かされたテーマ設定としての研究であり嬉しく思います。以前の講評を受けて、同法人の各園が事故回避の取り組みへの具体的な対策を実施して、日頃の保育の向上に向けて、その成果を職員研修会で発表し合い整理されたことの実践事例の3例が取り上げられています。もう少し事例数を増し、詳細を加えれば研究に重みが付いたように思います。事例1の障がい児通所施設の所見では、ヒヤリハットの用紙を活用することで、職員一人ひとりの意識づけもでき成果を確認できたとのこと、また、事例2ではヒヤリハットの用紙や記入の見直しで事故防止の職員間での共通認識が生まれたこと等研究の成果が伝わって来ました。今後も実践を積み重ねて、さらに事例やデータを加えて子どもの健康安全を見守ってください。



## (2) 優秀報告賞

### 〈実践報告部門〉

「家庭福祉員（保育ママ）との交流、連携そして今後の展望  
～夜間保育園としてできること～」

井上 名花（東京都・社会福祉法人こうほうえん  
キッズタウンうきま夜間保育園）



## 〈実践報告部門〉

# 家庭福祉員（保育ママ）との交流、連携そして今後の展望 ～夜間保育園としてできること～

東京都・社会福祉法人こうほうえん キッズタウンうきま夜間保育園 井上 名花

### はじめに

社会福祉法人こうほうえんキッズタウンうきま夜間保育園は、キッズタウンうきま保育園と共に、東京都で初めての一般園・夜間園の併設園として平成19年4月に開園した。

施設は、保育園・老人介護施設・障がい者就労支援施設を併設した複合施設でもあり、都内でも数少ない365日開園の認可夜間保育園である。法人本部を鳥取に置き、お互いが助け合い、お互いが幸せを分かち合う「互恵互助」の精神を法人の価値として、2,200名を超えるスタッフが日々活動している。園が所在する東京都北区浮間には、自然豊かな浮間公園や、夏の花火大会などが行われる荒川河川敷があり、近所には学校や公園、スポーツ施設などがあり、子育てのしやすい環境が整っている。また、都市部へのアクセスが便利なベットタウンとして北区の中でも人口が少しずつ増えている地域で、小さな子

どもを抱える共働きの世帯が多く、地域の福祉のニーズが高まっている。

- \*法人理念 「地域に開かれた 地域に愛される 地域に信頼される こうほうえんを目指します」
- \*基本方針 「子どもと同じ視点で等しくかわりいつでも安心して利用できる保育サービスの提供、改善に努めます」
- \*保育・教育目標 「心も体も元気な子ども」
  - ①健康で元気に遊ぶ子ども
  - ②友だちを大切に作る子ども
  - ③心の豊かな子ども
  - ④自分で考えて行動する子ども
  - ⑤国際性豊かに育つ子ども

### 定員数

ほしぐみ	つきぐみ		そらぐみ		
0歳児	1歳児	2歳児	3歳児	4歳児	5歳児
5名	5名	5名	5名	5名	5名

### 職員数

園長	保育士	看護師	管理栄養士	保育補助	事務	用務
1名	11名	1名	1名 (一般園兼務)	2名	1名	1名

### 開所時間

7:00	9:00	11:00		22:00	23:00
朝移送保育	朝型延長保育		基本開所時間		夜型延長保育

★朝移送保育・・・併設の一般保育園に登園。

9時に夜間保育園の職員が迎えに行く。

### 1) 問題の提起

キッズタウンうきま夜間保育園は、11時から22時までを基本開所とし、朝型延長保育は9時からの2時間・23時までの1時間を夜型延長保育としている。朝型延長前にも保育を必要とする家庭については、一般園への朝移送保育★が利用できる。

そらぐみ（3、4、5歳児）については、就学を見据えた生活リズムや大きな集団で活動することの利点をお伝えし、早めの登園を呼びかけていて、朝は夜間園を通り抜け、そのまま一般園に登園する。日中は、歳児別クラスの25名の友だちと一緒に一斉活動や課業に取り組み、夕方の“帰りの集まり”までを過ごして夜間保育園に戻

る。ほしぐみ（0歳児）・つきぐみ（1、2歳児）は保護者と過ごす時間を保障し、保護者の勤務時間・日数に合わせた登園を勧めているため、11時以降に登園する子どもが多く、午前中に全員が揃う事は少ない。そこで、日中空いている幼児クラスの保育室や、広々とゆとりのある恵まれた環境をもっと良い方法で有効活用ができたか考えた。

私たちはこれまでに「地域に根ざしたい」という思いから、在園児の保育は元より、未就園児を対象とした一時預かり保育・園庭解放・保育所体験などの様々な子育て支援事業にも力を入れてきた。一方で、少人数で過ごしている2歳児が、3歳児クラスの大きな集団に進級した際に見られる困り感や戸惑い感をどのように軽減するかが、私たちの毎年の課題でもあった。

そこで、近隣で家庭保育室『すくすく保育室』を運営されている家庭福祉員（保育ママ）の存在を知り、「保育園に遊び来ませんか？」とお誘いしたことをきっかけに交流が始まった。

#### ※家庭福祉員（保育ママ）

家庭福祉員とは、保護者が働いている場合や病気などで、子ども（生まれた日を含めて58日を過ぎた日から2歳児まで）を家庭で保育出来ない時、保護者にかわって区市町村が認定した家庭福祉員が保育を行う制度。東京都北区の場合、区内に在住し、25歳から65歳までの保育士、教諭、助産師、保健師又は看護師のいずれかの資格を有し、かつ保育経験がある者。また家庭福祉員宅の保育専用室で保育するなど、一定の要件を満たした者。

北区認定家庭福祉員（保育ママ）：『すくすく保育室』は、キッズタウンうきま夜間保育園の近くにあり、自宅の1階に広々とした明るい保育室を構え、生後58日目から2歳児までの子ども、定員5名を家庭的で温かな環境の中で保育されている。

## 2) 目的

- 本園の施設環境を、出来る限り有効活用する。
- 少人数保育の良さを活かしながらも大きな集団での活動や経験を重ねて、進級・保育園や幼稚園への入園を滑らかなものにする。
- 地域の保育者同士が学び合い、協力して子育て支援に取り組んでいく。

## 3) 方法

天気や子どもたちの様子を見ながら、前日までに連絡を取り合って午前中に実施。交流の時間は、午前10時～午前11時とし、保育ママ1名と補助員1名が0歳児～2

歳児の子どもたち5名を連れて来園した。夜間保育園のつきぐみ（1、2歳児10名）と交流を進めることにした。感染症が流行した場合は行っていない。

つきぐみの担任は自分たちが計画したカリキュラムを優先しつつ、活動予定を変更しながら交流を進めたが、「一緒に遊びましょう！」と無理なく子ども同士が関わる事を大切にしてきた。

## 4) 結果

### 【平成26年度】

初めは月に1度、午前中の1時間程度の交流であった。『すくすく保育室』の子どもたちは、普段とは勝手が違う部屋で、恥ずかしそうにしながら保育ママの側を離れずに遊んでいた。つきぐみの子たちは、日頃から一時預かり保育の子どもが出入りするせいか、特に変わった様子は見られなかった。

本園の雰囲気慣れてくると、つきぐみの担任とトイレへ行ったり、着替えを手伝ってもらったりする事を嫌がらなくなった。帰り時間になっても「まだ遊んでいたい！」と言って名残惜しそうにする姿へと変わっていき、やがて互いを「すくすくさん！」「キッズさん！」と呼び合うようになった。本園の子どもたちは保育ママに絵本を読んでもらったり、自分から話し掛けて相手をして遊んでもらったりしていた。

「園の行事にも参加させて頂きませんか？」という保育ママの希望で、毎月行われる“誕生会”に参加してもらった。誕生会だけでなく「季節を感じられるように」と、“クリスマス会”や“節分の会”などの季節行事にも参加してもらうようにもした。会の中の保育者の出し物は、「いつもバラエティーに富んでいて大変刺激になる！」と保育ママに好評で、子どもたちも『すくすく保育室』では味わえない保育園ならではの行事を楽しんでいた。誕生会が終わると保育室や園庭で好きな遊びをひとしきり楽しんだが、時間が短いと『すくすく保育室』の子どもたちは物足りなさそうにしながら園を後にした。

計測器が無いという『すくすく保育室』の子どもたちに、看護師と協力して身体測定を行った。在園児と同じように看護師が健康カードを作成して渡すと、保育ママだけではなく、「毎月の成長がよく分かり嬉しい」と『すくすく保育室』に子どもを預けている保護者にも大変喜んでもらった。翌月の計測日にも健康カードを持参してもらい、年間を通して記録できるようにした。

本園で月に一度行っている“避難訓練”に交流日が当たると、つきぐみの子どもたちと一緒に『すくすく保育室』の子どもたちも“避難訓練”に参加した。訓練の館内放送にびっくりして不安気な表情を見せる子どももいたが、「地震の練習だから、大丈夫だよ！」と声をかけられ、落ち着いて指示を待つことができた。保育ママは、本園の避難訓練の計画や実施方法について強く感心を示していた。

12月頃に、「誕生会の日の交流はお弁当を持参して1日交流しませんか?」と提案すると、『すくすく保育室』の子どもたちは、保育ママお手製の給食をお弁当箱に詰めて持参した。『すくすく保育室』では、以前は家庭からお弁当を持参してもらっていたそうだが、子どもたちにもっと食に対して興味を持ってほしいという思いから、保育ママ手作りの給食を提供することにしたのだという。それは、家庭によってお弁当の内容が違い過ぎて友だちのお弁当に手を伸ばしたり、自分のお弁当に一切手を付けようとしなかったりしたからだという。お弁当を食べて、午睡をして目覚めたら帰る、というスケジュールは、誕生会に参加した後でも、昼食の時間までたっぷり遊ぶことができ、子どもたちは満足気だった。

#### 【平成27年度】

年度が変わり、『すくすく保育室』の子ども、担任やつきぐみの子どもたちの顔ぶれが変わった為か、子どもたちは交流をスタートさせた時のように少々緊張している様子が伺えた。前年度交流していた2歳児同士が遊び始めると、周りの1歳児や新入園児たちも一緒に遊び始め、慣れるまでにそれ程時間はかからなかった。

前年度の反省を踏まえて、誕生会の交流日は園の給食を『すくすく保育室』の子どもたちにも提供することにした。それは、子どもたちが互いの昼食がとても気になる様子だったからだ。テーブルを分ける等の配慮をしたが、それでは「交流の意味が薄れてしまうのではないかな…」という改善点が担任の間で上がり、27年度初めから栄養士にも協力をしてもらい、本園の給食を提供するようにした。みんなが同じ給食を食べられるようになると、子どもたちはいつも以上に嬉しそうにして給食を食べた。普段は広い部屋でこじんまりとして昼食を食べているが、交流の日は賑やかな食事風景となった。保育ママは、「園の給食の献立がとても参考になっている」と言っていた。

子どもたちが安心して午睡ができるようになった頃から、休憩時間に食事を摂りながら保育者同士で意見交換や情報交換をした。時には看護師も加わり、病気や怪我への対処法、感染症や予防接種などの専門的な知識について話をした。

その日に行った交流の様子をA3版の大きさと写真とコメントを添えた簡単なドキュメンテーションにして渡すと『すくすく保育室』を利用する保護者の方からは、「交流の様子や子どもたちが何をして遊んでいるのかがよく分かり、安心する」と喜んでいただいたそうだ。

『すくすく保育室』の隣の空き地にマンションの建設工事が始まり、水遊びができず困っていた夏の時期は、週に1~2回来園して一緒に水遊びやプール遊びをした。食紅を使った色水遊びや、片栗粉と水を混ぜた(ダイラタンシー)遊びを提供すると、「様々なあそびを子どもたちはとても喜んでいて、保育の参考にもなる。」と保育ママは言っていた。保育室いっぱい広げた模造紙の

上で行うダイナミックな絵の具遊びでは、自然に子ども同士の会話が飛び交い、長い時間楽しんでいた姿はとても印象的だった。

毎年8月の第3日曜日に開催している保育・介護・障がい施設連携行事である“こうほうえん祭り”にもお誘いした。日曜日という事もあり、『すくすく保育室』の子どもたちは、保護者と一緒に来園し、スタンプラリーや模擬店・ゲーム・お化け屋敷を一通り回られ、お祭りの雰囲気を楽しんでいた。年度末には地域の子育て支援活動の一環として行っている“文化鑑賞会”にもお呼びして、親子で劇団が演じる“おたのしみ劇場”を楽しんでもらった。『すくすく保育室』を利用する保護者には、キッズタウンを知ってもらう良い機会となった。そのことがきっかけで、『すくすく保育室』が休業したお盆休みには、通常『すくすく保育室』に通うお子さんの中には、本園の一時預かり保育を利用する子もいた。

つきぐみの子どもたちが『すくすく保育室』を訪問する機会ももった。迎え入れる側と迎えられる側が逆転し、いつもと違う立場での子どもたちであったが、普段とは違う姿が見られて、「それもまた良い経験だった」と保育者同士が共有した。

#### 【平成28年度】

交流を2年間経験した本園の2歳児たちは、3歳児クラスに進級したが、スムーズに大きな集団に移行した様子が伺えた。『すくすく保育室』を卒業された子どもの中には、キッズタウンへの入園を希望したが叶わず、次の入園先が決まるまで、本園の一時預かり保育を利用する子もいた。

今年度に入ると交流の回数が増え、週に1~2回交流することもあった。『すくすく保育室』の子どもたちが来るからとつきぐみの活動予定を変えないよう、クラスの活動内容を前もって「保育ママ」に伝え、『すくすく保育室』の子どもたちが一緒につきぐみの活動計画に参加してもらうようにした。

『すくすく保育室』の子どもたちが来園してから、一緒に散歩へ行く事もあった。自然と『すくすく保育室』の子どもとつきぐみの子どもが手を繋ぐ姿が見られた。散歩先で偶然会った時には、お互いが走り寄って喜び、嬉しそうに子ども同士で遊び始めた。

9月末の交流日には、夜間園の屋上の畑でそらぐみ(3、4、5歳児)が育てたサツマイモの芋掘り体験を一緒にした。子どもたちは初めて畑の土に触れ、保育者に手伝われながらツルを引っ張ると、次々と出て来るサツマイモに少々驚いた様子が見られた。

10月には、『ピクニックごっこ』を計画した。『ピクニックごっこ』には子どもたちが掘ったサツマイモを蒸かし芋にして持参し、近くの公園まで歩いて行っておやつに食べた。子どもたちが自然と、交わって手をつなぐよ

うになり、目的地までは歌を歌ったりおしゃべりを楽しんだりする姿がとても微笑ましかった。この日は、一緒に園まで帰り給食を食べ、昼寝をしておやつを食べた。

つきぐみ担任2名に保育ママと補助員1名と保育者が増えることで、つきぐみだけではできなかった、“コーナー保育”が実現できた。『すくすく保育室』の子どもたちは、つきぐみの担任が手作りする“ままごとコーナー”が気に入り、つきぐみの子どもたちが園庭で遊んでいても「ままごとで遊びたい!」と言って“園庭で遊びたい子”、“保育室で遊びたい子”に混ざり合って分かれた活動を行うことができ、保育の幅が広がった。

「明日、すくすくさん来るよ!」とつきぐみの子どもたちに伝えると、次の日の朝は、「すくすくさんまだかな〜?」「すくすくさんと遊ぶ〜!」と交流を楽しみにする言葉が子どもたちから聞かれるようになった。来園すると、つきぐみの子どもたちはテラスに飛び出して、「すくすくさん、おはよう!」と大きな声で出迎え、自分が遊んでいた玩具を手渡して「こっちにおいで!」と手を引いたり、「保育ママ」の膝の上に座って絵本を読んでもらったりと、積極的に関わりを求めている。『すくすく保育室』の子も、つきぐみの子の遊びの真似をして楽しんでいたり、保育士に話し掛けたりするようになった。「さようなら」「またね!」と次の交流を楽しみにするようになった。

家庭的な雰囲気大切にする余り、玩具等を十分に揃え、取り合いなどのトラブルを回避する環境設定に集団保育としての疑問もあった。交流を重ねたことで子どもたちは自然に「かして」「いいよ」などのやりとりが出来る子どもに育っていったのではないかと思う。年齢幅の広い夜間保育園と『すくすく保育室』の子たちが交流することで、月齢の近い男児同士、女児同士で遊べることで互いに刺激を受けている様子だった。

#### 《交流を更に充実させるため、交流についてどのように思っているか感想を聞いた。》

以下は一部抜粋である。(保育ママ3名、保護者5名。回収率100%)

(『すくすく保育室』利用保護者)

- ・たくさんの大人や子どもとの関わりが増えて行動範囲が広がった。
- ・交流の様子を文章と写真で知ることが出来て大変ありがたい。子どもとのコミュニケーションにつながっている。
- ・異年齢の関わりから学ぶことはとても貴重。
- ・夏祭りには家族で参加出来、保育園の雰囲気を知ることができた。
- ・季節の行事に参加することは良い経験。
- ・大人数の中でも過ごせるようになった。

(保育ママ)

- ・保育園の安全な環境の中で、保育者もゆとりをもって

保育できる。

- ・安心できる保育者のもと、普段と違う環境で遊ぶことで成長の場と感じられる。
- ・2歳児には少し大きな集団を経験できる貴重な時間。
- ・給食のメニューや調理法が参考になっている。
- ・同じ保育の仕事に携わるもの同士、規模は違うものの夜間保育園の保育内容には刺激を受けている。

その他に保育ママからは「待機児童が多いからこそ、保育ママの周知をして欲しい。保育園の補完的な制度なのだから、もっと制度面や運営面等でサポートして欲しい。」という行政に対する要望が聞かれた。

#### 5) 考察

課題であった本園の施設環境の有効活用は、夜間保育園の特性を十分に活かし、夜間保育園の職員や在園児に負担を掛けることもなく達成することが出来たと思う。また、保育園という安全が確保された環境の中で、子どもたちをのびのびと遊ばせることが出来たことは、保育ママの安心にも寄り添えたのではないかと思う。休憩の時間を使っての情報交換、意見交換はとても有意義なものであり、互いの子どもたちの様々な“今”を共有し、成長を見守り、協力して子育て支援に取り組み、学び合えたのではないかと考えている。

子どもたちは、交流を通してそれぞれの園では経験出来ない事も出来たのではないだろうか。小さいながらも遊びに行く先の友だちに、遊びにやってきた友だちに、優しく接したり、時には我慢をしたりといった心の育ちにも繋がったはずである。

『すくすく保育室』と夜間保育園の少人数保育は家庭的であり、乳児にとっては一人ひとりをきめ細かに丁寧に保育でき、保育者とより密接な関係を築ける良さがある。しかし、夜間保育園の子どもたちは3歳児クラスの大きな集団への進級、『すくすく保育室』の子どもたちは幼稚園・保育園への入園、というそれぞれの新しい環境に向けた課題があった。夜間園の子どもたちは、日常的に一般園の子どもたちと交流できる環境があるが、『すくすく保育室』の子どもたちは、以前に近隣の他園と交流を経験するも敷居の高さを感じ、交流は長続きしなかったという。私たちは、法人の理念に沿って、地域に開かれ、愛され、信頼されることを使命としたことで、より活発な交流が出来たのではないかと考えている。

今後も地域の中で支え合う仕組みを強化させ、引き続き地域の子育て支援に関する情報提供や相談ができる場として互いの長所を活かしながら“子育ての基地”となるようにしていきたい。保育者同士は、更に学び合い助け合いながら、子どもにとって保護者にとってより良い保育施設として地域に根ざしていきたいと考えている。

【交流の様子】

・ 10:00 来園

誕生会に参加

保育者の出し物はみんな集中して見えています。  
幼児と一緒に季節の歌を歌う子もいます。



・ 10:30 主活動

室内遊び。



園庭遊び  
お友だちと手をつないで散歩。



・11:00 給食

にぎやかでとても楽しい給食。



・12:30 午睡

午睡はぐっすり。  
この時間に情報交換、意見交換する。



・15:00 おやつ

おやつを食べたらさようなら！またあそぼうね！



本屋の屋上にある畑にて、お芋掘り！



少し遠い公園までピクニックごっこ！  
畑のお芋はおいしいね～





『すくすく保育室』に遊びに行った際に、子どもたちが気付いた玄関前にあるうさぎのポスト。2歳児が「おてがみ かく〜!」と言ったため、みんなでお手紙を描いた。「すくすくさんありがとう」と言いながら描いている子もいた。散歩の帰りにうさぎのポストに手紙を入れた。



講評：家庭福祉員（保育ママ）との交流、連携そして今後の展望  
～夜間保育園としてできること～

評者：井桁 容子

夜間保育園という施設の特性を活かして、地域の家庭福祉員（保育ママ）及びそこで保育される子ども同士との交流を行い、施設設備の提供や行事や避難訓練等の参加などを通して相互の関係性の広がりが見事な実践報告である。とかく保育ママの場合は、個人の家庭内での保育などが中心になり、子どものための環境が十分整っているとはいえないこともある。さらに地域とつながりにくい状況にもあり閉鎖的になりやすいところを、保育園の環境を有効に使わせてもらい、また情報交換ができることは、大変心強い保育仲間を得たという意味で、保育の質を支えるうえで有効なことだと思われる。一方で、保育園側が保育ママの保育への姿勢で学ぶべきこともあったのではなかろうか？報告の中で、「家庭的な雰囲気大切にすぎるあまり、玩具等を十分に揃え、取り合いなどのトラブルを回避する環境設定に疑問があった」とあるが、2歳児の場合はその発達課題のなかで十分に遊びこむことも重要であり、「かして」「いいよ」のやり取りが必ずしも社会性やコミュニケーション力が育ったやり取りとして本当の意味で身に付いているか否かは疑問である。乳児保育を考える上では集団の大きさがコミュニケーション力の育ちをむしろ妨げるという視点も重要なこととして、改めて保育ママとの協働的学びの関係づくりに期待したい。

評者：石川 昭義

当保育園と近隣の家庭保育室との交流の様子が3年間の実践としてよく描かれており、特に、年度を重ねるごとに交流の中身が変化している様子や利用者の声（感想）が紹介されていることが考察を多面的にしている。計測器を置いていない家庭保育室の子どもに看護師と協力して身体測定をしたこと、あるいは家庭福祉員が加わってくれたことで、クラス単独ではできなかったコーナー保育が実現できたことなど、互いに補完し合うような交流を通して子どもの経験の幅が広がっていく

様子が見て取れる。

当園は夜間保育園であるが、その保育課程あるいは指導計画にこの交流がどのように位置づけられたのかについて説明があるとよかった。また、夜間保育園の職員と保育ママとの情報交換が行われたようであるが、その様子についてもう少し具体的な記述がなされると報告全体を充実させることができたと考えられる。

報告の中では、行政への要望が部分的に盛り込まれているが、家庭的保育の役割及びその制度のあり方を考えさせられる問題提起型の内容である。今後同じように新制度における小規模保育と保育所、事業所内保育と保育所といった地域における両者の関係性をテーマにする研究への可能性を示した報告といえる。

評者：日吉 輝幸

社会福祉法人として、それぞれの法人が持つ固有の理念を具現化することは、法人運営の根幹をなすものであると言っても過言ではない。社会福祉法人こうほうえんでは、夜間保育所であるキッズタウンうきま夜間保育園を、まさに地域の社会資源の一つとして活用されておられることに、まずは敬意を表したい。

夜間保育所として長時間の保育を行っているにもかかわらず、日中のゆとりがある時間を有効活用し、近隣の家庭保育室の家庭福祉員と子どもたちを招いているが、これが単発的な行事としてではなく、継続的な交流事業として取り組んでおられることに感心させられた。また、日常的な遊びや給食を通して保育園が持つノウハウを提供し、家庭福祉員の専門性の向上にも役立っていることが伺えた。更には、報告書には3年間の取り組みが記されており、報告園と家庭保育室の園児が、共に成長している姿が分かり好感を持てた。

報告書の最後に述べられているように、「地域に開かれた 地域に愛される 地域に信頼される」という理念のもと、これからも近隣の保育者同士が学び合い助け合いながら、地域において他の模範となるべく、より良い保育が行われることを期待する。



### (3) 実践奨励賞

#### 〈課題研究部門〉

- ・課題研究③子どもの安全・健康

「保育園におけるアタマジラミ感染時の対応と取り組み～事例を通して～」

小島 祐子 (東京都・社会福祉法人東中川会 亀有りりおっこ保育園)

- ・課題研究③子どもの安全・健康

「未然に事故を防ぐための保育士のリスク・マネジメント

～保育環境と事故・ヒヤリ・ハットを通して見えてきた事から～」

運天 美咲 (沖縄県・社会福祉法人玉重福祉会 第2愛心保育園)

#### 〈実践報告部門〉

- ・「園庭のない保育所の環境設定～楽しく身体を動かす室内遊びの工夫～」

杉浦 悠 (東京都・公益財団法人鉄道弘済会 南千住駅前保育所)

- ・「子どもが楽しく絵を描くには～はじめてのお絵描きから描く楽しみへ～」

鳥井 美幸

(新潟市・公益財団法人鉄道弘済会 新津保育所 さくら保育園)

- ・「壁でつながる0歳児からの発達～我が園の名物となった『壁のぼり』～」

笠井 博嗣・片桐 広絵・小橋 紀子

(大阪府・社会福祉法人都島友の会 都島東保育園)

- ・「いろんな遊びを楽しもう！～健やかな心と体の育ちのために～」

渡部 靖子・津田 祐子

(島根県・公益財団法人鉄道弘済会 松江保育所)

- ・「子どもの笑顔は、保育士の笑顔から

～保育士の幸せな笑顔が絶えない保育園は子どもの笑顔もあふれている～」

新城 利奈子 (沖縄県・社会福祉法人玉重福祉会 愛心保育園)



## 課題研究③ 子どもの健康・安全 保育園におけるアタマジラミ感染時の対応と取り組み ～事例を通して～

東京都・社会福祉法人東中川会 亀有りりおっこ保育園 小島 祐子

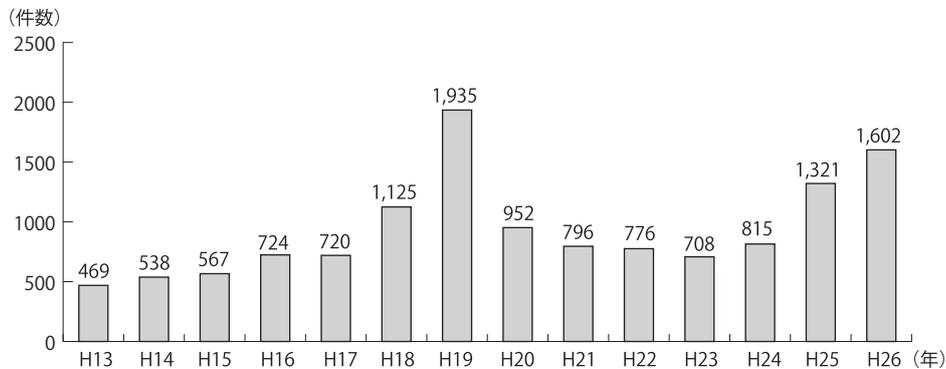
### 1. はじめに

当園は最寄り駅から5分と利便性のある場所に位置し、2階建て、1階は3歳、4歳、5歳児各1クラスの3クラスがワンフロアで過ごし、2階は0歳、1歳児でワンフロア（仕切りあり）、2歳児単独室となる施設内で総数80名弱の園児が生活している。

アタマジラミ（以下、シラミ）は、世界的においても感染がみられ、日本では「学校保健安全法」に定めるところの学校感染症、第三種「その他の感染症」に規定され、通常出席停止の措置は必要ないと考えられる感染症とされている。しかし、文部科学省において「予防すべき感染症」として明示されている。年配の方からはDDT（戦後シラミ駆除に使用された薬剤）を頭に噴霧していた戦後のことではなかったのか？と驚きの声があったが、保育園に従事するようになり現実として直面した。感染

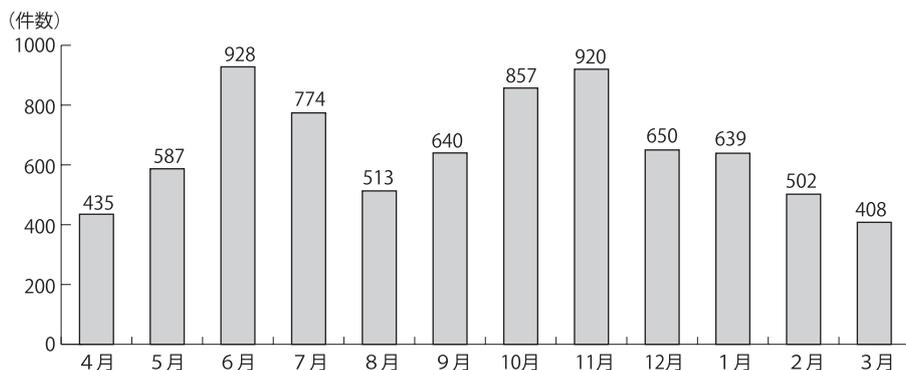
源が特定できない、しかも集団生活において感染拡大が危惧される感染症であることを実感した。日本のシラミの全国レベルでの統計調査は旧厚生省時代に実施されていたが現在行われていない。東京都は平成13年(2001年)より調査を継続している。調査によると、東京都の年別アタマジラミ相談件数も増加し減少の傾向がみられない(表1)。また、1年を通して発生している(表2)。当園においても一年に必ずシラミの感染が認められ、感染児は勿論、駆除にかかる保護者、職員もかなりのエネルギーを必要とする感染症と考える。今回、短期間で終息可能な方法がないものかと考え、シラミの生態を可能な限り観察し、実践に向けて確認しながらシラミの駆除にかかる問題点を明らかにすることにより、園においてできる最善の方法を探るべく取り組んだ内容をここに報告する。

表1 都内年代別アタマジラミ相談件数



東京都福祉保健局 東京都多摩立川保健所HPより改編

表2 都内アタマジラミの月別相談件数（H13～H21年度）



IASR : Vol. 31 p.351～352 : 2010年12月号より

## 2. 対象期間及び方法

対象期間：平成26年9月から平成28年4月

研究方法：1) 駆除した際のシラミを採取し、セロハンテープで固定したシラミを観察

使用物品：ハサミ・セロハンテープ・白紙（写真1）

電動梳き櫛（以下梳き櫛（写真2）

USBマイクロスコープ

UCAM-MS130N（写真3）

2) 駆除対象となった事例（延べ19例）を検証する。

3) 卵が1個以上確認できた日数を「確認日数」、連続して2日確認できなかった日までを「解除にかかった日数」として日数計算

## 3. 事例の紹介（一覧は「表3. 対象事例表」を参照）

<事例1>

平成26年9月○日 5歳女児 卵あり。7日卵を確認。1歳兄弟には確認できず。

<事例2>

平成26年9月△日 3歳男児、卵あり。即日短髪スボーツ刈りに、翌日から認めず。

<事例3>

平成26年11月○日 4歳女児 卵あり。5日後認めず。

<事例4>

平成27年1月○日 4歳男児、卵・成虫あり。卵及び成虫が頭からポタッと落ちるほど多数あり、保護者に連絡を入れたところ1時間半後の迎えとなった。（当日お迎えの時間までは他児への感染の危険が高いと判断したため、事務所に待機とした。）当日頭髪を短髪カット実施する。翌日も幼虫及び卵多数認める。頭髪再カットを実施。3日後、幼虫・卵の数は激減した。4日後までは頭髪に認めるが、その後は毛孔部の着色ある部分をつまみ出すと幼虫を採取。断続的に認め解除に15日を要した。

<事例5>

平成27年11月○日 4歳男児、卵及び成虫あり。散髪後の4日後に卵等認めず。

<事例6>（事例5の兄弟）

平成27年11月△日 1歳男児 事例5確認1日後に卵確認。3日間認め、5日後には確認なく6日後に解除となったが、解除3日後に幼虫を再確認し10日間断続的に卵を確認する。初日から3週間近く経過し終息する。

<事例6'>

平成28年2月○日 事例6と同児 毛孔部に卵あり。断続的に認め保護者の対応の気力が低下。おんぶ紐、フード付きの毎日同じジャンパー、自転車のヘルメットは毎日使用していた。

<事例7>（事例8の姉妹）

平成28年2月○日 4歳女児 成虫及び卵あり。小学生の兄も卵あり。

<事例8>（事例7の姉妹）

平成28年2月○日 2歳女児 成虫及び卵あり。細く絡まりやすい髪質。

<事例9>（事例12の姉妹）

平成28年2月○日 1歳女児 成虫及び卵多数あり。

<事例10>（事例11の兄妹）

平成28年2月○日 1歳女児 成虫及び卵多数あり。

<事例11>（事例8の兄妹）

平成28年2月△日 4歳男児 卵あり。3回目確認後短髪となり、後確認なし。

<事例12>（事例9の姉妹）

平成28年2月△日 4歳女児 卵あり。長髪。

<事例13>

平成28年2月△日 4歳女児 卵あり。長髪

<事例14>

平成28年2月△日 4歳女児 卵あり。長髪。小学生の姉も卵あり。

<事例15>（事例2同児）

平成28年2月△日 4歳男児 卵あり。今回は短髪にしない。

写真1



写真2



写真3



表 3. 対象事例表 (延べ19例)

事例	発生確認日※1	年齢	性別	卵や成虫 確認日数 ※2	解除に かかった日数 ※3		備 考
事例1	平成26年 9月○日	5	女	7	12		
事例2	平成26年 9月△日	3	男	1	3	短髪に	
事例3	平成26年11月○日	4	女	4	7		
事例4	平成27年 1月○日	4	男	6	15	短髪に	
事例5	平成27年11月○日	4	男	3	5	短髪に	事例6兄弟
事例6	平成27年11月○1日	1	男	10	21		事例5兄弟
事例6'	平成28年 2月◎日			6	30	断続的	事例6同人
事例7	平成28年 2月○日	4	女	11	26		事例8姉妹
事例8	平成28年 2月○日	2	女	11	25		事例7姉妹
事例9	平成28年 2月○日	1	女	7	15		事例12姉妹
事例10	平成28年 2月○日	1	女	12	23		事例11兄妹
事例11	平成28年 2月△日	4	男	3	5	短髪に	事例10兄妹
事例12	平成28年 2月△日	4	女	4	8		事例9姉妹
事例13	平成28年 2月△日	4	女	6	13		
事例14	平成28年 2月△日	4	女	4	9		
事例15	平成28年 2月△日	4	男	5	8		
事例16	平成28年 2月×日	5	女	2	6		
事例17	平成28年 4月○日	2	女	2	8		
事例18	平成28年 4月○日	2	男	1	3	短髪に	
事例19	平成28年 4月○日	2	男	1	8	短髪に	欠席多

※1、発生確認日の○・△の表示は同月の同日を示す。

※2、確認した実数で欠席、土日祝日を含まず。

※3、土日祝日・欠席・確認できなかった日（遅刻、早退、行事など）を含む。

注：解除となる基準は卵などが確認できない日が連続2日続くこととしている。

#### <事例16>

平成28年2月×日 5歳女児 卵多数あり。長髪で多数確認できたが、土日明けの2回目の確認で卵1個に激減。3回目には確認なし。

#### <事例17>

平成28年4月○日 2歳女児 卵あり。小学生に兄がいるが不明。

#### <事例18>

平成28年4月○日 2歳男児 卵あり。短髪になり1日認めただのみ。4歳児兄は認めず。

#### <事例19>

平成28年4月○日 2歳男児 卵あり。短髪にするが欠席が多く解除日数がかかったが、卵を確認したのは1日のみ。

※注：<事例6'>は潜伏期間を考慮し<事例6>の継続とし1例とした。

### 4. シラミに感染した場合の頭部の確認、駆除にかかる対応の実例（表4. 一覧対応表参照）

#### 1) 確認、駆除

- ①基本看護師が確認。（保育士はクラスの活動を優先）
- ②明るい光の下で行う。（光を当てることで見つけやすい）
- ③1日1回は必ず頭髪の確認を行う。可能な限り、感染の拡大防止を考慮し、登園直後に行う。また、活動の妨げにならない様午睡前、午睡中、お迎えまでの夕方なども行う。保護者の協力が得られていないような場合や多数の確認時は、可能であれば2回以上の確認、駆除する。
- ④成虫が見つかった時点でシャンプーを行い、最も動きやすい成虫を洗い流す。ドライヤーで乾燥後、電動梳き櫛を利用して卵などの駆除を行う。
- ⑤卵のみの場合は採取して駆除する。シラミは白紙にセロハンテープで固定する。
- ⑥駆除の場所は掃除機で掃除。感染児の襟元衣服を掃除機で吸い取る。  
駆除した職員のエプロンなども掃除機で吸い取る。

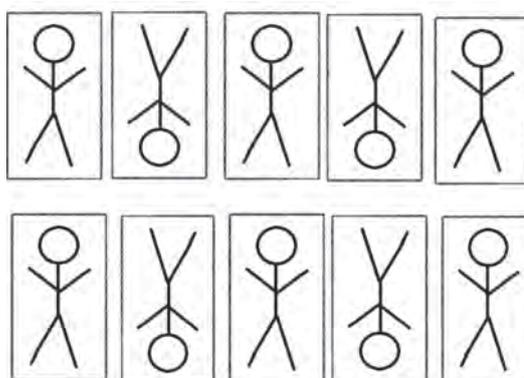
#### 2) クラス

- ①感染児の午睡布団を別保管とし、初日は布団庫のすべての布団の外干し、振り払い、掃除を行う。初日以降は感染児の布団は別保管。
- ②園生活の別行動はしないが、頭部の不用意な接触を避けるために、着席時の位置（外側の席）や、遊び、活動内容を考慮する。布製を使用している活動を避ける。
- ③散歩や外遊びの帽子の使用後、感染児の帽子は他児と一緒にしないでビニール袋などに入れ持ち帰りの個人の袋に保管。寒い時期に使用するジャンパーも同様に別保管し他児と場所の共有をしない。写真4は1歳、2歳で使用しているハンガーラック。
- ④午睡は頭部が重ならないように交互に配置する。（図1）

写真4



図1



- ⑤掃除機での清掃は適時実施。

#### 3) 保護者

- ①見つかった時点で保護者に状況を連絡する。
  - ②感染した保護者に依頼する内容。
    - ア. 帽子・パジャマ・布団カバー・シーツ・タオルケットを毎日（通常は週末のみ）持ち帰り洗濯。
    - イ. シラミ駆除の開始と保護者が洗髪することと頭部の毎日の確認駆除。
  - ③駆除のための卵付着毛髪を切り取ることの手承を得る。
  - ④必要に応じて洗濯物の乾燥にコインランドリーを利用する方法などを提案する。
  - ⑤園での駆除はあくまで家庭での駆除の補完という立場を伝える。
- #### 4) その他
- ①アタマジラミ発生の掲示など情報の提示や保護者の質問等に応じる。
  - ②職員の確実な情報の周知と確認、対応の徹底。

### 5. 結果

#### 1) シラミの生態

- ①成虫は動きも早く、頭を固定しての採取は大変困難であり、1匹見つかった時点でシャンプーを実施し、2回のシャンプー後水中に頭から除去したシラミを、水中から取り出したところ、セロハンテープの中で3日

表4. アタマジラミ発生対応表

事象及び時系列	該当児	職 員		保 護 者
アタマジラミ 成虫確認	①シャンプー実施 ②ドライヤー乾燥後、 卵を可能な限り除去。	①帽子、上着、タオル を別保管。 ②同場所に設置の他児 帽子、上着を振り払い 外干し後、元の位置 に戻す。	①該当児午睡布団の振 り払いと外干し、掃 除機で吸い取り。 ②布団庫内布団すべて 一旦取り出し、外干 し。 ③布団庫の清掃。 (掃除機及び拭き掃除)	【該当児の保護者へ】 アタマジラミに感染して いることを電話で状況説 明し駆除の依頼を行う。 <内容> ①帽子、パジャマ、布団 カバー、シーツ、タオ ルケットの毎日持ち帰 り、洗濯。 ②アタマジラミ駆除の開 始。 ③駆除剤は皮膚科受診し ても処方がないため、 受診は必須ではないこ と、駆除剤は薬局での 購入になる事。 ④卵付きの毛髪を切り取 る事の承諾。 ⑤質問があった時などは、 頭髪カットは駆除がス ムーズに行える事。 ⑥小学生以上の兄弟姉妹 関係も確認。 ⑦洗髪は保護者が行う 【全体へ】 「アタマジラミ発生」の 掲示
卵のみ	卵を可能な限り除去。			
	初日、電話連絡後間も なくお迎えの場合は事 務所などで待機。			
	卵付きの髪の毛を切り 取った後頭髪や衣服の えり足などを掃除機で 吸い取る。 長髪女児にはゴム留め。 (1つ又は2つ)	①駆除で使用した場所(ドライヤー実施場所も) などは掃除機で清掃。 ②駆除を行った職員のエプロンなどは掃除機で 吸い取るか、場合によって交換する。		
保育活動中 (朝夕の合同保 育含む)	椅子席などではできるだ け端の位置を使用。	①頭部が接触しそうな場合はさり気なく離す。 ②頭部が接触するような活動を避ける。 *体操教室実施時、マット運動予定の場合は 種目の変更を指導員に依頼 *布を使用した遊びを避ける。(おんひもや スカーフ、帽子をかぶったりするまねっこ 遊びなど) *使用した布等は1回毎に洗濯。 ③散歩や外保育時使用した帽子は活動後ポリ袋 に入れ、他児の帽子と一緒に回収しない。		
午睡中	端の位置にし、他児と の距離をとる。	②園児の頭部が交互になるように配置。 ①午睡後の該当児のシーツなどは丸めるように たたみ、袋に入れる。 ②午睡後掃除機で清掃。		
お迎え時		①初日は改めて電話の内容を保護者に説明。 ②卵が見つかった場所や、何個あったか、など 知りたい保護者の場合は引き継ぎ時に申し送 り保護者に伝える。	アタマジラミのパンフレ ット(東京都福祉保健局 家庭用リーフレット)を 手渡し。	

目までスコープにより生存を確認した。(写真5-1、5-2)

写真5-1



写真5-2



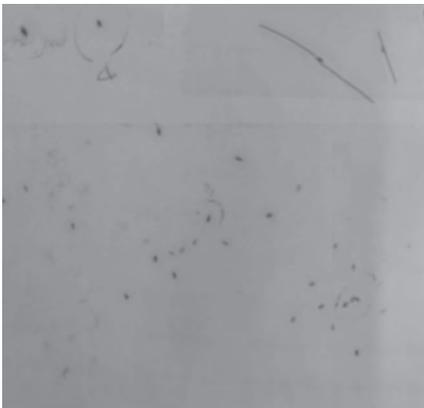
②頭皮の毛孔にある卵を確認することができたが、つまみ取らないと除去できなかった。(写真6)

写真6



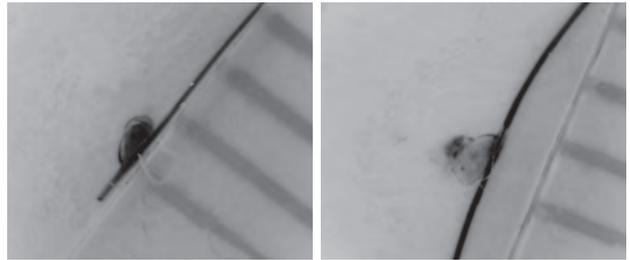
③梳き櫛は多数発生時に有効(写真7)であったが、卵が減少すると全く梳き櫛にはかからない事が多く、肉眼での確認が重要であった。また、髪の毛の細い低年齢児についても梳き櫛は効果がない。

写真7



④成虫や卵が多数ある頭部にはふ化寸前の卵や、ふ化直後と推測されるシラミが採取できた。(写真8)

写真8



卵

ふ化直前



幼虫1

幼虫2



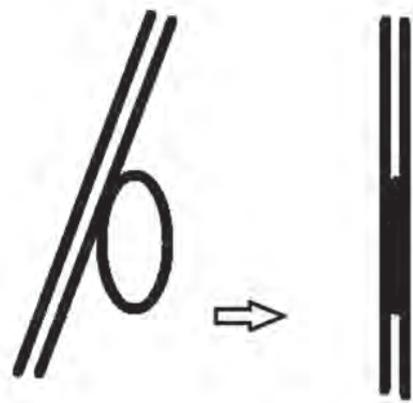
成虫

1メモリは1mm

死ぬ時はフンを排出している。(→部分)

⑤卵は毛髪の一方向に付着しているため毛髪の角度を変えて確認する必要がある。(図2)

図2



## 2) 事例の結果

①19事例においてシラミを確認した日数の平均は5.3日、解除にかかった日数の平均は12.5日であった。男女別では、男児の平均確認日数は3.8日、女児は6.4日、男児の解除にかかった日数8.5日に対して女児は13.8日となり男児よりも女児の駆除に日数を要する。(表5)

表5. 19事例における平均日数 (日)

	全体	男児	女児
確認した日数	5.3	3.8	6.4
解除にかかった日数	12.5	8.5	13.8

- ②<事例2、5、11、18、19>のように短髪にすることにより、駆除にかかる日数は抑えられることが明確になった。
- ③駆除のために卵付着毛髪を切り取る事の苦情はなかった。
- ④<事例6、9、10>の低年齢児は駆除に日数を要した。確認時、頭の固定が難しく、見つけても頭が動くと卵を見失ってしまうことになる。膝の上に寝かせて行うことにより子どもの安心感も得られ、頭の固定も可能になった。この場合はシラミの落下、付着も考えられるために終了後、掃除機でエプロンなどを吸い取ることが必要となる。また、午睡中を利用して試みるが、部屋を暗くしているためライトを照らしながらの頭全体の確認は非常に困難であった。
- その他、低年齢児の場合は同じおんぶ紐を毎回使用しているため、洗濯はできていない現状である。
- ⑤事例の半数近くに兄弟姉妹感染がみられた。
- ⑥<事例5、6、7、8>の保護者に関しては協力体制が乏しい現状として、シーツなど当日汚染した場所が変わらず翌日洗濯されていない状況が認められたり、貸し出しの梳き櫛を破損し返却が滞ったり、子どもだけの洗髪をしていること（本児から伝わる）などを続けていた。また、洗髪した様子がない時は、初日以外でもシャンプーを実施したが、保育園でも毎日洗髪してもらえると園児は思い、「今日は？」という会話に、「お家でしっかり洗ってもらおうね。」と答えることがあった。ヘアアイロンの貸し出しを伝えるが髪の毛が傷むと使用しなかった。
- ⑦<事例16>の女児は保護者の職業上から協力が得られ、ヘアアイロンを使用することを提案した。アイロンを使用することで髪質が悪くなることもなく最短で駆除可能になった。
- ⑧シラミ発生の掲示に関して、誰がどのクラスかを毎日のクラス出席表、欠席欄理由の場所に明示してほしいとの訴える保護者があったが、感染児は出席しており、欠席理由ではないので、個人的な開示はしていないと伝える。また、年齢が高いほど話ができ、確認している様子が目にとまる事があるので、子どもから「誰々ちゃん」と保護に伝えることはやむを得ないが、職員が伝えることはない。掲示を見た保護者は「感染しないですか？」と質問があるが、毎日接している職員は感染していないことを伝えると安心される。

## 6. 考察

保護者に依頼する内容は、①帽子などを毎日持ち帰り洗濯すること、②駆除の開始、洗髪をして頭部を確認してもらう、というこの2点を同じように説明するが、結果的に駆除にかかる日数は様々という結果となる。シラミ駆除は保護者の協力が得られない限り大変困難な感染症と考える。男児の場合は比較的抵抗なく短髪になることが可能で、確認も容易となり駆除にかかる日数が短くできる。しかし、女児の場合は男児よりは長髪となり、卵などの駆除は容易ではない。事例16の女児については園の提案に協力あり、卵が多数確認した長髪（ロング）にも関わらず、2回目では1個の卵、3回目で駆除の確認ができ、同様の方法で長髪においても短期の駆除が可能である事を実証した。

成虫の動きが早くポタポタと髪の毛から落下するケースを体験し、初日に成虫を見つけた段階で集団に戻る前に迅速にシャンプーを実施することは、成虫の拡散防止につながると考えられる。プールでは感染しないということであるが、シャンプーをして頭部から浴槽に落ちた成虫も3日生存しており、文献で成虫は3日生存する事を再認識できた。確率は低いとしても集団でレッスンする水域で頭部から離れたシラミが浮遊し再度頭に付着して生存する事があると考ええる。また帽子や水着等に付着した成虫がロッカー等で再感染ということも予測される。今回の事例の中にもスイミング教室に通っている子どもはいる。実際に園でのプール実施時にはシラミの発生はなかったが、今後その時期には念頭に置かなければならないと考える。

低年齢児に駆除期間を要した原因として、登園・降園時におんぶ紐を使用しており、紐を複数持っている家庭は少なく、毎日使用するため洗濯が出来ない。また、毎回使用時掃除機で吸い取る必要があるが、登園に使用してそのまま降園時も使用しているケースがほとんどであることはシラミの温床になっていることも考えられる。寒い時期はフード付きのジャンパーを使用することが多く、要注意な衣料といえる。また、送り迎えに自転車を利用する際にかぶるヘルメットなども注意したいところである。

初日連絡確認事項の注意点として、シラミの確認は皮膚科で確認できるが、処方はなく駆除剤は薬局で購入しなければならない事を伝えておく必要がある。皮膚科に受診すれば事がすべて済むと考える保護者がいるため、当園では皮膚科の受診は必須ではなく保護者の判断で行っている。感染を認めた園児の兄弟がいる場合は保護者の方から「薬局で（シャンプーなどを）購入すればいいですよ。」と、すでに経験していると考えられるケースもある。また事前に電話連絡を行っているが、シラミが感染していることのプライバシーを強く気にする保護者には、お迎え時に他の保護者が傍にいないことを確認し伝える必要がある。また、駆除途中も保護者から話に

触れないような場合はあえての話は避け、「卵見つかりました」と短く伝えることになる。事例の中には姉も見つかり「(園で) 見つけてもらってありがとうございます。」という保護者もいた。保護者とのコミュニケーションを崩すことなく、情報確認・提供が必要と考える。

感染児については、確認が長期になると少し拒むようなそぶりを見せる子がいたが、お話をしながら確認することで状況を切り替えながら不安定になるようなことはなかった。毎日確認される感染児の心のフォローを考え、不用意な発言は勿論であるが、子どもの様子を確認しながらすすめる様に心がけなければならない。感染児の頭に保護者がスカーフなどで覆ってきたことがあるが、園内での対応をしていれば不必要と考える。髪はゴム留めで1つか2つにまとめることによりバラバラしない。

長髪女兒の駆除に効果があると考えられるヘアアイロンは、こて式(写真9)やブラシ式(写真10)、ストレート用がある。実際に使用する場合、こて式は本体に触ると火傷の危険があり、動きやすい低年齢の子どもにも使用するときは注意する必要がある。当園で所有しているブラシ式は頭皮火傷の危険は少ないが髪の根元にある卵に届かない可能性がある。アイロンの場合、梳き櫛と違い園で保有しているものの実際直接園児に園で使用することはない。家庭で持ち合わせない場合、貸与するものであり、あくまで家庭駆除の補完として考えている。

写真9



写真10



## 7. まとめ

平成26年9月以降1年8カ月の間に6回のシラミ感染の発生があり、いろいろな事例をみてきた。園においてはシラミの感染源を特定できるものではなく、出来ることは集団生活の中でいかに感染拡大を防止できるかということである。保育園でできることに限界があり、保護者の協力なしでは成り立たない。それぞれの時期にいる

いろいろな事例を経験し、シラミ駆除の取り組み方をもっと工夫する余地があるのかもしれない。ただその必要性を感じることで感染を最小限に努めることができると考える。年齢、髪質、季節、家庭環境を考慮した広範囲での駆除の取り組みが必要である。当園は行政の「保健所によるシラミに関しての講習、勉強会」を実施したこともあり、今後も勉強は積み重ねていかなければならない。また、毎月1回の身体測定時はスクリーニング的に観察する事も継続していきたい。

今回の事例期間の午睡は布団を使用していたが、今年9月より午睡用ベッド「コット」を使用しているため布団カバーはなくなった。最後に、頭を掻いたりしている園児のアタマジラミの卵をアンテナ高く見つけてくれる保育士の職員に感謝し、今後も職員の協力がなくては出来ないあらゆる感染症防止に努めたいと考える。

## 参考文献

1. 東京都福祉保健局；保育所・幼稚園・小学校の先生のための…シラミ読本H20年3月発行 東京都におけるシラミの相談状況等についてIASR Vol.31 p.351：2010年12月号
2. 文部科学省；学校において予防すべき感染症の解説 平成25年3月
3. 厚生労働省；2012年改訂版 保育所における感染症対策ガイドライン 平成24年11月
4. 国立感染症研究所昆虫医科学部 関なおみ 小林睦夫；感染症の話 2006年26週（6月26～7月2日）
5. 豊島区池袋保健所 生活衛生課；シラミ対応マニュアル 2004年1月発行 2007年1月
6. 新潟市教育委員会；平成26年度 新潟市学校保健統計
7. 東京都福祉保健局 東京都多摩立川保健所 生活環境安全課；シラミの発生についてHPより
8. 国立感染症研究所昆虫医科学部 関なおみ 小林睦夫；インターネットリサーチを用いたシラミ症の実態調査 IASR Vol.31 p.350-351：2010年12月
9. 皮膚病診療 富田隆史 他；シラミとスミシリン抵抗性 Vol.31 p.906-913 2009年8月

評者：井桁 容子

今や季節を問わず起こるアタマジラミの感染は、ウイルスや細菌による感染症と違って、目に見えるものによる感染の拡大であるために、どの保育施設においても頭を悩ます問題のひとつであると思われる。本研究は、自園における感染状況の事例とその具体的対応、国、および東京都のデータを基に、アタマジラミを短期間で終息できるための実践研究が見事である。研究目的が明確であり、データもしっかりしたものになっていて大変しっかりとした研究となっている。考察の中で、「シラミ駆除は保護者の協力が得られない限り大変困難な感染症」と筆者も気づかれているようだが、アタマジラミに関わらず保育全体における保護者との協働は、日頃からの共通理解、共通認識が大変重要なことであり、何かが起こることで、気づかされることは多いものである。本研究が、そのような意味で、日常の保育者と保護者の関係づくりに活かされることを願いたい。また、除去のための対応として子どもが受けたメンタルな部分の影響、配慮なども見えてくると更に高く評価されたに違いない。

評者：岡田 澄子

なかなか研究のテーマに思い浮かばない「アタマジラミ」。しかも、多くの事例が認められ駆除にかなりのエネルギーを要していることに驚きました。

看護師としての視点、考察、駆除の方法や発生対応表は大変参考になりました。保護者支援もしっかりしており、情報確認・提供も園全体で取り組んでいる様子が窺えました。

アタマジラミを実際に見たことがない私共の保育園の職員に対して、写真付きのレポートは大いに役に立ちそうです。アタマジラミ感染時に参考

にさせていただきたいと思います。

ただ、レポートの量が多いようです。もっと簡潔にまとめられたらよかったですね。

アタマジラミ感染に対してこの量の報告書ですから、他の感染症に対してもきちんとしたマニュアルがあるのではないかと思います。

これからも保育園の看護師として保育士他の職員と連携した取り組みをされますようお願いしています。

評者：酒井 かず子

看護師ならではのきめ細かな取り組みに興味を持ちました。特に、冒頭で「短期間で終息可能な方法を探るべく、アタマジラミについて観察し、駆除にかかる問題点を明らかにすることにより、最善の方法を探る」とあり、どこの保育園でも1年を通して発生し、駆除には悩んでいると思われ、短期間で終息する方法や、そのための情報や知識を得られたら、とても参考になると思いました。

まとめに記載されている①感染源は特定しにくい ②保育園で出来ることには限界がある ③保護者の協力が必要 ④午睡用の布団を変えた等、特に新しい方法は見受けられませんでした。考察に記載されていたプールでの感染の可能性については関心を持ちました。確かに、プールでは感染しないといわれていましたが、調査の結果、水槽に落ちた成虫が3日間生存していた実態から、浮遊したシラミが再度付着して感染していく可能性は考えられます。今後、十分に注意をしていく必要があると強く思いました。

## 〈課題研究部門〉

### 課題研究③ 子どもの健康・安全

#### 未然に事故を防ぐための保育士のリスク・マネジメント ～保育環境と事故・ヒヤリハットを通して見えてきたことから～

沖縄県・社会福祉法人玉重福祉会 第2 愛心保育園 運天 美咲

#### 1. はじめに

保育園という集団生活の場は、子ども達が人とのふれあいや様々な物的環境を通して、心身ともに大きく成長していくための場となっていることが、保育指針の中にも明確に示されている。そのような中で、保育士として、子ども達を取り巻く環境を常に意識し保育に取り組むよう心がけているが、突発的に起きる事故やヒヤリハットなどの声があがるたびに、事故予防の不備に気づき難しさを感じる。

平成27年度より、事故対策に向けたヒヤリハットの掲示板や全体会議での報告を行ない、勉強会や会議などで話し合いを行なうこともあったが、完全に事故（ヒヤリハット）を防ぐことは出来ない状況の中、保育士一人ひ

とりが抱く不安と、保育に対する責任の重さをどのように感じているのかを考え、「万が一」を防ぐためのリスク・マネジメントを全職員が理解すると共に、子どもの健康と安全を考えた保育を実践するため、研究を進めることにした。

#### 2. 職員構成・職員配置（平成28年11月1日現在）

園長 1 名  
副園長 1 名  
主任保育士 1 名  
保育士 21 名（パート 3 名含む）  
調理員 4 名（パート 2 名含む）  
保育補助（用務員含む） 3 名……計 31 名

年齢	0 歳児	1 歳児	2 歳児	3 歳児	4 歳児	5 歳児	計
現員	15 名	23 名	23 名	23 名	23 名	19 名	126 名
職員配置	5 名	5 名	4 名	2 名	1 名	1 1 名	フリー職員 3 名（含） 21 名

#### 3. 目的

- ・職員一人ひとりがリスク・マネジメントに取り組み、リスクを下げ、危機を未然に防ぐ手立てを知る。
- ・子ども達が心身共に健やかな成長を育むために、安心安全な人的・物的環境を整える。

#### 4. 前年度までの取り組みと課題

取り組み	現状と課題
ヒヤリハットの掲示板を作る	掲示板を作ったことで、“すぐに知る”“全職員が把握する”ことができたが、その報告だけになっている。
事故報告を行なう（会議・勉強会等）	「いつ、どこで、誰が、なぜ起こったか」等の報告を受ける事で、保育士自身においても、安全管理に対する危機感を抱くがその場限りになっている。
マニュアルの読み合わせを行なう	マニュアルには、事前の予防的対策と事後の対応があるが、より具体的な内容になっていないため、全体での周知確認が難しい。

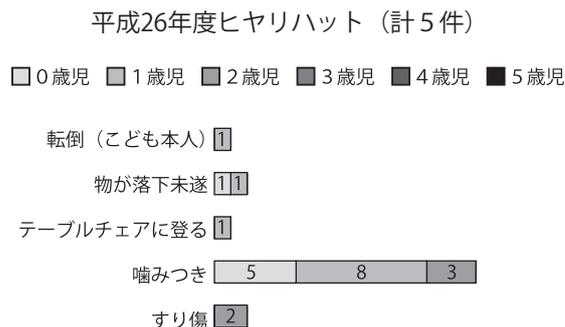
#### 5. 今年度の実践研究の方法

- ①事故・ヒヤリハットの分析。
- ②事例を通して気づいた保育環境の検討と見直し
- ③リスク・マネジメントを行うための学びの時間（勉強会）の確保。
- ④アンケート（職員・保護者）の実施（別紙 1・2）

#### ①事故、ヒヤリハットの分析に基づいて

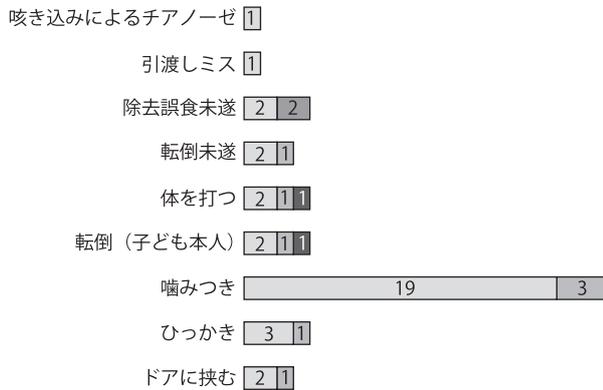
平成26年度・27年度・28年度前期までの事故・ヒヤリハット状況をまとめる。

#### ・事故・ヒヤリハットの内容と年齢別集計グラフ



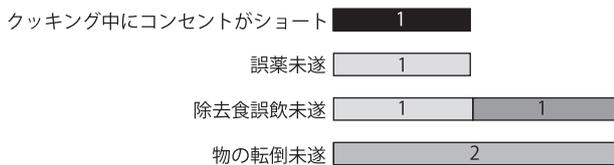
平成27年度ヒヤリハット（計9件）

□ 0歳児 □ 1歳児 ■ 2歳児 ■ 3歳児 ■ 4歳児 ■ 5歳児



平成28年度ヒヤリハット（4件）

□ 0歳児 □ 1歳児 ■ 2歳児 ■ 3歳児 ■ 4歳児 ■ 5歳児



\*ヒヤリハットの多い事例

- 1、噛みつき
- 2、体を打つ
- 3、物が落下未遂
- 4、誤飲、誤食
- 5、転倒（子ども本人）

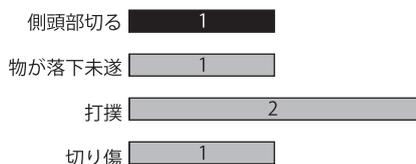
\*ヒヤリハット事故の起きる時間帯について

17時からのヒヤリハットの事故報告はほとんどなく、8時から12時の間にヒヤリハット事故70%が起きており、残りの30%は14時から17時までの間に起きている現状が見られた。

\*平成26年度～28年度に向けて0歳児～1歳児の噛みつきが多く、その対応と対処を考える。→事例3

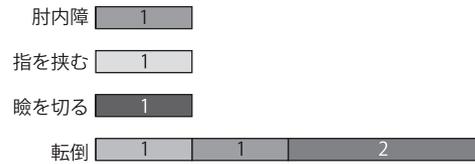
平成26年度事故報告（計4件）

□ 0歳児 □ 1歳児 ■ 2歳児 ■ 3歳児 ■ 4歳児 ■ 5歳児



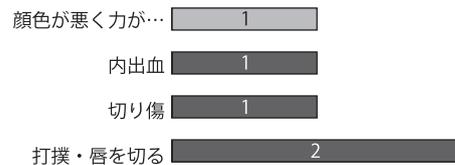
平成27年度事故報告（計4件）

□ 0歳児 □ 1歳児 ■ 2歳児 ■ 3歳児 ■ 4歳児 ■ 5歳児



平成28年度事故報告（計4件）

□ 0歳児 □ 1歳児 ■ 2歳児 ■ 3歳児 ■ 4歳児 ■ 5歳児



考察

平成26年度のヒヤリハット・事故報告をうけ、27年度からはヒヤリハット掲示板をつくり、より細かくヒヤリハットを分類し、皆に知らせてきた。グラフに表示した事により一目でヒヤリハットや事故がわかり、職員に周知する事ができた。

②事例と考察 \*事故報告の考察

【事例1】平成28年7月 午後5時 1歳児・腹部の怪我(事故)

状況：保育室にある昼間で、子ども達がいたにも関わらず掃除を始める。玩具を入れる棚を掃除している最中、別の掃除用具を取りにその場を離れてしまい、近くで遊んでいた1歳児の子どもが棚にもたれそのまま棚ごと倒れてしまい棚が軽く腹部にあたる。

原因：掃除をする前に、昼間から他の場所への子ども達の移動をしなかった。

対処：職員間で今回のことは、「なぜ起きたのか」「どうすればよかったのか」などを話し合い、一人ひとりが事故の状況や今後の対応等を確認した。

考察

「大丈夫だろう」という安易な気持ちと気の緩みが、今回の事故を起こしている。

①掃除をする前に安全確認をする。②子どもを移動させる。③その場にいた職員に声かけをする。という3つの行動を怠ったために起こったものでもある。そのことを認識し、職員同士連携を図り、安全確認を行うことの重要性を確認する。

【事例2】平成28年5月 保護者より環境についての意見（環境についての危険要素）

状況：靴箱を利用する時にドアと靴箱との間が開いており、靴を置いたり、取ったりする時に空間（段差）があるため危険に思うとの報告があった。

考察

子ども達が普段利用している靴箱。開園当初より利用してきたが、上記のような意見が出ることがなかった。今回、保護者からの声かけにより危険に気づくこと。「当たり前」だと思っていることや「慣れ」により、リスクに気づかない部分があったことを知らされる。保育環境の大切さを改めて知ることができた。

報告前の靴箱周辺



報告後の靴箱周辺



靴箱の前のすのこ  
とドアの隙間に、新  
たに小さなすのこ  
を置き補修した。

【事例3】1歳児 同じ子が何度も噛まれてしまう（ヒヤリハット/人・物的環境）

状況：友達に関心を持ち、関わりながら活発に遊ぶ中、玩具や場所の取り合いなどで、噛みつきトラブルがでてきた。

原因：十分に遊べる環境の設定や保育士同士の声かけ、子どもを見守る事への配慮不足。

対処：なぜ同じ子が何度も噛まれるのか？を職員間で考え、環境の工夫や職員間の声かけ、見守りの方法話し合うと共に、他のクラスの保育士にも交替で入ってもらい、気づいた事やアイデアなどの報告をしてもらう。成長過程を把握し、1歳児の保育環境づくりに重点を置くことにした。

考察

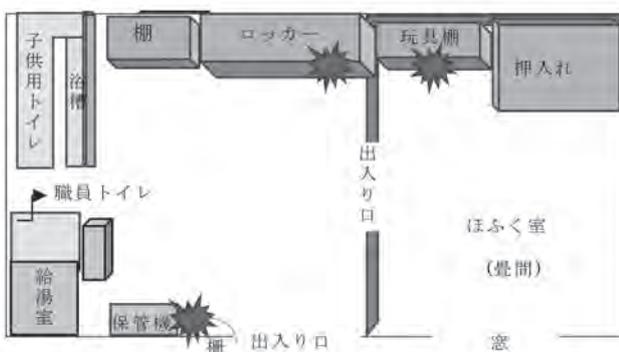
環境（人・物）がもたらすトラブルへの対処不足を感じた。子どもたちが過ごしやすい環境、トラブルを未然に防ぐための環境を考え、子どもの成長を捉え、保育環境の工夫と保育士の声かけ、一人ひとりのリスクの認知度を上げる必要性を感じた。

\*噛まれた事による保護者への対応も気になり、保護者アンケートを行なう。

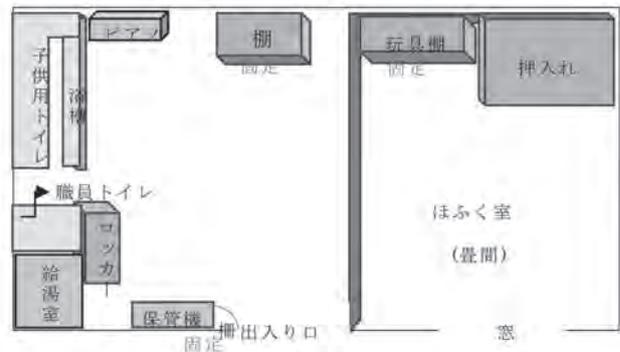
③環境面の工夫と及びリスク・マネジメントの勉強会

- ・環境面においての安全チェックシート（別紙3）をもとに、保育環境においての見直しを行う。
- ・事故発生場所→印マーク

〈0歳児室修正前の環境〉

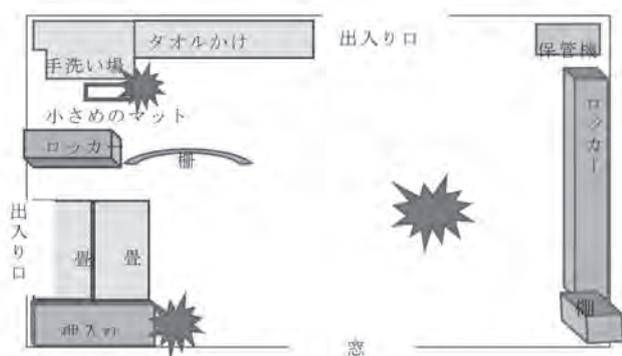


〈0歳児室修正後の環境〉



0歳児…ロッカーの上の花瓶が転倒・入り口の棚が外れる・玩具台の転倒。  
→ ロッカーの移動や遊具の固定を行なう。

〈1歳児・修正前の環境〉



〈1歳児・修正後の環境〉



1歳児…手洗い場での転倒・押入れのドアに指を挟む、など

- ロッカーを移動、手洗い場の死角をなくす。押入れに鍵をつける。
- テーブルを常に配置し、空間を区切り、絵本などのコーナーを作る。
- 常に遊べる場を提供し、噛みつき等への配慮を行なう。

### 考察

平面図を作成して、環境における危険箇所を確認し、子ども達が過ごしやすい環境を話し合い、配置工夫を行った。その事について、園内勉強会等を通し職員間でも周知確認する事で、リスク・マネジメントの必要性と見直しを図ることができた。

### ④アンケートの実施（職員・保護者）

\*アンケートを実施した背景

**職員** 職員にヒヤリハットの経験の有無を聞くと、ほぼ全ての職員が「ある」と答えており、職員の危機管理、認識などについて確認のためアンケートを実施。

**保護者** 園におけるヒヤリハットや事故の対応や対処について、どのように感じているか等について（保育園でのヒヤリハット事例で、噛みつきの割合が大きかった為）

～アンケートを通して見えてきたこと～

**（職員）職員21名/21名 回収率100%**

日頃の保育の中で、多くの職員が“事故やヒヤリハットを起こさないよう意識し、気に留めておくことが大切だ”と、認識していることが伺える。しかしながら、突発的、偶発的に起こり得る事故やヒヤリハットに対して、自身の保育での対応（環境や見守りの点で）が十分であったのか？という、そうではない箇所が見えてきて、常に反省と不安に苛まれていた姿が見えてきた。子どもの安全に対し、「大丈夫だろう！」という気の緩みを持たないために意識すること、そして、その予防に取り組むことの難しさを、アンケートを通して改めて感じる。

今後の課題としてリスク・マネジメントの徹底を行い、職員同士の共通理解・声かけ、そして怪我や事故が起こ

った後の保護者への対応についての更なる確認を行なう必要性を感じた。

**（保護者）102名/63名 回収率62%**

子どもたちがけがや事故にあった場合の対応は適切に行なっているつもりだったが、今回アンケートをとったことで、これまでの園の対応について不満に思っていた方も数名いたことを確認することができ、又いろいろな思いに気づかせてもらうことができた。その思いをしっかりと受けとめながら、けがや事故を起こした場合の今後の対応として、保護者の気持ちにしっかりと寄り添いながら職員間での報・連・相を基本とした共通理解のもと、事故を最小限に食い止めるということが私達保育士に課せられた責務だという思いを強く感じた。

また、励みになる意見も頂き、保育園によせる信頼感を感じ取ると共に、保育士としての責任の重さを実感した。今回のアンケートでは数名の保護者から、本音の厳しい意見が寄せられたが、私たちにとって、とても貴重な声を頂く事ができありがたく思う。

### 8. まとめ

今回の実践研究を行なうにあたり、「安全管理」におけるすそのが広く、何から行なうべきか悩む点が多々みられた。リスクを減らすために、保育環境の工夫やデータの分析などを行なうも、取り組みの成果が見えにくい点も上げられる。（ヒヤリハットがなかったことが、環境の工夫等と繋がっているのかの確認が取れないため、100%安全だと言い切れない）しかしデータ解読が、リスクの回避に結びつく手立てになることは十分感じ取ることができた。これからは、危機管理について一人ひとりが振り返り、「もう大丈夫！」という甘い考えを捨て、保育士一人ひとりが、危機意識を高めていきたいと思う。そうしていく事がヒヤリハットの一つを減らすことにつ

ながっていくものだと強く言えるだろう。

実践研究においては、いろいろな面での気づきを得た事と共に自らの情報共有のあり方や確認・報告の甘さなども見えてきた。また、園だけでの取り組みでは不十分な所も感じた。保護者を交えての事故予防の情報発信やあらゆる分野における危機管理の徹底を行なうことも、リスク軽減の一つであるという面から、今後の課題として結びつけていきたい。

これからは、様々なシチュエーションにおける事故予

防を保育士一人ひとりのリスク・マネジメントと受け取り、取り組んでいきたいと思う。

## 9. 今後の課題

- 1、より細かいリスクの分析の仕方。
- 2、報・連・相などの情報の共有。
- 3、事故が起こる前についての学びを子ども達や保護者等にどのように知らせ広めていくかを考える。

平成28年10月3日

第2 愛心保育園

日保協保育実践研究グループ

職員の皆さんへ

今年度の実践研究は、ヒヤリハットについて進めております。“子どもの命”を守ることは、私たち保育士にとって大事な責務です。しかし、日々の保育を行う中で、子ども達のけがや事故を未然に防げるよう努力していても、やむを得ず防げない場合もあります。

実践研究を通して、職員一人ひとりが再度“子どもの命を守るため”に安全面への配慮を行い安心して過ごせる環境を提供できるよう意識を高めていきましょう。実践研究の資料としてアンケートを作成しましたので、ご協力をお願いします。

\*該当する箇所に丸印を付けてください

- \*アンケートの回答も載せています
- 1、噛みつきを、何度か繰り返してしまう子がいます。その原因が家庭状況(環境)に影響する場合がありますがその子の家庭状況(環境)を知っていますか?(但し必ずしも家庭状況が直接噛みつきに結びつくわけではありません)
 

ア、知っている (2名) イ、ある程度知っている (13名) ウ、あまり知らない (6名)

\*ア、イに印をつけた方は、“どのような環境”で、“原因としてどのようなこと”が考えられますか?(できるだけ簡単に記入して下さい)

    - ・両親が共働きで忙しくしているため子どもとかわる時間がなかなか取れない。
    - ・家族の意識を自分に向かせたい、注目されたいと思いがあっても言葉で十分伝えられないストレスより。
    - ・母親の妊娠、出産など (他6件の意見有)
  - 2、子どもは時に、予想できない行動を起こす場合があります。あなたは、常にどのような安全面への配慮をしていますか?
    - ・室内、戸外で遊ぶ前に危険物がないかチェックをする。子どもたちが手の届く場所に物を置いたりせず環境を整える。移動したときは、人数確認を行うようにする。・保育士の連携のなかで密に声をかけあい、環境設定に配慮する。・子どもが集まっている場所では必ずそばに付く ・死角を作らず、どこからでも見やすい位置に家具を配置する。 (他14件の意見有)
  - 3、子ども同士のトラブルからけがに発展してしまう事があります。子ども同士で解決することも大切ですが、あなたは、どのように見守っていますか?
    - ・子どもに背を向けないなど…保育室全体が把握できるよう職員の立ち位置に気をつける。
    - ・タイミングや場面での言葉かけを行い、けがに発展(危険の無いよう)見守っている。(6人)
    - ・トラブルが起こらない環境を作る(玩具を十分に用意する) (他8件の意見有)
  - 4、けがや事故を起こした時に保護者に伝える際、どのようなことに気をつけて伝えていますか?
    - ・「いつ」「どこで」「どんな処置をしたのか」を丁寧に伝える。・誠意を持って対応する。
    - ・落ち着いた態度で保護者に不信感を与えないよう言葉遣いに気を付けている。 (他13件の意見有)
  - 5、最後にヒヤリハットを起こさない為の改善策として考えられることを記入して下さい。
    - ・ヒヤリハット報告をしっかりと共通理解話し合った解決策を忘れず実行していく。・「報連相」が大事
    - ・常に緊張感を持ち、安全面には気を付け、気を抜かず保育をする。・職員同士“危険”に気づいたらその場でどうしたらよいか考え対応する。・どんな場所にも危険が潜んでいる等想定して見る。(他16件意見有)
  - 6、その他(自由記入・ヒヤリハットについて日頃の保育を振り返り何でもOKです)裏面に記入して下さい。
    - ・噛みつきやひっかきなど子ども同士のトラブルで見られる怪我は、保育士がいくら注意していても起こっている状況があり、毎日心を痛めている。けがの報告の仕方や普段から保護者とコミュニケーションを図り、信頼関係を築くことの大切さを痛感している。よりよい保育を行い、子どもに良い環境を提供していくためにも家庭と園で育てているという姿勢が大切だと改めて学んだ。 (他6件の意見有)

\* 回収率 100% : 職員21名中21名提出

保護者の皆様へ

平成28年10月20日  
第2愛心保育園  
保育実践研究グループ

毎年、保育の質を高めるために職員が取り組んでいる保育実践研究（日本保育協会主催）。今年度は、ヒヤリハットについてとりあげ、“子どもたちにとって安心、安全な環境作り”というテーマを掲げ“子どもの命を守る”ことが、私たち保育士に課せられた大きな責務だという思いで実践しております。日々の保育の中で、子ども達にけがをさせないように、又事故を起こさないように配慮しながら努力をしておりますが、やむを得ず防げない場合もあります。今回、実践研究を通して今一度、職員一人ひとりがヒヤリハットや事故を起こさない為に、意識を高めたいという思いで今回のテーマに沿って進めております。

実践研究の資料として保護者様にもアンケートを作成しましたので、ぜひご協力を頂き、皆様のご意見を反映させながら今後もより良い保育ができるよう努めたいと思います。（※該当する箇所に丸印をつけて、25日（火）までに提出して下さいますよう、よろしくお願いします）

\*アンケートの回答も載せています

- 1、当園の保育環境(人的、物的)については満足(安心)できていますか？  
ア、満足である(55人) イ、満足できない(3人) ウ、その他(5人)
  - 2、これまでお子様が園でけがや事故にあった事がありますか？  
ア、ある(28人) イ、ない(29人) ウ、その他(6人)
  - 3、お子さんが、けがや事故を起こしたときの園での対応はどうでしたか？  
ア、適切であった(23人) イ、不満があった(9人) ウ、どちらとも言えない(31人)  
\*イ、と答えた方にお聞きします。どのようなことで不満がありましたか？  
    - ・事故後の連絡が遅かった(4人)
    - ・職員の対応が悪い
    - ・担任ではない職員からの報告
    - ・噛まれた
  - \*園の方に、そのことを伝えましたか？ ア、伝えた(2人) イ、伝えていない(6人) \*1人記入無  
↓
  - \*ア、と答えた方にお聞きします。その後の園の対応はどうでしたか？  
    - ・特に変わらない
    - ・その事について対応してくれた
  - 4、園内、園外で危険だと思われる箇所(状況)はありますか？どんな状況ですか？  
ア、特にない(30人) イ、危険だと思う箇所(状況)がある(16人) ウ、よくわからない(17人)  
\*イと答えた方にお聞きします。その場所はどこですか？(どんな状況ですか？)記入してください  
    - ・駐車場(15人)
    - ・園庭の固定遊具
    - ・園内の階段(4人)
    - ・園庭の鉢物
  - 5、自由記述(上記の内容、またはそれ以外に日頃感じていることがありましたらどうぞ遠慮なくお書きください)  
    - ・自分自身(保護者)も危険には気をつけている。
    - ・噛まれる頻度が気になる(噛まれた・噛んだ)等両方の報告はしているのか？
    - ・職員間の情報共有のあり方はどのようにしているか？
- \*ご協力ありがとうございました(記入後は、玄関先のアンケート Box が職員の方へお渡しください)

回収率 62% : 保護者102名中62名提出

平成 年度

保育室安全チェック表

第2愛心保育園

組 月		園長	印	主任	印	担当	印
保育室	点 検 内 容	点 検 日					備 考
		日	日	日	日	日	
窓・戸	窓ガラス、戸に破損はないか						
	カーテンの破損はないか						
	レールには、ぐらつきや破損はないか						
天井 壁面	照明器具の破損、その他問題はないか						
	掲示物はしっかりとめてあるか						
	タオルかけなどのフックはきちんとしているか						
戸棚 ロッカー	ぐらつきや転倒の危険はないか						
	転倒防止策がされているか						
	棚に破損はないか						
机 椅子	破損やぐらつきなどはないか						
	子どもの体格にあったものか						
各 コーナー	はさみなどの危険な物は安全に保管されているか						
	粘土・粘土べら・クレヨンなども整理されているか						
	絵本コーナーは整理されているか						
ピアノ 電化製品	子どもがふれても危険がないような環境におかれているか						
	電気コード、コンセントは破損・老朽化していないか						

安全点検表 (トイレ)								(○・・・異常なし ×・・・要整備)			
(平成 年 月)		点 検 内 容	第1週(日)	第2週(日)	第3週(日)	第4週(日)	第5週(日)	備 考			
床面	破損していないか										
	滑りやすくなっていないか										
便器	破損していないか										
	水洗の場合、水はよく出るか										
	排出、排水の状態はよいか										
全体	全体として明るく、清潔で安全な状態が保たれているか										
担当印又はサイン											

平成28年度 建物設備チェック簿 (玄関・廊下・トイレなど)

異常なし○ 異常あり×

第2愛心保育園

4月		チェック	印	備考	5月		チェック	印	備考	6月		チェック	印	備考
1.	金				1.	日				1.	水			
2.	土				2.	月				2.	木			
3.	日				3.	火				3.	金			
4.	月				4.	水				4.	土			
5.	火				5.	木				5.	日			
6.	水				6.	金				6.	月			
7.	木				7.	土				7.	火			

\*チェック最終日は園長に提出 (不備があるときはその都度報告してください)

## 講評：未然に事故を防ぐための保育士のリスク・マネジメント

### ～保育環境と事故・ヒヤリハットを通して見えてきたことから～

評者：天野 珠路

職員全員で共通認識を持ち、事故防止に取り組んだ実践記録です。事故やヒヤリハットの分析やその検証、リスク・マネジメントに関わる勉強会の実施など園全体で真剣に取り組む様子が伝わってきます。職員と保護者双方にアンケートを実施したこともそれぞれの本音が引き出され、よかったと思います。さらに保護者アンケートの分析やアンケートを受けての改善が具体的に記されていると説得力が増したと考えます。

保育現場では子どもの発達を踏まえ、安全管理や事故防止に努めていかなければなりません。3歳以下の子どもの入所が増え、経験不足から身のこなしが昔よりも鈍くなったと言われる中で、保育室内外の安全点検を行い環境の改善を図ることはたいへん重要でしょう。報告の中でもリスクの回避に結び付く手立てを考え、実行に移すことの必要性が強調されています。

しかし、例えば1歳児の噛みつきを防止したり、子どものけがを防ぐために求められるのは監視することではなく、子どもが集中して遊んだり、没頭して好きなことに取り組んだりできる保育室の環境構成です。一人ひとりの子どもが満足に遊べるための環境への言及がやや弱いように感じられました。

評者：酒井 かず子

保育士として、保育活動中に「起こるけがや事故、トラブルに心を痛めていることがよくわかります。

前年度の取り組みに加えて、今年度は内容の分析や見直し、勉強会の確保や保護者にもアンケートの実施などを行い、職員間だけでなく保護者の指摘にも耳を傾けたことには感心しました。事例として、掃除中のけがや下駄箱のスノコの隙間、かみつき、等を挙げ、丁寧に検討し、素早く対応

している様子にも感心しました。また、至る所に、気の緩みを指摘していましたが、まさにその通りと思いました。

まとめに記載されていましたが、リスクを減らすために、保育環境の工夫やデータの分析などを行うも、取り組みの成果が見えにくい点も挙げられるとありましたが、この点については、短期間での成果を求めるのではなく、少し長い目で、保育内容や保育環境で解消できるよう取り組んでいかれたら、さらに充実した内容になると思いました。

評者：日吉 輝幸

日常の保育のあらゆる場面について、テーマを絞って研究することは、日々の保育を振り返ることができるものであるとともに、より良い保育の提供のためには欠かせないものであると筆者は考える。第2愛心保育園は毎年研究テーマを設定し、継続的に保育の質の向上に努めているところに感心させられる。

今回は、事故防止のためにヒヤリ・ハットの事例を詳しく分析し、全職員が共通認識できるように働きかけている。また、保護者向けアンケートを行い、客観的な意見を取り入れ、問題のあるところはすぐに改善しているところは多くの園で参照すべきところであろう。しかし、保育室内で発生した事故やケガを契機に、保育室内の環境構成を見直した旨の記述はあるが、その後の状況観察・見直しの成果等の記述が無くもの足りなさを感じた。

園内での事故やケガは起きないに越したことはないが、そのリスクをより少なくしたり、未然に防いだりするためにも、日々の細やかな気付きを大切にして保育を行っていただきたい。第2愛心保育園は、今回の研究を通して今後の課題を明確にしておられるので、更なる実践研究の成果報告を期待している。

## 園庭のない保育所の環境設定 ～楽しく身体を動かす室内遊びの工夫～

東京都・公益財団法人鉄道弘済会 南千住駅前保育所（おひさま保育園） 杉浦 悠

### I. はじめに

平成23年に開設された南千住駅前保育所は、都会の3駅に囲まれ南千住駅から徒歩1分という通勤しやすい場所にある。周囲は昔ながらの商店街と高層ビルが立ち並ぶ。

0～6歳まで各クラス9名ずつ54名の園児が在籍している。1、2歳児は合同保育、3、4、5歳児は縦割保育を行っている。その他、一時保育、病後児保育、子育て支援事業を行っている。当園は三階建てで園庭がない。屋上はあるが、思い切り走ったりボール遊びをしたりできるスペースはない。時々隣接するサポートセンターの屋上を利用させてもらっている。広い場所となると近くの公園でも3歳以上児が歩いて片道15～20分もかかってしまい、遊び込み始める頃には帰園時間になってしまう。保育者たちも保育計画を立てる際に頭を悩ませている。

また、第三者評価の保護者アンケートからは、3、4、5歳児の運動遊びが不足しているのではないかと懸念する意見がある。そこで限られた空間で身体をのびのびと動かす遊びの環境設定と、身体を動かすことを楽しめるような保育の展開を考えてみたいと思う。

#### 【当園の縦割保育】

3歳児と5歳児はお相手さん制度を取り入れ、きょうだいのような関わりが持てるようにしている。また、3、4、5歳児クラスはグループ活動も行っており4、5名のグループが6つあり、それぞれのグループで当番活動を行っている。

#### 【当園の保育目標】

- ・あいさつができる元気な子ども
- ・いのちの大切さを感じられる子ども
- ・のびのびと自分を表現できる子ども
- ・思いやりのあるやさしい子ども

【2階平面図】



### II. 研究の目的

- ①園庭がなくても遊びの充実が図れるようにする。
- ②限られた室内の空間で身体を使った遊びを意図的に取り入れ、自ら「身体を動かしたい」という気持ちを子ども達から引き出す。
- ③室内遊びとなる時間帯の運動量の増加を図る。
- ④異年齢での遊びを通して思いやりの気持ちが育つようにする。(保育目標に沿って)

### III. 研究の方法

- ・園内の環境を最大限に利用する遊びを用意する。
- ・遊びの中から変化していく子どもたちの様子を記録する。
- ・デイリープログラムの改善をする。
- ・対象年齢は3歳から5歳児とする。

### IV. 事例と考察

#### 【事例1】ピクニックごっこ（4月）

環境設定：製作→保育室

ピクニックごっこ→廊下、ホールを使用

製作準備物：画用紙、色鉛筆、食材マグネット

ピクニック準備物：カラー帽子、子どものリュック、作った弁当（絵）、ブルーシート

ピクニックコース準備物：カラーコーン、滑り台、カラーマット、ソフト積み木、マット、カラーボール、フープ

#### エピソード1～弁当をつくらう～

保育者：「今日はいつも遊んでいるサーキット遊びをもっと楽しくしようと思うんだけど…どうかな？」

5歳児：「えー！」「どうやって？」

保育者：「今月のうたってなんだっけ？」

4歳児：「さんぼ！」

保育者：「みんなが大好きなさんぼのうたを歌いながらできるサーキット遊びはどうか？」

5歳児：「それいいね！」

保育者：「歩いたり、サーキットしながら歌ったりしてピクニックや遠足みたいだね！」

保育者：「せっかくだからピクニックごっこにして、お弁当も用意しようか！」

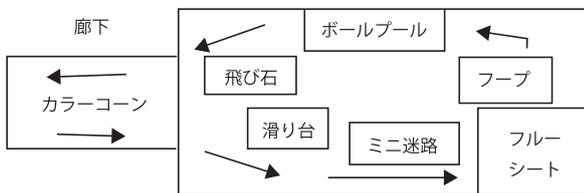
3歳児：「本物？」

保育者：「本物みたいにおいしいそうなお弁当を絵に描いて持っていかない？」と弁当箱の線が描いてある画用紙に好きな物を描きはじめた。「ぼく、からあげが好きだからからあげを描く！」「たこさんウイナーにしよう！」など好きなおかずを描いたり、何を描くか友だちと相談したり、食材カードを見ながら描く姿が見られた。

### エピソード2～ピクニックに出かけよう！～

遊び方：ピクニックのコースに見立てたサーキットを順に進む。途中にあるブルーシートで弁当を食べ、食べ終わった子からコースの先に進み繰り返し行っていく。

【サーキット配置図】※矢印は子どもの進行方向



個人のリュックに手作りの弁当（絵）をしまい、カラー帽子を被ってピクニックごっこが始まった。滑り台に並んでいる際には、5歳児のSさんが年下の友だちに「1列に並んで待つんだよ」と声をかける姿が見られた。ブルーシートに着くと、気の合う友だちを誘い合って座りリュックから弁当を嬉しそうに出していた。また、「給食のうた」を歌い「いただきます」と挨拶をしてから食べたり、何を作ったのか弁当を見せ合い、食べる真似をしたりしながら笑顔で話し、盛り上がっていた。

食べ終わった子からピクニックコースに戻り、先に進んだ。歩く際には友だちと「さんぽ」のうたを歌いながら歩いて進む姿も見られた。ボールプールが気に入り、長い時間楽しむ子やコースを何周もする子などそれぞれの楽しみ方で過ごしていた。

#### 〈考察1〉

- ・食育で使用している食材カードを出すことで、何を描くか迷っている子も描きはじめることができたのではない。
- ・サーキット遊びでは早く進みたい気持ちから走る子がいるが、ピクニックごっこにしたことで走り続けるこ

となく、静と動の遊びをうまく組み合わせて遊んでいた。

- ・ごっこ遊びにしたことが遊び込めるきっかけになったのではない。
- ・気の合う友だちと過ごす＝同じ年の友だちと過ごすになっている。

#### 〈課題1〉

- ・異年齢の友だちと自然と関わるにはどんな遊びを取り入れたら良いのか。
- ・継続して楽しむ、自主的に楽しむための環境の工夫は何ができるのか。

### 【事例2かくれおに】エピソード3

～はじめてのかくれおに～（9月）

環境設定：保育室、廊下、ホールを使用

保育者の配置：保育室×1 ホール×1 鬼役×1

保育者が数えはじめると子どもたちは「キャー！」「急げ！」「どこにしよう」とホール、部屋を行き来しながら隠れる場所を探していた。

すると5歳児Hさんは、「見つかった！」「でも逃げられるんだよね！」と言って鬼役の保育者から逃げたり、別の隠れ場所を探したりしながら遊び続けていた。また、5歳児Sさんは、かくれんぼとは違い見つかったも逃げなくてはいけないと分かって、見つかったもすぐ逃げられる場所に隠れていた。4歳児Hさんは隠れずずっと逃げ回っていた。3歳児は気の合う友だち同士同じ場所に隠れ、鬼役に見つかる「逃げろー！」と別の隠れ場所に移動し、同じ友だちと隠れていた。

### エピソード4～5歳児さんが鬼のかくれおに～（11月）

環境設定：保育室、廊下、ホールを使用

保育者の配置：保育室×1 ホール×1

鬼役（5歳児）×4

これまでの活動では「先生鬼ね！」と言っていたうみぐみの子どもたちだったが、かくれおにをすることを伝えたと「鬼やりたい！」と5歳児が声をあげた。

5歳児がかくれおにの鬼をするのは初めてだったので、保育者：「年下の友だちを捕まえる時はどうやってタッチすればいいかな？」と聞くと

5歳児：「んー、優しく！」と答えた。

かくれおにが始まると隠れている友だちを探したり、隠れずに待っていたりする友だちを追いかける姿が見られた。探しながら追いかけるため本気で追いかけるのではなく、走るスピードを考えて追いかけて、捕まえる際には優しくタッチをすることができた。

#### 〈考察2〉

- ・かくれんぼと鬼ごっこを組み合わせ、繰り返してきたことで3歳児もルールを理解し、事例1で課題となっていた異年齢の友だちと遊ぶ事ができた。
- ・活動する場を広げたことで運動量の多い遊びに繋げる

ことができた。

- ・かくれんぼとかくれおにで隠れる場所を考えて変えるなど自ら意欲的に参加する姿が見られた。
- ・友だちをタッチする強さを考え、行動することができ、遊びのなかで相手を思いやる気持ちが芽生えてきた。

#### 〈課題2〉

- ・1回戦ごとにゲームを区切るのではなく、続けて楽しむにはどのような工夫が必要か？

#### 【事例3】キャタピラ遊びからどんな遊びができる？

(2月)

環境設定：キャタピラ作り→保育室

トンネル遊び→ホール

ドッジボール→保育室

準備物：段ボール×6 水性マーカー ビニールテープ

大型遊具を使用した運動遊びをすることが多かったので、製作したものを使って身体を動かせる遊び「キャタピラ作り」を取り入れることにした。(この活動は今回で2回目)

～前回までの活動～

年齢別でキャタピラを作って遊んだ後、忍者ごっこをしていた。作ったキャタピラに隠れたり、そーっと歩いたり、音をたてないように走ったり、色々な動作ができた遊びであった。今回は忍者遊びだけではなく、キャタピラで他にどんな遊びができるか子どもたちが考えることになった。

#### エピソード5～キャタピラ作り～

今回は当番グループ(異年齢)に分かれて製作活動を行った。

- 3歳児：自分の好きな絵をマーカーで描いたり、年上の友だちに描いてほしいものをリクエストしたり、相談しながら絵を描くことを楽しんでいた。
- 4歳児：年上の友だちが描いた絵を真似て描いたり、普段から絵を描いている子は今気に入っている絵を描いたりしていた。
- 5歳児：年下の友だちのリクエストに応じて絵を描いたり、ビニールテープを組み合わせて花を作ったりする姿が見られた。

#### グループ①「クリスマス」

1人がクリスマスツリーを描くと周りに星やトナカイ・サンタクロース、プレゼントを描きクリスマスのキャタピラになった。



#### グループ②「自分の好きなもの」

それぞれが好きな物を空いているスペースを探して描き、友だちに見せ合いながら楽しんで描いていた。



#### グループ③「うみ」

3歳児Rさんのリクエストで「かにを描いて」と5歳児Hさんが頼まれ、かにを描くと3歳児Rさんがうみの水を描いていた。それを見た4歳児Aさん、Sさんは魚やサメを描き、うみの世界が広がった。



#### エピソード6～キャタピラでどんな遊びができる？～

キャタピラで遊んだ後は、「忍者ごっこ」を取り入れていた。しかし、子ども主体ではなかったことから、子どもたちにキャタピラでどんな遊びができるのか考えてもらい、遊ぶことにした。(前日に考えてくることを伝えていた)

保育者：「キャタピラでどんな遊びができるか考えてきてくれた？」

5歳児：「トンネルは？」「トンネルにもなるよね！」

保育者：「他にどんなことができるかな？」

4、5歳児：「ドッジボールのバリケード！」(バリケード=中央の仕切り線)

周りの子ども：「それいいね！」

保育者：「2つも素敵な考えが出たね！楽しそうだからどっちもやってみようか」

5歳児：「最初はトンネルね！」

ということでトンネル遊びから始めた。

#### 1. 「トンネル遊び」

職員が3箇所でトンネル(キャタピラ)を持ち、子どもが考えた動物などに変身してトンネルくぐりをした。

1人ずつ変身したいものを「ライオンさん！」などと友だちに聞こえるように伝え、同じ動物でもそれぞれに動物の特徴を表現しながらトンネルをくぐっていた。繰り返していくうちに、「へび」になるときには友だちと繋がり、長いへびのままトンネルをくぐってみたり、「キリン」になった時には、親子という設定を作り、異年齢の友だち2、3人で手をつないでトンネルをくぐる姿も見られた。



【キャタピラ遊び】



【トンネル遊び】



【ドッジボール仕切り】

## 2. 「ドッジボールの仕切り」

ドッジボールをすることが大好きな子どもたち。作ったものを仕切りにするというので、自分たちから積極的に動いて仕切りを作り始めた。しかし、キャタピラだけでは倒れてしまうことに気づき、5歳児のアイデアでソフト積み木を使って支えることになった。ドッジボールが始まるとキャタピラの仕切りに隠れながらボールから逃げる姿も見られた。

### 〈考察3〉

- ・作った物を使って遊ぶことで、1つの遊びだけではなく、他にどんな遊びができるのか考える機会ができ、自ら遊ぶという活動に繋げることができたのではないかな。
- ・製作から運動遊びをしたことで、異年齢の友だちと相談して決めたり、遊びを考えたりして、友だちの意見に共感することができたのではないかな。
- ・4月のピクニックごっここと比べると、友だちとの関わり方や一人ひとりの成長した姿を見ることができた。

異年齢での活動を続けてきたことでこういった姿が見られるようになったのではないだろうか。

### 〈課題3〉

- ・主活動で遊んだ後キャタピラをしまう場所がなかったため、子ども達が遊びたい時に遊べなかった。自由に取りだせるような環境の工夫をする必要がある。

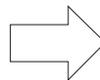
### 【事例4】 デイリープログラム

当初のデイリープログラムでは十分に運動遊びを行なう時間が取り入れられていないことに気づき、見直すこととした。朝の会の前には、2歳児から5歳児までの園児がホールで今月のダンス1曲、子どものリクエスト1曲（計2曲）を異年齢児で楽しむ時間を設けた。（平成27年度4月から導入）

また、午後の時間は体を動かして遊ぶ時間がなかったことから、おやつ後にホールで遊ぶ時間を設けた。（午睡明けは着替えた子からおやつを食べることにした）

【見直す前のデイリープログラム】

時間	3、4、5歳児クラス
7:15	登園、視診、自由遊び
9:00	朝の会
	縦割り活動・年齢別活動
12:00	給食・歯磨き
13:20	午睡
14:45	目覚め・おやつ
15:45	帰りの会・自由遊び
	視診・順次降園
18:15	延長保育・おやつ・降園
19:15	降園



【改善後のデイリープログラム】

時間	3、4、5歳児クラス
7:15	登園、視診、自由遊び
9:00	今月のダンス（月・水） 朝の会
	縦割り活動・年齢別活動
12:00	給食・歯磨き
13:20	午睡
14:45	目覚め・おやつ
	ホール遊び・自由遊び
16:00	帰りの会・自由遊び
	視診・順次降園
18:15	延長保育・おやつ
19:15	降園

### エピソード7～朝のダンス～

登園は9時までとなっているが、9時過ぎに登園してくる4歳児Hさんはスムーズに保育室に入室できなかった。朝の会の前にホールでダンスを踊ることになってからは、友だちが楽しそうに踊っている姿をジューツと見つけ、興味を持ち始めたようだった。そして、ダンスを取り入れてから数日で「行ってらっしゃい」と保護者を笑顔で見送り、自らダンスの輪に入り、途中からでも音楽に合わせ、踊りだしていた。

また、運動会や発表会で踊った曲が流れるとそのクラスの子がみんなの前で見本となり、自信に満ちた表情で堂々と踊る姿も見られた。

### エピソード8～午後の運動遊びを導入して～

午睡明けは眠さもおり着替えに時間のかかる子が多かった。みんなで揃ってからおやつを食べていたため、おやつ時間も遅くなってしまっていた。子どもたちにおやつを食べ終わったらホールで遊べることを伝え、これまで着替えに時間がかかっていた子も「着替えた人

からおやつを食べられる」「おやつを食べた人から遊べる」「ホールで遊べる」と一人ひとりが活動への見通しを持ち眠さも忘れて活動し始めた。

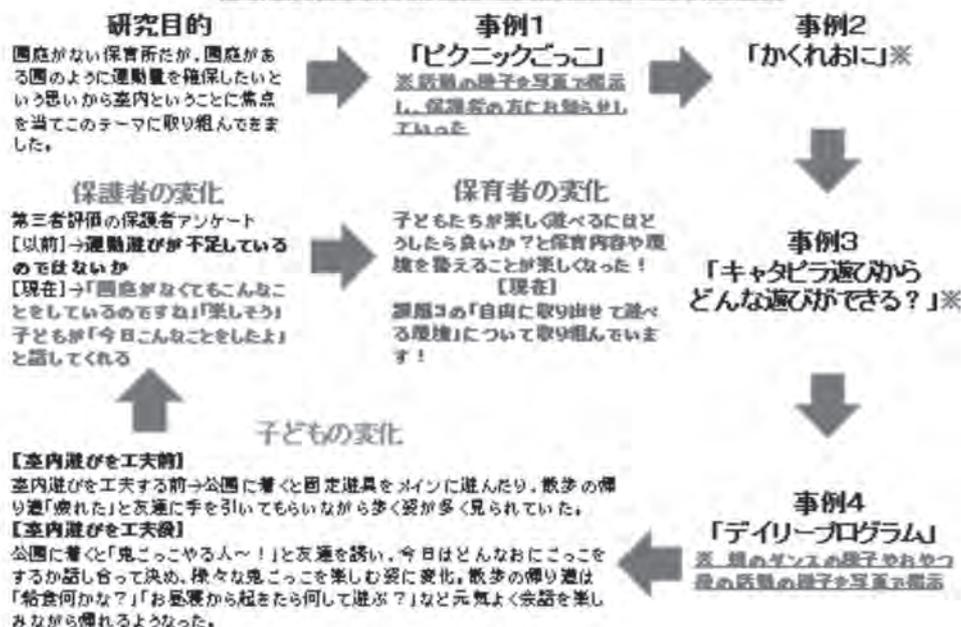
#### 〈考察4〉

- ・行事で発表したダンスを行事が終わってからも楽しめる機会になった。
- ・ダンスの日を楽しみに登園することができるようになった。
- ・ダンスやおやつ後の運動遊びを取り入れたことは運動量の増加だけではなく、心理的な面にも影響があったのではない。
- ・運動量を確保することは心理的にも成長を支える1つの方法になるのではない。

#### 〈課題4〉

- ・「多様な動きが体験できるような人的・物的環境を整え、より充実させることが必要である」(③文献引用)とあるが、運動遊びの時間が増えてきたことで、改めてその大切さが課題となった。

## 実践研究開始から現在までの変化



この研究を通して子ども、保護者、保育者に変化があった。室内遊びを工夫する前の子どもたちは公園に着くと固定遊具をメインに遊んだり、散歩の帰り道「疲れた」と友達に手を引いてもらいながら歩く姿が多く見られていた。室内遊びを工夫後は、公園に着くと「鬼ごっこやる人～」と友達を誘い、今日はどんなおにごっこをするか話し合っ決めて、様々な鬼ごっこを楽しむ姿に変わっていききました。散歩の帰り道は「給食何かな？」「お

昼寝から起きたら何して遊ぶ？」など元気よく会話を楽しみながら帰れるようになった。

保護者の方を対象にした第三者評価のアンケートで以前は運動遊びが不足しているのではないかと懸念する声が多くあったが、現在は「園庭がなくてもこんなことをしているのですね」「楽しそう」「子どもが「今日こんなことをしたよ」と話してくれるようになりましたと保護者の方から直接お話しを頂けるようになった。

保育者の変化としてこの研究、事例を進めていく中で子どもたちが楽しく体を動かして遊べるにはどうしたら良いか？と考えることで保育内容や環境を整えることがとても楽しくなり、クラス担任と相談をしたり保育内容を見直す機会が自然と増えていった。

現在は課題3の「自由に取り出せて遊べる環境」について取り組んでいて、子どもたちが自主的に遊びを展開できるように工夫している。

## V. まとめ

園庭がない保育所だが、園庭がある園のように運動量を確保したいという思いから室内ということに焦点を当てこのテーマに取り組んできた。

3、4、5歳児のデイリープログラムを見直し、ホール等を活用して室内で運動遊びを楽しめる時間を確保したことや様々な運動遊びの経験ができるよう活動内容を工夫したこと、さらに「みんなで一定時間同じ質の運動遊びを楽しめるような保育内容」(②文献引用)を組み入れていったことが、十分な運動量を引き出すきっかけに繋がったと感じる。

縦割りクラスを対象にしたことで運動面だけではなく、心理面でも見えてきたことがある。

同じ遊びをすることで、年下の子は年上の子の姿に憧れ、自分もそうなりたい、自分もやってみたいという意欲がわく。また、保育者からではなく年上の子から学ぶ

ことが多くある。年上の子は年下の子から尊敬の目で見られることにより自分に自信がついたり思いやりを持って接したりするようになる。このように年齢差のある集団が、楽しく身体を動かしながら遊びのなかでの学びをより発展させているように感じた(①文献引用)。

以上のことから「園庭の有無」が大切なのではなく、各園が置かれた保育環境を受け入れ、保育者が子どもの主体性を尊重し創意工夫を凝らしながら保育を楽しむことが重要で、一人ひとりの成長へ繋がったのだと考える(②文献引用)。今後は3歳以上児だけではなく、未満児を対象にした楽しく身体を動かす室内遊びの工夫をし、年齢と成長にあった運動遊びができるように目指していく。また、室内だけではなく園外での運動遊びの時間・内容についても考え、さらに楽しく身体を動かせるようにしていきたい。

## 引用文献

- ①大豆生田啓友著『子ども主体の協同的な学びが生まれる保育』株式会社 学研教育みらい(2014年6月24日)
- ②保育科学研究 第5巻『保育所における園児を取り巻く多様な物的環境と、子どもの身体活動量の関係に関する研究』研究代表者 坂本喜一郎(2014年)
- ③谷田貝公昭著『新版 保育用語辞典』株式会社 一藝社(2016年2月10日)

評者：天野 珠路

近年、都市部を中心に増えている園庭のない保育所。そのマイナス要因を克服して遊びの充実を図ろうとした園の実践記録です。職員全員で課題意識を持ち、保育内容やデイリープログラム見直したり、子どもの運動量に配慮した保育を工夫したりするその取組の多様さに感心させられます。同じように園庭のない園にとっては参考になることでしょう。

ホールで運動遊びを楽しんだり、限られた環境のなかで体を動かして遊ぶ工夫を継続的に行ったりすることで子どもたちの意欲や能動性が養われていくことがわかります。園庭がないというハンディを越えて子どもが生き生きと遊ぶために、保育士が創意工夫し、保育の引き出しを増やすことが求められます。また、ごっこ遊びに使うものを十分用意したり、手作り遊具を活用したりしながら保育を充実させていくことが子どもの育ちを支えます。

園庭がなくとも大丈夫なのか？これだけ工夫してもなお補いきれないものがあるのか？結論は出ませんが、この園のように引き続き模索し、豊かな実践を重ね、検証していくことが必要でしょう。

評者：石川 昭義

本報告は、当保育所が第三者評価の保護者アンケートにおいて「3、4、5歳児の運動遊びが不足しているのではないかと懸念する意見があったことを踏まえ、それを保育所全体の課題意識として共有し、それに対してどのように対応したのかについてまとめている。特に、室内で運動遊びを行う時間を確保し、遊び方を工夫する実践事例が具体的に紹介されており、同じような環境にある保育所にとって参考となる報告といえるだろう。

こうした問題設定から実践・考察へとつなげる

過程は評価できるが、室内遊びを工夫する前後の子どもの様子の比較（記述の仕方）において、着眼点を決めた観察ができると説得力がより出されたのではないと思われる。また、各事例には、〈課題〉が付けられているが、それらに対してどのように対処したかの記述がなされているとよかった。報告にもあるように、保育者相互で保育の内容について話し合うことが多くなったことを自信につなげ、第三者評価を踏まえた課題の解決につなげる取組を継続していくことが期待される。

評者：日吉 輝幸

待機児童問題に沸く都市部では、保育施設を増やそうにも設置するに適した場所がないというのが現実であろう。実践報告をいただいた保育所も、大都市の駅前という通勤には便利な立地であろうが、こと子どもを保育する環境として適切かという点に甚だ疑問が残る。

都市部にあつて園庭が無い保育所で、園児の運動不足を解消するために試行錯誤し、室内でできる運動遊びを実践していることは評価すべきである。また、園児自身が話し合ったり考えたりして遊んでいる様子と、室内で経験した遊びが、屋外活動で訪れた公園でも展開していることは良いことだと思った。

レポートには、「園庭の有無」が大切なのではなく、各園が置かれた保育環境を受け入れ、保育者が子どもの主体性を尊重し創意工夫を凝らしながら保育を楽しむことが重要との記述が引用されている。確かにそうであるが、園庭は運動量を確保するだけの場所でないことは言うまでもない。四季折々の自然を感じたり、動植物と触れ合ったり、砂や土、水を使って遊ぶなどの実践はどのように行っているのかなど、運動以外の部分で園庭が持つ機能をどのように代用しているのかを記述した、更なる実践報告を期待したい。

## 子どもが楽しく絵を描くには ～はじめてのお絵描きから描く楽しみへ～

新潟市・公益財団法人鉄道弘済会 新津保育所（さくら保育園） 鳥井美幸・山口美根子・簗和郁子・貝津友花

### I. はじめに

保育中でお絵描きをしているが、近年、絵を描けない、描きたがらない、描く機会を与えると固まってしまう子が増えてきた。楽しく描いている子もいるが、そのような子どもが増えてきたのはどうしてかと疑問に思った。楽しく絵を描けるようにするには、保育者がどのような関わりをしたら良いのかを考えていきたい。

### II. 研究の目的・方法

◎楽しく絵を描くことによって、コミュニケーション能力、創造力を高める。

・年齢別に絵を描くための環境設定を用意し絵を描く機会を増やす。

0歳児：伝い歩き以上の成長段階にある子を対象に、つかまり立ちの状態では絵を描いていく。

1歳児：クレヨンや一度に多くの色を渡すと色を選ぶのに集中してしまうため、好きな色を一色だけ選び集中して描けるようにする。

2歳児：好きな色を選び、いろいろな道具を使って描く機会を増やしていく。

3歳児：自分たちで道具を自由に取り出して、絵が描ける環境設定を用意する。自由画は一斉に行うのではなく、1人、または2人で担任保育者と会話のやりとりを楽しみながら、時間をかけて描いていく。

4、5歳児：3歳児同様、子どもたちが自由に道具を取り出せる環境設定をし、子ども同士で描けるよう見守る。

・年齢別に子どもの描画活動について考察していく。

### III. 事例と考察

《お絵描きを楽しめる環境作りについて①（0歳児）》

今まで0歳児の保育では、お絵描きをする機会がほとんどなかった。今回この研究に取り組むにあたり、参考文献を基に、取り入れてみることにした。初めはクレヨンを持っているだけで満足だったり、すぐに手を離したりという姿が見られたが、月齢の高い子は2回目になると色がたくさんあるということがわかり、色を変えたがる様子も見られた。つかまり立ちで描いたことで、重心がしっかりと安定して力が入りやすかった。初めは筆圧が薄かったが、経験するにつれて筆圧が強くなっていくのがよくわかった。手も大きく動かせるので、0歳児の

子どもたちには描きやすかったようだ。

お絵描きをはじめてから数カ月、自分の順番になるまで近付かなかったSちゃん、抵抗を示していたが、保育者の服につかまって何とかやり始めた。クレヨンをトントンについては離すことを数色くり返し、偶然線が描けると、何かに気が付いたようで線を描き始めた。描くことの楽しさが発見できた瞬間であり、「もっと描きたい！」とクレヨンを指さし、線も段々力強くなっていった。

《お絵描きを楽しめる環境作りについて②（1～2歳児）》

0歳児の時は、つかまり立ちの状態ではしか描いていなかった。1歳児に進級し、身体も成長し安定してきたので、描く時の姿勢や素材をいろいろと工夫してみた。

椅子や床に座って描いたり、立て看板(行事の時に玄関先に出す看板)を利用して描いたりしてみた。1歳児の背丈に合うと思えば両側を使用し2人で描いていった。道具は、クレヨンや4B鉛筆を使用した。今までにない新しい試みだったため、小柄な子の時には気付かなかったが、背が高い子になると看板が低く描きづらそうに見えた。そこで、台を置いて高さを調整してみると、描きやすくなることがわかった。高さが合うことで手の動きもよくなり、のびのびと描けるようになった。座って描く時は画用紙はほぼ横に置くが、立て看板に合わせた縦は新鮮で、上下にのびのびと描く姿が印象的だった。

2歳児に進級後も取り入れてやっていると、しゃがんで画用紙の下部に細かく描く姿も見られるようになり、変化が出た。1歳児のときは見られなかった姿である。



## 考察

0、1、2歳児のお絵描きではその子の成長段階もあるので、年齢に合った道具、環境を設定して描くように心掛け、子どもたちが絵を「描きたい!」という気持ちを持つような働きかけをしていった。描き方の姿勢をいろいろと試し道具もクレヨンだけに限らず、鉛筆を使用するなど、ひとつの事柄にとらわれず様々な描き方をしていった。何回かくり返していくうちにその子によって描きやすい姿勢や道具があることがわかった。時には描きづらそうな姿が見られ、それを改善していくことで、描くことに集中できる働きかけができ、描くことの楽しさを共有することができた。

一色描きは回数を追うごとに集中して、紙いっぱいに絵を描くようになるが、他の色を自分から欲するような姿も見られるようになった。自分から「描きたい」という気持ちが芽生えてきていると同時に色に対する認識が成長しているように感じた。色を選ぶことにも時間がかからなくなり、自分の使いたい色をスムーズに選べていることから表現力も成長していると感じた。

あそびの時間に自由画帳でお絵描きをする友だちを見て刺激を受け、「私も!」とテーブルに向かい描き出す姿も見られ、そこには会話はなくても顔を見合わせてほほえみ合ったり、色や描き方を真似してみたりとコミュニケーションが生まれていた。この研究に取り組み、保育者が意識を持って続けていくことで、0、1、2歳児の保育の幅も広がっていったと思う。

### 《Sちゃんの事例（3歳児）》

マイペースな性格で自分の世界をもっており、進級当初は友だちと一緒にあそぶということがほとんどなかった。4月から新しいクラスになり、担任保育者との信頼関係もまだできていなかった。何か興味をもってあそべないかと思い、お絵描きに誘うと、保育者との会話のやりとりで、楽しみながらたくさん絵を描くことができた。その後も保育者がお絵描きに誘っていくことで、一人でフラフラとすることが減り、家族や自分の考えたキャラクター、経験したこと、模様など好きな絵を描くことが増え、毎日絵を描いて家に持ち帰るようになった。

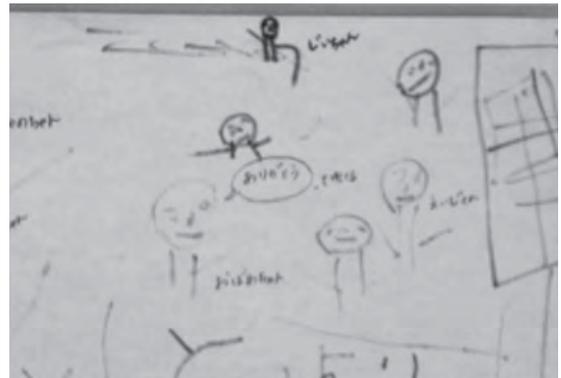
友だちの名前を言うとその子の顔を描いてくれるようになり、絵の中に自分の好きな友だち、保育者、周りの人が出てくるようになった。友だちも描いてもらおうと喜び、「描いて!」と言うなど、お絵描き以外にも関わりが増え、保育者とも信頼関係ができていった。

そんな時、7月にSちゃんの大好きだった祖父が他界された。それまで、七夕の願い事は「おじいちゃんが元気になったら一緒にあそびたい」と言っていたSちゃんだったが、その件から「もう、願い事はなくなった」と言って、一人だけ七夕の短冊を作らなかった。母親も、家庭で祖父のことや願い事について、あまり触れないよ

うにしている、と保育者に話していた。

お絵描きは続けて楽しんでしたが、9月になり、Sちゃんの中で気持ちの整理がついてきたのか、絵の中に入れて祖父がでてきた。(空にいて、祖母へ手紙を渡しているという絵)その日の帰り、迎えに来た母親にそのことを伝え、涙を流して喜んでいった。

その後もマイペースに少しずつ、イスとりゲーム、かけっこ、踊り、歌、ブロックあそびなどいろいろなことに興味をもち、少しずつ自信をもって過ごせるようになっていった。



## 考察

3歳児のお絵描きへの関わりとして、一斉にはなく1人か2人で「先生とお話しよう」と誘い、子どもの近くで寄り添いながら、話を聞いたり会話のやりとりをしながらイメージを引き出したり、描きたくなるような言葉がけを心掛けていた。そのように関わりをもっていたのでSちゃん自身の気持ちの変化に気付き、成長を母親と一緒に感じられたのだと思った。Sちゃんの場合は絵を描くことで自分の思いを表現し、他者とのコミュニケーションをとるきっかけとなったのだと思う。その後も成長を見ていく中で、Sちゃんには好きなこと、得意なことがいくつもでてきた。その時々で、その子の楽しめることに対し、良い方向へと働きかけられるような関わりをしていきたいと感じた。

### 《戸外で大きな絵を描いた（4歳児）》

研究を始めて2年目の夏に、汚れを気にせずに大きな紙に、思いきり絵を描く楽しさを感じてほしいと思い、園庭で絵を描いた。対象は、いろいろな経験からお絵描き好きの子が増えてきた4歳児2クラス(45名)。タテ1.5m×ヨコ3mのダンボールにロール紙を貼ってキャンバスを作り、同様のものを2つ用意した。(ビニールでコーティングしたダンボールにロール紙を貼り、ロール紙部分をその都度貼り直して使用した) プールあそびの時間の前に、水着に着替え、キャンバスを鉄棒に立てかけて固定し、色別に分けた絵の具をテーブルに用意して準備をした。

### 〈1回目〉8月1日

ゆび絵の具を使い、手やローラーで描いた。

初めは周りの様子を見ながら、ゆび絵の具を手ですくい、感触を確かめながら小さく描き始めていた子どもたち。筆、ローラーを使うことで絵を描くというよりは塗ることを楽しむといった様子が多く見られた。絵の具を重ねて塗り、キャンバスの上で色を混ぜ、色の変化を楽しむ子、保育者が手の平に絵の具を塗り手形を押して楽しむ姿を見て、真似してみる子などもあった。

その反面で、絵の具が手につくことが苦手で、ローラーを持ってはみるものの、積極的に中に入っていけない子の姿もあり、保育者が空いている場所へと導き、控えめに参加していた。



### 〈2回目〉8月19日

水彩絵の具で、筆、手を使って描いた。2回目ということで、子どもたちも要領を得て、積極的に描いていた。ゆるめに溶かした水彩絵の具を作ったことで、キャンバスの上での伸びも良く、一度絵の具をつけると長く描けるので、前回より子どもたちも描きやすいようだった。曲線を描いたり、形、文字のようなものを描いたりする子もいて、筆の効果からか前回よりもずいぶん絵らしい作品となった。手形や、色を塗りつぶすなどして感触を楽しむ子も多く、友だちと一緒に楽しんでいる様子だった。

また、以前絵の具が手につくのを避けて控えめにしていた子も、筆を使ったことが良かったようで、いつの間にか友だちの輪の中へと入っていた。



### 〈3回目〉9月4日

ダンボールのキャンバスではなく、ロール紙を下に敷いて、ゆび絵の具で手、足、筆、ローラーを使って描いた。

室内で大きな紙を床に敷き、みんなで絵を描く経験をしていたので、その要領で、今度は足も使い、体全体で自由に描いてみた。友だちと一緒に模様を描いたり、一人で黙々と色を塗ったり、それぞれが大きなロール紙の上で好きなようにお絵描きを楽しんでいた。足も使えるということで、足形をとったり、ロール紙の上をペタペタと歩き回って楽しんだりもしていた。

手形、足形から腕や足、お腹などにも筆で模様を描き、ボディペインティングを楽しむ子の姿もでてきた。自分で体に描いたり、友だちや保育者に描いてもらったりしながら大胆に楽しんでいた。



#### 考察

戸外で絵を描くという経験は初めてのことで、事前に話をし、どのようなことをするか説明はしていたものの、最初のうちは汚れを気にして人差し指一本で絵の具に触れ、どのようにしたら良いのかと周りの様子を見ながら子の姿も多く見られていた。保育者が率先して絵の具に触れ、キャンバスに塗る姿を見せることで子どもたちにもその楽しさが伝わっていった。そのような配慮により、やってみようとする意欲や興味が深まっていったので、今後もその姿勢を大切にしたいと思った。各回ごとに使う絵の具や道具、紙の置き方を変えて行い変化をもたせたことで、回数を重ねるごとに手形、足形をとったり、ボディペインティングをしたりという姿

がでてきて、絵の具の感触やみんなで描く楽しさを十分に感じていた。今回、開放的な環境でのお絵描きを経験して、子どもたちが絵の具に触れ、お絵描きをすることが楽しい、好きだと感じる一つのきっかけとなったら良いと願いを込めて取り組んでみた。描き終えた絵は、各クラスに飾り、隠れたり、お家ごっここの壁として使ったり、クリスマス発表会の大道具としても活躍した。その後も様々な面でのびのびと表現ができる子どもたちに育っていったように感じた。

#### 《Kちゃんの事例（4歳児）》

3歳児の頃からお絵描きが好きで、楽しんでいることが多かった。3歳児の時は小さく手を動かして、模様のような絵を描くことが多かったが、4歳児になり周りの友だちと一緒に描く中で顔や体、手足がでてきた。

11月の作品展ではおじぞうさまの絵を描いた。聞いたお話のままの様子を描く子が多い中、Kちゃんは自分でお話のお話を考えて想像しながら描いていた。（おじぞうさまと子どもたちがおじいさんのお家にあそびに来たところ、と言って描いていた）もともと手先が器用で小さなものを書くのも好きだったので、とても細かくカラフルなKちゃんらしい色使いで、じっくりと時間をかけて描いていた。お家の方にも作品展で見てもらい、ほめられてとても嬉しそうなお姿が見られた。

その後もあそびの中でお絵描きを楽しんでいた。描いた絵に広告の絵を切って洋服にしたものをのりで貼り、着せ替え人形のようにして友だちと一緒にあそびを広げていた。

#### 考察

顔や体の描き方などは、保育者側から指導をしなくても、友だち同士で見せ合ったり、真似し合ったり刺激し合いながら自然と成長して描けるようになっていくということが1年目、2年目と段階を追って見ていくことでわかった。子どもの絵に、保育者の援助をどのようにしていったら良いのか、描き方を教え進めていった方が良いのか、と研究をする中で悩んだが、Kちゃんの様子を見て、子どもが自分で想像力を広げ、楽しんで描くことができるよう気持ちを向けていくことが何よりも大切だと思った。楽しんで描いていく経験を重ねていくと、お絵描き好きな子が増えていくのではないかと感じた。

3歳児の頃は、登園時に泣いてしまうことが多く、毎朝母親と保育室に来ていたが、4歳児になり少しずつ泣くことが減り、一人でも保育室に来れるようになっていた。

保育者との信頼関係も深まっており、日中も友だちと仲良くあそぶことが増え、表情もやわらかく落ち着いてきたように感じていた。お絵描きと日常の様子を通して、Kちゃんの成長の様子も合わせて感じる事ができた。



《おじぞうさまの絵》

#### 《Mちゃんの事例（4歳児）①》

小さい頃からお絵描きが好きで、何か満たされない思いを発散するかのよう絵を描いていた。家でも園でも絵を描いてあそび、家で描いた絵を園に持ってくることも多い。4歳児に進級当初は落ち着かなく、イライラとしていたり激しく泣いて極度に保育者に甘えたりすることが多かった。4歳児で担任が変わり、保育者との信頼関係もできておらず、家庭での満たされない思いを園で発散しているかのような姿に、関わり方を試行錯誤していた。

4月に家から保育者に持ってきた絵を見てみると、保育者の周りを真っ赤なクレヨン、強い筆圧で囲い、空と地を区切る強い線が目立っていた。子どもの絵の心理についての参考文献によると…『満たされない思いや我慢、強い抑圧等の表れ』にあてはまっていた。配慮しながら毎日一緒に過ごし、いろいろな経験をしていく中で、保育者との信頼関係もできてきて、Mちゃん自身も少しずつ落ち着いてきた。12月の保育者宛ての絵には、保育者の周りに本児や友だちなどが登場し、色使いも淡く、きれいなやわらかい色を使っていることが増えてきた。家でも園でもよく絵を描き、将来は「漫画家になりたい!」と話していた。

#### 《Mちゃんの事例（4歳児）②》

4歳児に進級してから始めた「鍵盤ハーモニカ」。クリスマス発表会でも演奏し、弾ける曲が増えて多くの子どもたちが楽しんでた。ある日、家から紙で作った手作り鍵盤ハーモニカを持ってきたMちゃん。（紙に鍵盤を描き色を塗り、紙のホースをテープで付けた物）それを見た友だちが、「どうやって作ったの?」「私も作りたい!」と興味津々な様子だった。得意気に作り方の手本を見せながら、Mちゃんの鍵盤ハーモニカ手作り教室が始まった。保育者も子どもたちと一緒に作り方を教えてもらい、Mちゃん自身も周りの友だちも、満足な時間を過ごすことができた。翌日には別な子による「バイオリン作り」へと広がっていき、子どもたちのあそびは展開していった。



〈4月の絵〉



〈12月の絵〉



〈手作り鍵盤ハーモニカ〉

### 考察

お絵描き好きのMちゃんの絵で、Mちゃんの心理に気が付き、関わりを深めていくことでその絵にも変化が表れていったことが目に見えてわかった。改めて子どもの絵は、その子の心の中の思い、気持ちの表現の一つであるということを感じた。また、友だちと楽しく一緒に絵を描くことでコミュニケーションをとったり、創造力を伸ばしたりと、子どもにとって大切な活動であるということがわかった。

### IV. まとめ

今回の実践研究の取り組みは、「絵を描きたがらない」「描く機会を与えると固まってしまう子が増えたのはなぜか?」と保育者たちが疑問に思ったことから始まったが、始めてみると、そのような子の姿はほとんど見られなかった。それはなぜかと考えてみると、取り組もうとした時点で、保育者たちの「これをやってみたい」「あれをやってみたい」というアイデアや気持ちにより、子どもたちが絵を描きたくなるような雰囲気や環境設定ができていったためだと思う。初めは戸惑っていた子どもたちも、保育者の姿を見ながらやりはじめ、次第にそれぞれのペースで楽しく取り組んでいた。

0、1、3歳児の3学年の子どもたちを対象として3年間の生活を追っていったことで、個々の発達に合わせたいろいろな取り組みができたので良かったと思う。一人ひとりの気持ちにも寄り添っていくことができた。

参考文献をもとに考えていると、いろいろなアイデアが浮かび、歩行ができる前から様々な実践に取り組めた。他園では、小さい学年はあまりお絵描きをしていないと聞かすが、是非、活動に取り入れてほしいと思った。普段の生活からではわからない、一人ひとりの新たな一面が見えてくると思う。

4歳児後半から5歳児には、形のあるものを使ってあそぶだけでなく、お絵描きを通じて、形のないものから自分たちで作りだしていけるようにもなった。そのような姿を見ていて、保育の環境設定の大切さを改めて感じ、今までの保育を省みる良い機会となった。

特に、初年度3歳児だった現在の5歳児では、お絵描

きから工作へと発展し、保育室で毎日数名が製作コーナーであそび、納得のいくまで取り組む姿が見られるようになった。友だちとの関わりがなかなか上手いかわからない子ども、お絵描きや工作で一つの物を友だちと一緒に作りだしていく姿が見られた。お絵描きが好きの子がいると、影響を受けて他の子も好きになるきっかけとなったり、友だちの物を真似て描く子も、“真似してできた”という経験をすることで保護者や保育者から褒められる機会が増えたりしていった。

お絵描きという一つの活動を通じて、コミュニケーションがとれるようになっていき、全体的にお絵描きや作ることが好きな子どもたちとなっていったのだと思う。

今回の研究で、子どもたちが楽しく絵を描くために保育者は感性を育てる働きかけをすること、コミュニケーション能力、創造力を高めるために、心豊かに育つ働きかけをすることが大切だと感じた。子どもが楽しいと思う気持ちを大切にしながら、創作活動に対する小さな変化、成長に気が付き、良い方向に伸ばしていけるようにした。子どもの絵に対して他と比べることや、保育者の正しいと思う絵を子どもに押し付けず、子どもの自由な絵に驚くくらい柔軟な感性を保育者がもつようにし、声をかけたり見守ったりしながら寄り添っていくことを心掛けた。子どもが“絵を描くことが好き”という気持ちをもてるように保育者が感性を枯らさず、子どもたちの“やりたい”と思う気持ちにさりげなくサポートすることが絵を描く上で大切な事なのではないかと事例を通じて知ることができた。

また、自分自身が絵を描くこと、子どもの絵への援助を不得意としていた保育者も、研究に取り組んでいくことで、子どもと一緒に絵を描く面白さを感じ、楽しんでいくことが出来た。保育者たちの気持ちや取り組み方の変化というのは、子どもたちにも良い影響として伝わり、子どもたち自身が意欲的にやってみようとしたり、集中したり、工夫したり、自分なりに楽しみ方を見つけていく、自主的な姿をたくさん見ることができた。今後も積極的に保育に取り入れ続けていきたいと感じ、今回の研究で子どもだけではなく保育者も、互いに育ち合い、成長し合うことが出来たと感じた。

今回の取り組みから、絵を描くことは子どもにとって

成長するきっかけとなり、子どもの世界を広げる、とても大切な活動であることがわかった。“楽しく描いた”という経験が、これから大人に成長していく中で様々なことにチャレンジしていく力となり、その子どもの人生がより豊かなものになってほしいと思う。

#### 参考文献

- 「子どもの発達と描く活動」新見俊昌  
かもがわ出版（2010）
- 「絵の指導がうまくいくヒント&アドバイス」東山明 今井真理  
ひかりのくに株式会社（2008）
- 「子どもの絵をダメにしていますか」  
鳥居昭美 大月書店（2004）
- 「絵でわかる子どもの心」  
マナ色彩心理研究所所長 名張淑子 学陽書房（2003）
- 「お絵描きウォッチング」なかがわちひろ  
理論社（2007）
- 「みんなで造形 絵を描こう！」舟井賀世子  
株式会社サクラクレパス出版部（2012）

評者：天野 珠路

0歳児から年長児まで、園全体で描画の実践に取り組む様子とその工夫が伝わる実践記録です。近年、絵を描きたがらない子どもが増えているという認識の下、楽しく絵を描くことによってコミュニケーション能力や創造力を高めようとする保育士たちの奮闘が描かれています。まさに、描くことは自己表現であり、その表現には様々な思いや子どもの状態が現れます。だからこそ、この園では描画を重要な保育の一環と受け止め、積極的に取り組んでいるのでしょう。

ところで、ここでは「お絵描き」という言葉（口語）が使われていますが、記録ですから「描画」とした方がよいと思います。幼児語は極力避けた方がよいのではないのでしょうか。また、0歳児がつかまり立ちの状態を描くとありましたが、椅子に座って描く方が安定すると考えます。イーゼルを使って描くのももう少し上の年齢からが適当と思いました。

保育士たちが意欲的に取り組もうとした時点で「子どもたちが絵を描きたくなるような雰囲気や環境設定ができていた」という記述には納得させられました。子どもは保育士の姿や醸し出す雰囲気に応え、保育士が大切にしているものを大切にします。改めてそんなことを思い出した次第です。

評者：岡田 澄子

0歳児から年長児までの描画をまとめたレポート。特に0、1、3歳児は3年間の生活を追ったので、個々の発達に合わせたいろいろな取り組みができたようです。

ただ、このレポートで気になったのは、1歳児に進級してからは椅子や床に座って描いているのに、0歳児はなぜつかまり立ちの状態を描いていたのだろうかということです。

4歳児の戸外や室内で大きな絵を描いたところは、写真により子ども達の楽しそうな様子が窺えます。キャンバスは紙の他にボディペインティングに発展していきました。描き終えた絵をクラスに飾ったり、お家ごっこの壁やクリスマス発表会の大道具としても活躍したようです。

子ども達も様々な面でのびのびと表現ができる子ども達に育っていったようだと言われています。

保育者が不得意なものは子ども達も不得意になりがちですが、園全体で研究に取り組み子どもと一緒に絵を描く面白さを感じ、楽しめたことは素晴らしい研究の成果だと思います。

レポートも丁寧にまとめられていました。この先が楽しみです。

評者：酒井 かず子

保育者が園児の「絵を描きたがらない」「描く機会を与えると固まってしまう子が増えた」という状況に疑問を持ったことから研究が始まり、①0歳児は伝い歩き以上の子を対象につかまり立ちの状態を描く。②1歳児は1色を選んで描く。③2歳児は好きな色を選んで描く。④3歳児は自由に取り出して描く。⑤4・5歳児は自由に取り出し、子ども同士で描く。等の成長に合わせた段階や方法を変え実践された。保育者の関わり方も、立て看板の高さを工夫したり、少人数と会話を楽しみながら絵画へのイメージを膨らませたり、もっとのびのび描いてほしいと園庭で描いたりと様々な方法で子どもたちの描きたいという意欲を引き出している様子がよくわかりました。

保育者主導から、子どもたちが主体的に取り組みたいときに取り組める環境にチェンジした成果と拍手を送ります。保育者も目の前で子どもたちが変わっていく姿を見ることができ、さぞかし感動したことでしょう。

## 壁でつながる0歳からの発達 ～我が園の名物となった『壁のぼり』～

大阪府・社会福祉法人都島友の会 都島東保育園 笠井博嗣・片桐広絵・小橋紀子

### 1. はじめに

社会福祉法人都島友の会は今年で創立85周年を迎え、運営施設の一つである都島東保育園では40周年を迎えることとなった。当園は、大阪府の都島区に位置し、多くの住宅やマンションに囲まれた中にある保育園であるが、園庭にはたくさんの木々があり、子どもたちにとって身近に自然を感じられる環境となっている。春になると桜の木が満開の花を咲かせ、その下で食べる、『お花見給食』が子どもたちの楽しみであり、季節にちなんだ行事の一つとなっている。保育室からすぐに出られる園庭には、大型遊具だけでなく、鉄棒やのぼり棒などがあり、子どもたちが十分に身体を動かして楽しめるようにすることで、伸び伸びと活動できる環境を、生活の中に自然と取り入れている。戸外に限らず、室内においても子どもたちが体育あそびを楽しめるよう工夫し、特に、0歳児クラスから行っている『坂道のぼり』に力をいれ、運動機能の発達につなげてきた。



(写真1)

各クラスで取り入れている『坂道のぼり』は、私たちの園では当初から畳を使用してきた。保育室で使用した古い畳を遊びに取り入れたことが始まりで、適度な柔らかさがあることから、乳児クラスでも取り入れやすく、おしめ台やロッカー、窓枠などに立てかけて使用している。0歳児では30度ほどの傾斜をのぼり、子どもの挑戦する意欲や達成感を味わえるようにしてきた。次第にその傾斜も角度が増していき、この経験を経た子どもたちは木登りをするようになったことから、最終的には垂直にのぼる取り組みを考えた。そこで、『壁のぼり』という案を出し、見上げるほどの高さに登ることを取り入れた。平成4年頃から、運動会に取り入れるようになり、今では都島東保育園の名物となっている。

### 2. 壁について

図1の大きな箱を私たちは「壁」と呼び、『壁のぼり』と名前がついた。

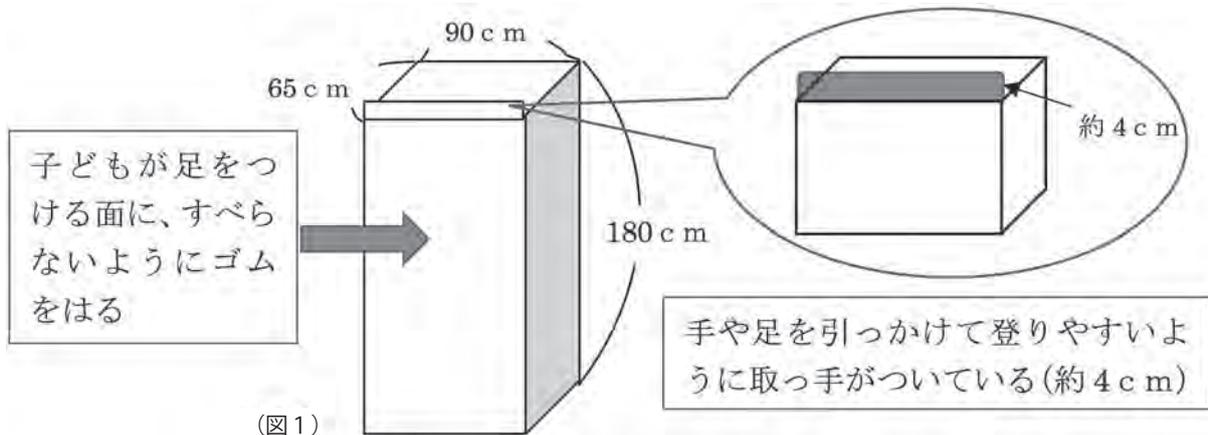
その高さは約180cm。てっぺんに立つと、子どもの視線は地上より約290cmになる。

写真2は実際に壁の上に立ち撮影したもので、下に見える保育者、子どもたちが小さく見える。

両サイドには保育者が描いたペイントが施してあり、見た目にも楽しめて、子どもたちが親しみを持ちやすくしている。(写真3、写真4)



(写真2)



(図1)

壁の大きさに伴い、大人4人で持ち上げるのが困難なほどの重さがある。しかし、安定感は十分で大人が登る際でも揺らぐことがない。



(写真3)



(写真4)

(壁の持ち運び)

側面には取っ手がついており、起こす、倒すのが安易になっている。(写真5、写真6)

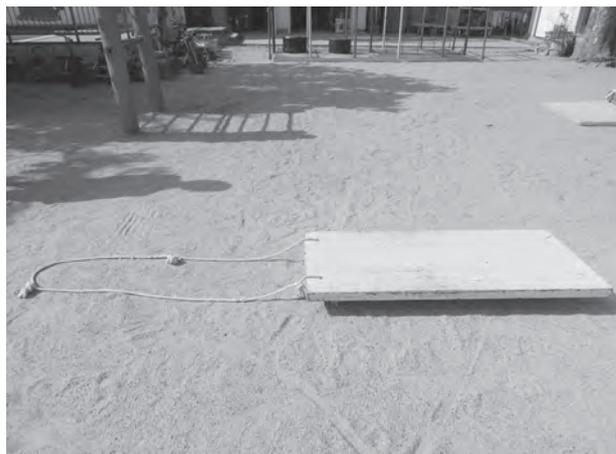


(写真5)



(写真6)

専用の台車を作り、壁を運ぶ際に使用している。紐がついており、引っ張る人と後ろから押す人の2人で運ぶことが容易となっている。(写真7、写真8)



(写真7)



(写真8)

### 3. 壁のぼりから運動機能の向上と心の発達を目指す

TVゲームやインターネットの普及、マンション居住者による階段使用の減少など、子どもを取り巻く生活環境の変化により運動機能は低下傾向にある。また、運動に興味になかったり苦手とする子どもが増加傾向にもある。そのような子どもが『壁のぼり』に興味を持ち、「やってみよう」という意欲につながるのではないかと考えた。

気持ちの面でも、自分をうまく表現できない、人に注目されるのが苦手、自分に自信がなく不安など、様々な思いを抱く子どもが、『壁のぼり』をきっかけに、心の成長をしてほしいという思いがある。このような背景により『壁のぼり』の取組みがはじまり、その中で子どもたちがどのように成長し発達したかを0歳児から5歳児までの取組み内容、また「知・徳・体」の分野に分け詳しく紹介したいと思う。

### 4. 乳児期から幼児期における取組み方法

(乳児期)

- ・0歳児のハイハイ時期での取組みでは、部屋の畳を使いベビーベッドに立てかけ両手をしっかりとつき、両足で踏ん張りながら畳を登る姿が見られる。ハイハイの時期は上まで登る達成感よりも、滑りながら何度も何

度も登ることを存分に楽しめるように、保育士は援助を心掛けている。(写真9、写真10)



(写真9)



(写真10)

- 1歳児は、何度も畳登りを繰り返すうちに子ども自身がコツを掴み、畳の縁を持って登ったりと工夫を始める。上に指をかけて登ろうとする姿も見られる。(写真11、写真12)



(写真11)



(写真12)

跳び降りでは、おしめ台やロッカー、棚などに立てかけることによって高さを作る。登りきった後は、一番上に立つ楽しさを味わい、保育士に支えられながら跳ぶ経験を積んでいた。(写真13、写真14)



(写真13)



(写真14)

- 2歳児後半になると保育士の補助なしで、一人で跳ぶ。(写真15、写真16)



(写真15)



(写真16)

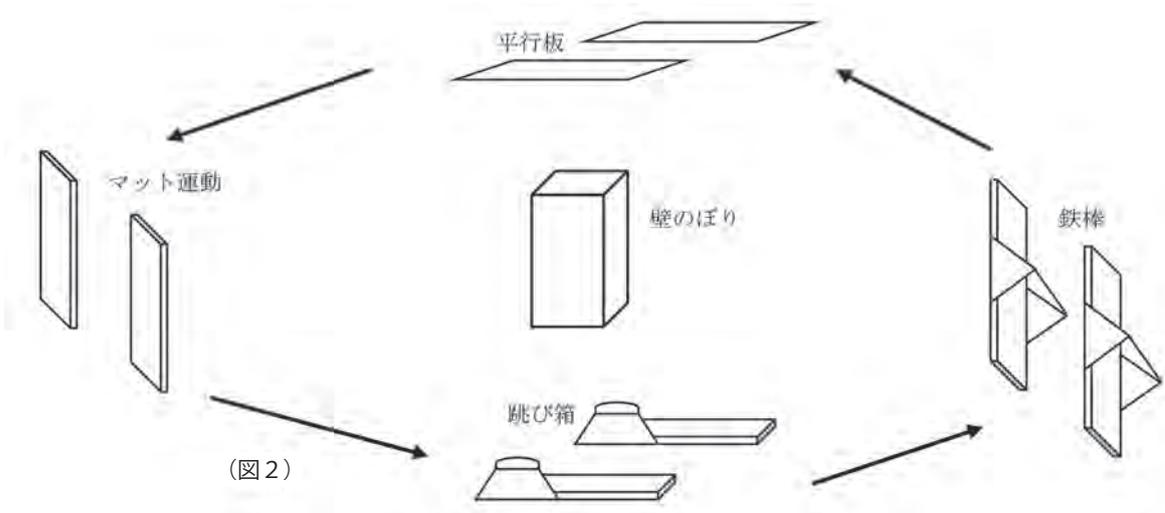
(幼児期)

幼児クラスでは体育活動の一環に、サーキット運動<sup>(※1)</sup>が行われ、その中で鉄棒や跳び箱など、学年ごとに到達目標を決めて取組んでいる。また、年齢や発達に合わせて壁の使い方を工夫し、年長児の『壁のぼり』につなげている。

(※1) 遊具、コースという環境を通して主体性を持ちながら、身体能力を高める取組み

<サーキット運動>

図2のように、コースに合わせて運動遊具を設置し、矢印のようにトラックを回りながらそれぞれの運動を行い、全身運動をしながら順番に壁のぼりに挑戦していく。



(図2)

<サーキット運動内容>

	鉄棒	マット運動	跳び箱	平行板・はしご・フープ	壁のぼり
3歳児	足かけまわり	でんぐり返り	横向き3段を両手をついて跳び乗る	平行板をグーパーで進む	高さ65cmを登る
4歳児	前回り	前転(素早く立ち上がる)	横向き3段を跳ぶ		高さ90cmを登る
5歳児	逆上がり	2人組で手押し車	横向き4段を跳ぶ	はしごを渡り、フープをけんばで進む	高さ180cmを登る

(表1)

- 3歳児は壁を倒し、一番低い状態で使用（65cm）。子どもの胸くらいまでの高さになり、個々に応じて補助

台を置くなど配慮している。



(写真17)



(写真18)



(写真19)

壁に両手をつき、膝を曲げて跳ぶ準備をする。



(写真20)

壁に跳びのり、上半身をのせる。



(写真21)

胸を壁につけると、足があげやすい。



(写真22)

足で支えながら、肘を伸ばすことで上体を起こす。



(写真23)

全身を使い登る。

・ 4 歳児は壁を縦に倒した状態で使用する（90cm）。3 歳児同様、個々に応じて補助台を置くなど配慮している。



(写真24)

・ 3 歳児と同じ動きで登る子など、個々によって登り方が違う。身体の柔軟性や身長などで、登り方に変化が見られる。



(写真25)



(写真26)

跳びのるのではなく、  
そのまま片足をあげる。



(写真27)

片足を壁の上へのせる。



(写真28)

壁にのせた足と、腕の  
力を使い、身体を持ち  
上げる。



(写真29)

身体を壁の上まで押し  
上げる。



(写真30)

一気に上体を起こし、  
壁に登る。

- ・腕の力が重要となり、全身を支える力を身に付けるため、サーキット運動内で腕を使う体育遊具に取り組む。
- ・5歳児は『壁のぼり』の最終段階として、180cmの高

さを登る。自分の身長よりもずっと上を目指し、高さ40cmの踏み切り板を使用するが、一番上に手が届くことはほとんどいない。



(写真31)



(写真32)



(写真33)

壁までの距離をとり、助走をつけて踏み切り板を使う。



(写真34)

てっぺんにある、取っ手に片手をかける。



(写真35)

両手をかける。



(写真36)

両肘を曲げて、片足をあげやすい姿勢をとる。



(写真37)

取っ手を持つ手に力を入れ、片足をあげる、



(写真38)

てっぺんの取っ手にかかとをかける。



(写真39)

かかとでしっかりと支えながら、腕の力を使い身体を持ち上げる。



(写真40)

足と腕の力を使い、上体を起こす。



(写真41)

- ・踏み切り板に慣れないうちは、助走してから踏み切るタイミングが分からず壁に激突したり、踏み切り位置の数歩手前から2度3度と連続して両足跳びになるなど、苦戦する姿が多く見られる。
- ・両手で取っ手をつかめることは少なく、片手でつかむことから、もう片方をつかむ。

- ・5歳児における壁を登るポイント
  1. 『足の裏を使って登る』
  2. 『踵をかけて登る』
  3. 『肘を使って登る』
  4. 『腕の力を使って登る』

保育士は言葉だけでなく見本を見せ、子どもたちに伝えている。

- ・5歳児では『ジャンプの練習』として、保育室の天井から目標物（すずらんテープを丸めたもの）をぶら下げ、子どもが跳んで届くようにしている。

「タッチしたい」という思いがあり、普段の生活の中であそびとして楽しんでいる。ジャンプ力の強化、助走して踏み切るタイミングなど、自然と身につけていく。ジャンプ力の発達とともに、ひもの長さを調整



(写真42)



(写真43)

することで、子どもが継続して意欲的に取り組めるようにしている。

## 5. 子どもが精神的に成長したこと

- 1、考える力がつく
- 2、諦めない気持ち
- 3、達成感、自信がつく
- 4、友だちを応援する気持ち
- 5、ルールを守る
- 6、（高いところから降りる）を乗り越える勇気

『友だちを応援する気持ち』『諦めない気持ち』など上記のほとんどの項目が年長児に獲得してほしいものにもなり、壁のぼりを通じて精神的成長も期待出来る。また、壁の上に立った時に子どもたちはヒーローのポーズ、かっこいいポーズ、かわいいポーズをして跳んだりするが、壁のぼりを行う前にポーズ＝壁を登り切った自分をイメージするという力も養われている。

## 6. まとめ

都島東保育園では、知・徳・体の三位一体のバランスの良い成長を育み子どもたちの、教育・保育を目指している。乳児期から幼児期にかけて、保育の連続性を大切

にしており、身体の発達、運動機能の向上だけではなく、子どもたちの心の成長を豊かにしていかなければならないと考えている。

### 〈『壁のぼり』のねらい〉

	知	徳	体
乳児期	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分が登りやすい登り方を考える力を身につける</li> <li>登る事や、ジャンプする事の楽しさを知る</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>保育士の言葉がけでしてはいけないことを知る</li> <li>友だちのしていることに興味を持ち、一緒にしようとする</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>手や足で踏ん張る力が発達し、角度のある坂道を登る</li> <li>保育士が補助しながら跳ぶ</li> </ul>
3歳児	<ul style="list-style-type: none"> <li>壁を登る際の腕の使い方を知る</li> <li>自分なりの方法で登ろうとする</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>約束・ルールを理解し、自ら意識しながら取組む</li> <li>自分で登りきることが出来たという達成感を味わう</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>身体を持ち上げる腕の力がつく</li> <li>地面を蹴って跳び上がる力がつく</li> <li>手を伸ばすタイミングで足も同時に動かす</li> </ul>
4歳児	<ul style="list-style-type: none"> <li>腕や足、身体の曲げ方や登り方を知る</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>約束・ルールを理解し、自分で考え行動する</li> <li>出来なくて悔しい気持ちを持ち葛藤を乗り越えながら身体と心をコントロールする力が身につく</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>基本的な運動能力が身につく</li> <li>身体の動きが巧みになりコツをつかんで登ろうとする</li> <li>身体をひねってのぼる柔軟さが身につく</li> </ul>
5歳児	<ul style="list-style-type: none"> <li>体力や運動能力が育ち、自分なりの身体の使い方を工夫する</li> <li>課題や目標に向かって日頃から取組む</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>失敗しても諦めない気持ちや、高い所から跳び降りる恐怖心に打ち勝つ勇気を持つ</li> <li>頑張っている友だちを応援する気持ちや、頑張りを認める気持ちをも持つ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>今まで培ってきた運動能力を最大限に発揮し登りきる</li> <li>複数の動作を同時に行う</li> </ul>

(表2)

※個々に応じた目標や課題をたて、達成感を味わうようにする。

評者：天野 珠路

平成4年度から20年以上にわたる「壁のぼり」の実践に焦点を当てた記録です。副題にあるように壁のぼりはこの園の名物となり、園全体で工夫しながら継続的に取り組んできた様子がわかります。

運動遊びや体育的な取り組みはとかく幼児中心になりがちですが、この園では0歳児から子どもの成長・発達を見通して壁のぼり（畳のぼり）を保育に取り入れています。ハイハイや高這いにより手足をしっかりと使い自分の体を支えていくことは、その後の運動機能や姿勢の形成にたいへん重要です。5歳児が全身を使って180センチの高さを登れるようになるのは驚きですが、0歳から1歳、2歳、3歳、4歳と積み重ねてきた結果だといえます。また、壁という目に見える目標が子どもたちのやる気を起こさせるのでしょう。

ひとつ案じるのは、からだにハンディキャップのある子どもや「できない」子どもへのフォローや対応です。運動機能の向上は大切なことですが、必要以上に辛さや劣等感を味わうことがないよう子どもの心に寄り添い、安全面にも十分に配慮してすすめていただきたいと思います。

評者：井桁 容子

本実践報告は、園で不要になった古畳を活用して0歳児から斜面のぼりを積極的に取り入れたもので、子ども達の身体的な能力の成長が見てとれる実践である。報告の内容も論旨がしっかりと通っているので、写真を活用したデータは視覚的にも分かりやすく、オリジナリティー豊かに展開されている。惜しまれるのは、壁のぼりを取り入れたことで、生活の他の部分でどのように活かされているかが報告されてなかったことである。壁を登れるようになる、という目に見えたで、

きないだけに保育者が捉われていく危険性を避けるためにも、壁のぼりを体験していくことが、一人ひとりの生活のなかでどのように活かされてきているか、生活全体の中で子ども同士の関係性の成長にどのように影響しているかが見えてくると、保育者一人ひとりが根拠と見通しを持って継続していくことができる実践となり、更に園の名物としての誇りになるのではないかと思う。

評者：日吉 輝幸

子どもの体力の現状については、「走る」、「跳ぶ」、「投げる」といった、基本的な運動能力の低下が指摘されており、その改善のために平成24年3月に文部科学省から「幼児期運動指針」が出されている。

都島東保育園でも、子どもを取り巻く生活環境の変化によって、運動機能が低下傾向にあることを問題視している。そのため、0歳児期から「坂道のぼり」を通して運動機能の向上に努めているなど、0歳児から5歳児までの発達段階に応じた運動を、継続的に行っていることは評価されるべきものとする。また、本実践報告のメインでもある「壁のぼり」については、一辺の長さが異なる立体を効果的に使用するとともに、子どもの体力の状況に応じて補助用具を使うなど、無理なく壁のぼりにチャレンジできるよう配慮がなされていると感じた。更には、運動能力の向上のみならず、「あきらめない気持ち」「達成感、自信がつく」「友達を応援する気持ち」「乗り越える勇気」など、近年注目されている『非認知的能力』といわれる力の向上にも寄与していることに感銘を受けた。

最後に、レポート自体も効果的に写真や図解が掲載されており、実践の様子が大変分かりやすいものであったことを申し添える。

## いろいろな動きを楽しもう！ ～健やかな心と体の育ちのために～

島根県・公益財団法人鉄道弘済会 松江保育所（あさひ園） 渡部 靖子・津田 祐子

### I. はじめに

研究をはじめるにあたり、箸の持ち方など、手先のぎこちなさが気になっていたことから、箸の持ち方の現状を調査し、手先の遊びを積極的に取り入れて考察を始めた。その中で手先のぎこちない子は体の動きにもぎこちなさが感じられ、手先の発達のためにはまず体づくりが大切だと思うようになった。

松江保育所では、以前から体づくりが大切だと考え、継続して取り組んでいるが、さらに色々な運動遊びを取り入れたり、生活の中の動きに着目したりして、しっかり体を動かせるように取り組みを行った。

研究を進めるうちに、体を動かすことに消極的で楽しそうな様子が見られない子どもは、小さい頃からそういう姿が見られることに気付いた。

そこで、低年齢のうちから体を動かすことに楽しさを感じ、それが喜びとなり、さらにもっとやってみたいという意欲につながってほしいと願い、取り組みを行うことにした。

### II. 研究の目的

- ・低年齢から、体を動かす楽しさを味わい、意欲、自信などにつなげ心を育てるための環境づくりや保育士の関わり方を探る。

### III. 研究の方法

- ・子どもの興味や関心、年齢（月齢）、発達状態に応じた遊びを取り入れ、楽しんで体を動かせるような環境の工夫をする。
- ・子どもの心を受けとめ寄り添う関わりについて検証する。

### IV. 事例と考察

#### 【事例1】H26年6月頃 1歳児Sくん

- ・3月生まれのSくんは、4月に入所し、6月になると登所時に泣くこともなくなり、保育所にも慣れてきた様子だ。お迎えの時には、その場にいる保育士一人ひとりのそばに行き、必ず手と手を合わせてあいさつをしてから帰っていく。
- ・保育士には親しみを感じているようだが、子どもの集団の中には近づかないようにしているような姿があり、保育室でも園庭でも端の方に行き一人で歩いていることが多い。歩きながら独り言を言ったり歌を歌ったり

して自分のペースで過ごしている。

#### 《お山でタッチ》

室内には手作りすべり台があり、クラスの子も達が好んで遊んでいたことから、室内でもっと体を使って遊べるようにマットを使った山を作った。滑り台では階段が登りにくかった子も、よじ登ることが出来るので混雑することなく遊ぶことが出来た。

Sくんはいつものように部屋の端を歩いているが、マットの山が気になっているのだろうかチラチラとこちらを見ている。保育士は危険防止のためマットの山のそばにいたので、Sくんのところへはすぐに行けない。度々目が合うので「Sくんの事、ちゃんと見てるからね」という思いで笑顔を向けていた。そのうち近くにやってきたので「お山だよ」と声をかけてみた。Sくんはゆるやかなマットの山をよじ登り、登り切った所で嬉しそうに保育士を見ていた。「すごいねー登れたねー」と声を掛け「タッチ」と言って手を合わせてみた。Sくんは嬉しそうにタッチをして滑り降りた。

その日は何度もマットの山を登り「タッチ」と手を合わせ、Sくんもタッチと言っては滑って楽しんだ。



#### 【考察1】

自分のペースで過ごしているSくんは、友だちが大勢いる所は避け、一人で部屋の端を歩きながら歌をうたったり、独り言をいったりしている姿が多かった。一見保育所に慣れたように見えたが、家庭では、一緒に暮らしている二人のいとこと、活発に過ごしているという。母親から聞く家庭での様子と保育所での様子とではかなり違いがあるようだ。

しかし、保育所でのSくんの姿も彼なりの楽しみ方をしているようにも見たので、見守りながら、色々な運動遊びを経験してほしいなと願い関わっていた。

一歳児はすべり台が大好きで、室内手作りすべり台で遊んでいた。しかし、階段の登り方には個人差があるため、押したり、上に乗ったりするいざこざが多かった。そこでこの日は、ゆるやかで登りやすいマットの山に変え、ゆったりと遊べるようにした。これまで混雑する集団の中にはいっていきなかったSくんも、安心して近づけたのだと思う。

母親の話だと、こたつを出していた頃には上がって遊んでいたこともあったようだ。マットの山はこたつのようにも見えたのかもしれない。友だちに押される事もなく山に登り、高い所で保育士と「タッチ」をすることも楽しかったようだ。

この頃から自ら友だちに近づいていく姿が見られるようになり、友達と一緒に走り回ったり、自分の要求を通そうとしておもちゃの取り合いをしたりする姿も見られるようになった。

降所の際にも保育士だけでなく、自分から友だちの所に行き「タッチ」をするのが日課になった。

子どもが自分からやってみたいという気持ちになる時を待つ事の大切さを感じると同時に、環境を工夫するだけではなく、保育者の関わりが遊びのきっかけになることを改めて感じたエピソードとなった。

## 【事例2】H27年 1歳児Hくん

- ・0歳児クラスからの進級児。兄（3歳）と弟（0歳）がいる。
- ・保育所には慣れているが、ちょっとした事ですぬたり泣いたりして気持ちの切り替えが出来ないことが多い。
- ・言葉はまだはっきりしないが、保育士の言葉かけは理解でき行動できる。
- ・体は大きくて2歳児並みの体格をしているが、体の動きがぎこちなくどちらかというと体を動かす遊びより手先を使った遊びにじっくり取り組むことができる。

### エピソード①《ひこうきブーン》7月頃



登所後0歳児クラスの子と一緒に遊んでいる時のこと。

弟がうつぶせになり、顔を上げ両手両足をピンと伸ばしているのを見て「わあ～Kちゃんひこうきみたいだね～かっこいいね～」と言った保育士の何気ない言葉を聞いてHくんがKちゃんのそばにやってきた。しばらくKちゃんの様子を見ていたが、Kちゃんの横で腹這いになると自分も顔と両手両足を上げひこうきのポーズをして見せた。「Hくんもひこうきだね～Kちゃんと同じだね～」「ほら、このひこうきみたいだよ」とHくんが気に入ってよく見ていた乗り物の絵本を開いてみせると「ひこうきブーン」と言って、更に手足を伸ばして笑顔でポーズをとっていた。兄弟でひこうきのポーズをとっている姿がとてもかわいかったので、手をたたいて一緒に喜んでやると、近くにいた子ども達も寄ってきてHくんの真似をしてひこうきのポーズをとり始めた。

その後クラスで「ひこうきブーン」が大流行した。  
エピソード②《やりたくない・・・》

Hくんの「ひこうきブーン」から始まった、ものや動物を真似て体を動かす遊びは子ども達に大人気となった。みんなで保育士の動きを真似してみたり、部屋の中を動物になって動き回ったりする時間を持つようにしたところ、個人差はあるものの子ども達みんなが体を動かして楽しめるようになった。

そんな中でHくんだけは、こちらが誘いかけた事には全くやる気を起こさず、座り込んだまま動こうとしなかった。誘いかけるとすねたり、ひっくり返って泣いたりするのでHくんの気のすむまでそのまま見守ることにした。

### エピソード③《線の上を歩いてみたよ》



ある日、部屋の床に目印として貼った赤いビニールテープに子ども達がとても興味を持った。何か遊びにつながるかなと思い、保育士がテープの上を歩いてみせると、子ども達はすぐに真似して歩き始めた。

Hくんもその時は興味があったのか、みんなと一緒に歩いていた。そのうちテープを踏まないようにまたいで歩いてみたり、這い這いで進んでみたり、他の歩き方を考え試してみるようになった。いろいろな動きをやってみるHくんの発想におどろき、褒めてやるととても嬉しそうに笑顔を見せるようになった。

そこで、テープを何本か増やしてみると今度はテープからテープに向かって両足で「ジャ〜ンプ」と跳んでみたり「ケンケン・・・」と言いながら片足とびに挑戦してみたり、どんどん遊びが発展していき飽きることなく動き回っていた。

### 【考察2】

Hくんの中では“ひこうき”は特別のようで、絵本の中でひこうきを見つけるとさっと腹這いになってポーズをとったり、他児がやっているのを見ると、自分の方が上手だと言わんばかりに得意気になってポーズをとったりする姿がみられた。

弟と一緒にできたこと、保育士に「すごい」と認めてもらえたこと、乗り物大好きなこと等、Hくんにとって嬉しいことが重なって自信になったのだと思う。

しかし、あまり体を動かすのが得意ではなかったHくんが、初めて自分から何度も繰り返してやって見せたことに、つい嬉しくなって「それならこんな事もできるんじゃない・・・」とこちらの思いを押し付けてしまっていた。Hくんにとっては、みんなで同じ事をして「ピョンピョンウサギさんだよ」「次はへびさんだよ」などとやらされるのは、自分のやりたい事とは違って嫌だったんだらうなどと気付いた。

一人で遊んでいる時や1対1の関わりの時には、ひこうき以外にも動物の真似をしたり、跳んだりして楽しむ姿が見られるようになったので、みんながやっている事をちゃんと見ていたんだと思った。



しかし、やはりみんなで体を動かして遊ぶ時には、一人端の方で動こうとしなかったり、寝転がったりする姿が見られる。Hくんが何に興味を持ち楽しいと感じているのか探りながら関わってきたが、Hくんの態度はあまり変わらず一進一退の状態である。これからもHくんの気持ちに寄り添いながら一緒に楽しめるようにしていきたい。

### 【事例3】環境の工夫

何かの理由で「今はやりたくない」と皆と一緒に動けない子も、もっともっと体を動かしたい子も含め、誰

でもやりたい時に体を動かせる環境は作れないか。常設して安全に楽しめる仕掛けは無いかと考えてみた。

#### エピソード①《まねっこしよう》

◎廊下の掲示スペースに絵本の中の面白いポーズを大きくパネルにしたものを貼っておく



#### (子どもの反応)

掲示して間もない頃は興味を示して見ていたので、「こんな格好できる？」と保育士が声をかけるとやっていた。時間が経つと興味が薄れてくるので、1枚ずつ貼り、様子を見て取り替える事で、興味が持てるようにした。又、掲示場所を玄関から見える位置に変えたことで保護者が一緒にやってみたり、子どもや保育士との会話のきっかけとなったりする場面もあった。

#### エピソード②《ジャンプしよう》

◎廊下の壁にクラスカラーのビニールテープを色々な高さに貼っておく

#### (子どもの反応)

壁に向かって手を伸ばしてジャンプをし、テープにタッチする姿がみられた。友達同士でどの色に届くか話しながらジャンプしたり、自分で目標を決めて狙ってジャンプしたりしていた。

◎2階の廊下にポンポンを吊るす。ポンポンの高さには変化をつける



#### (子どもの反応)

3歳児の保育室前に設置したこともあり特に3歳児が真っ先に興味を示し、ポンポンに触ろうと喜んでジャン

プをした。

「黄色に届いた！今度は赤だ！」と、その場からのジャンプでは届かない時には、助走をつけるようになった。

はじめのうちは子ども達が殺到し、ぶつかったり手が当たったりして危険な場面もあった。その中で、「順番に並んでやろう」と自分たちで問題を解決しようとする姿もみられた。

子どもたちはとても喜んでジャンプをして楽しむことができたと思う。しかし、いつまでもやり続けて生活の流れに支障をきたすこともあったため、取りはずすこととなった。

#### ◎1階掲示板前に掌のプレートを吊るす

(子どもの反応)

2階に吊るした物よりも高さがあったため、4・5歳児が頑張ってジャンプする姿が見られた。3歳未満児も、上を向いて背伸びをしたり、手を伸ばしたりしていた。母親に抱っこしてもらい触っている姿もみられた。

#### ◎遊戯室の壁に掌のプレートを貼る

(子どもの反応)

壁(高さ80cm)に貼った掌には0歳児が興味を示し、手を合わせて楽しんでた。その様子から0歳児の保育室にも小さな掌と足型を貼ってみたところ、触ったり、踏んだりして楽しむという広がりもあった。



3歳児以上児はあまり興味を示さなかったが、次の事例のような遊びで楽しむ事が出来た。

#### エピソード③「おさるさんみたいだね」

数年前、遊戯室の柱の補強をしたことにより、床から1.5mの部分にふち(幅4cm)ができた。4歳児のNくんが積木に登ってそのふちに指をかけ柱にしがみついて遊び始めた。担任保育士はその様子に気づき、事故につながらないかとの心配もあったが、子どもが自ら発見した遊びなのでその気持ちを大切にしたいという思いと、体づくりにも良いのではないかと考え禁止することなく見守ることにした。そのうちほかの子ども達もやり始め、朝夕の合同保育の時、遊戯室で遊んでいると4歳児の数名はいつもその遊びを楽しんでいた。

始めはぶら下がることがやっとだった子ども達だが、続けるうちに足を使って体を支えながら柱の周囲を回っ

たり、ステップ平均台から飛びつくような遊びを見ついたり、遊び方がどんどん進化していった。指にまめをつくっていることもあった。



そんな子ども達の姿を懇談会で保護者に知らせ共有すると同時に、怪我等への理解も前もって伝えるように配慮していた。

この柱には始め、子どもが床からジャンプして届く所(高さ1.3m)に掌のプレートを貼っていた。次第に子ども達の動きに余裕が出てきたので高いところ(高さ1.7m~2m)に貼ってみた。すると、片手と両足で体を支え片手で掌のプレートにタッチをし、益々遊びが盛り上がり楽しんで姿が見られるようになった。

#### 【考察3】

壁に張ったものより、吊るしたものの方がより興味を示したように思う。特に未満児にとっては魅力があるようだ。上を向く、手を伸ばす、背伸びをする、ジャンプをするなど色々な動きへとつながっていき、日頃出来ない体の動きを引き出すことが出来た。

0歳児では興味を見逃さず遊びを取り入れ、4歳児の見つけた遊びでは、担任の思いを他の保育士もくみ取ることができ、共通の思いで見守ることができた。保育所全体で継続して体づくりを意識してきたことからこのような広がりが見られたと思う。

そして何より子どもの発想には驚かされた。柱の補強工事によってできたわずかなふちが恰好の遊び場となった。保育士発信のしかけは、楽しんでいる姿も見られたものの自ら見つけた遊びの盛り上がりとは比べ物にならない。

このような、子どもがあそびを発見していく姿を大切にしていけたら良いと思った。

#### V. まとめ

しっかりとした体を育むことが、学習面や生活面の基礎となることを学び、体づくりの大切さを感じながら、運動遊びに取り組んできた。

これまでは運動遊びや生活の中の動きを「〇〇させたい」「〇〇できるようにしたい」という思いが強くなり、

できないことをできるようにしようとする働きかけで、保育士の思いを押し付けてしまっていたように思う。

子ども達の中にはやりたくない気持ちが強くなったり、楽しそうな様子が見られなかったりする姿もあり、これではいけないのではないかと疑問に思うようになった。

研究を進めていく中で、子どもの好きなものは何か、今はどうしたいのか、子どもの心を受け止め、焦らずに待ったり応じたりするという保育士の関わりの大切さに改めて気づいた。

子どもの姿に合わせて準備した環境では、子どもの心が動き体を動かすきっかけとなること。ワクワク感を共有でき、「心が動くとも動く」ということを再確認した。

さらに、運動遊びの取り組みを継続して行ってきたことで、保育士間で保育士間の共通の思いが生まれ、子どもが発見した遊びが発展し盛り上がり、一つの遊びが色々な年齢のクラスに広がったりしたのだと思う。

今後も、低年齢から体を動かすことが楽しいと思えるように一人ひとりに応じた関わりや環境の準備をしていき、保育士自身が柔軟な心を持ち、子どもが発見

していく姿を大切にしていきながら、健やかな心と体を育てていきたい。

#### 【参考文献】

1. 笹田 哲著  
「体・手先の動き指導アラカルト」  
中央法規（2013）
2. 鯨岡 峻・鯨岡和子著  
「エピソード記述で保育を描く」  
ミネルヴァ書房（2009）
3. 鯨岡 峻著  
「保育・主体として育てる営み」  
ミネルヴァ書房（2010）
4. 平成26年度幼児期の運動に関する指導参考資料作成委員会「幼児期の運動に関する指導参考資料」  
文部科学省（2015）
5. 松江市保幼小接続カリキュラム委員「松江市保幼小接続カリキュラム～すくすくアプローチ！わくわくスタート～」  
松江市教育委員会（2013）

評者：井桁 容子

日常の忙しさのなかで保育者が保育の実践報告をする意味は、主観的になりがちな保育を振り返り、検証し保育の質を高めていくということにあり、大変重要なことである。そして、良い実践であればあるほど、他者に文章で伝える力を持たないともったいないことになる。これは具体的な今を求められる保育実践者には厳しいことであるが、保育者である以上、永遠のテーマであるかもしれない。本報告は、子どものいろいろな動きを引き出すための、環境の工夫がユニークでオリジナリティーもある実践である。保育者が仕掛けた環境の工夫に子ども達がどのように反応し、関わりを持ったかを細やかに捉えている。更に、「自分のやりたい事とは違って嫌だったんだろうな」と、保育者の視点と子どもの気持ちとのズレに気付いていることも、大事な気づきとして高く評価したい。保育者は、とかく集団の中の一人として子どもを捉えがちだが、乳幼児期は個人差が大きいこと、一人ひとりの最善の利益を保障していくことを基本に保育に臨まなければならない。ついつい、保育者の思いや目標が中心になってしまっていないか、一人ひとりのその子らしさは尊重できたか、などの振り返りは欠かせないことである。

評者：石川 昭義

本報告の実践は、「体を動かすことに消極的で楽しそうな様子が見られない子どもは、小さい頃からそういう姿が見られることに気付いた」ことから始まっている。報告では、低年齢から体を動かす楽しさを味わうための様々な実践・工夫が描かれており、写真からは子どもはさぞ楽しんだことであろうと想像できる。事例3の「環境の工夫」では、子ども自らが発見した遊びにも注目しながら、さまざまな工夫が描かれており、大いに参考

にすることができるだろう。

事例2の1歳児Hくんの記述は中途半端な印象である。「Hくんが何に興味を持ち楽しいと感じているのか探りながら関わってきたが、Hくんの態度は一進一退の状態である」を踏まえて、Hくんが楽しいと思える工夫がその後なされたのかどうかの記述があるとより充実した報告になったと思われる。当初の研究目的と照らし合わせて、このような低年齢からの実践の積み重ねが、4歳児、5歳児になっても「体を動かす楽しさを味わう」につなげられるように、継続的な取組と追跡の研究がなされることを期待したい。

評者：酒井 かず子

箸の持ち方や手先のぎこちなさが気になっていたことから研究を始められ、手先のぎこちなさは体の動きにもぎこちなさが見られることから、手先の発達のためには体づくりが大切だと考え、様々な運動遊びを取り入れたり、生活の中の動きに着目して、取り組んでいかれたことに共感しました。

飛行機ブーン・テープの上を歩く・ジャンプ・ぶら下がり・よじ登り、等々、室内でも可能な事を沢山仕掛け、子どもたちが積極的に取り組み、盛り上がり、さらに向上するために何度もチャレンジしたりと、嬉々として取り組んでいる姿から、まとめに記載されているように、保育士の主導で、押し付けてしまったことに気づき、子どもの成長に合わせ、主体的に取り組みたいと思ったときにその環境が整っていることが、子どもがワクワクと取り組めたり、子ども同士で遊びが発展したり盛り上がったたりすることを確認し、保育士間で共通の意識が持てたことは素晴らしいと思いました。

## 〈実践報告部門〉

### 子どもの笑顔は、保育士の笑顔から！

～保育士の幸せな笑顔が絶えない保育園は子どもの笑顔もあふれている～

沖縄県・社会福祉法人玉重福祉会 愛心保育園 新城 利奈子

#### 1. はじめに

当愛心保育園は地域に根差した保育園づくりをモットーに取り組んできて、今年度34年目を迎えた。そのような中で、目まぐるしく変化する保育制度にもいち早く対応できるように学びを深め取り組んできており、人材育成や職員の資質向上については、以前より園内外の研修や勉強会に力を注いで取り組み、全職員がひとつの目標に向かって気持ちをそろえ日々の保育に努めている姿はとても尊いことだと感じております。また更に意欲的に取り組むと言う意味では個人差が感じられたり、また離職者も毎年度いることもあって思い悩んでいた。そのような折に平成27年度、沖縄県福祉・介護分野における人材育成ガイドラインモデル園として、チューター制度に

取り組むことになり、アドバイザーである大山美智代先生との出会いや研修などを通して、学びを深めより良い職場づくりとより良い人間関係の構築を目指し、平成28年度も引き続き人材育成の一環としてチューター制度導入の実践に取り組むことにした。

#### 2. 園の概要

設置主体 : 社会福祉法人 玉重福祉会  
保育園名 : 愛心保育園  
開園 : 昭和58年 4月  
所在地 : 那覇市上間384-15  
園児数 : 定員80名 現員96名

年齢	0歳児	1歳児	2歳児	3歳児	4歳児	5歳児
定員	10名	15名	15名	15名	15名	10名
現員	12名	16名	18名	18名	18名	14名

職員構成 園長、副園長、事務職員、主任、副主任、保育士14名（フリー、パート保育士含む）  
管理栄養士、調理員2名

#### 3. ねらい

- ①チューター（正職員）の人材育成に対する資質向上
- ②フォロワー（新任・中堅職員）の働きやすい職場づくり
- ③楽しくイキイキと働ける人間関係づくり

#### 4. 研究方法

- ①前年度（モデル園としての取り組み時期）の反省、見直し
- ②フォロワー、新任職員へのチューター制度導入の説明、共通理解
- ③チューター＆フォロワー面談

#### 5. 実践方法

- (1)今年度の取り組み（前年度の反省を踏まえて）
  - ①年度初めの3ヶ月は、新入園児の園生活での安定を重視したいことと、新任職員の方からも仕事に慣れた頃

が良いという話し合いのもとに、面談スタート時期を7月からとした。

- ②前年度は面談をペア職員へ任せていたが、なかなかスケジュールが合わないという理由で思うように面談が出来なかったため、今年度は全職員で話し合い理解を得た上で、主任保育士が日程調整を行った。  
午睡時間（13:00～15:00）間の30分～1時間程度とした。
- ③前年度は不定期となっていたため、定期的に取り組む方が問題解決への道にもつながり「心の輪」にもつながるといふ全職員の意見を取り入れ毎月行うことにした。
- ④マッチングには、フォロワーのアンケートを行い決定する。

(2) チューター制度年間計画

月	面談計画	取り組み
4～6月	・新年度スタートにあたり、全職員が落ち着いて面談ができるよう、第1期は保育業務に専念し、面談実施は7月より行う	・チューター制度について全職員周知 ・チューター選定 ・マッチング ・ルールの作成
7月	・第一回目面談	・面談日計画 ・面談ノートの集計、分析
8月	・第二回目面談	・面談日計画 ・面談ノートの集計、分析
9～10月	・第三回目面談	・面談日計画 ・面談ノートの集計、分析 ・前半の振り返り ・チューター会議（問題解決に向けて）
11月	・第四回目面談	・面談日計画 ・面談ノートの集計、分析
12月	・第五回目面談	・面談日計画 ・面談ノートの集計、分析
1月	・第六回目面談	・面談日計画 ・面談ノートの集計、分析
2月	・第七回目面談（一年の振り返り）	・面談日計画 ・面談ノートの集計、分析 ・後半の振り返り

(3) チューター面談ルール

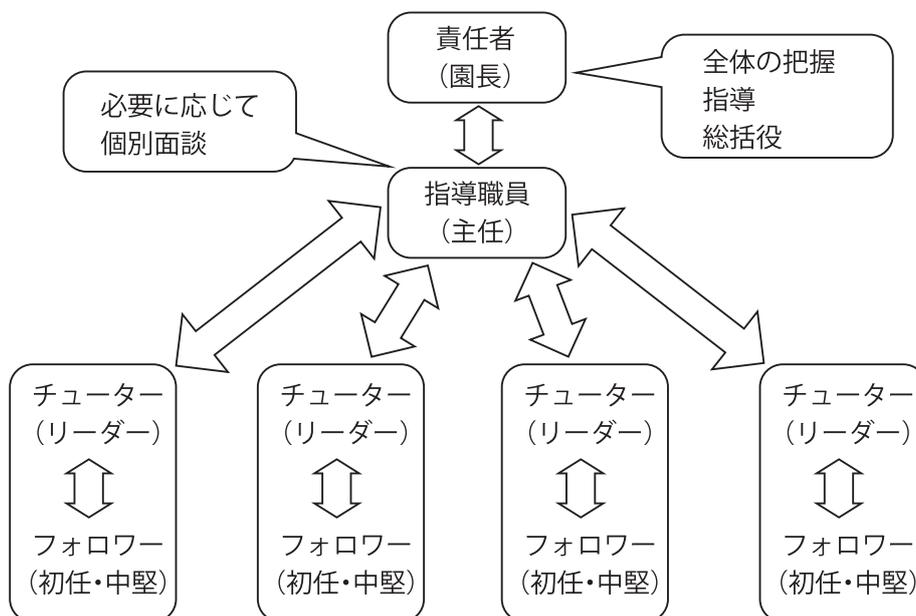
①守秘義務を守る（チューターの判断によっては、責任者（園長）へ面談内容を伝えることが大切であることを、フォロワーへ伝え理解を得る。その際にはフォロワーの理解を得る）

②30分から1時間内に終了できるようにする。

③就業時間内に行う

6. 実践報告・結果

①チューターフローチャート



②面談を通しての感想

	チューター（指導、アドバイス役・正職員）の声	フォロワー（相談役）
第一回目面談	<ul style="list-style-type: none"> <li>・一階と二階職員では、会話する時間がなかなかとれませんでした。色々な話ができたととても良かった。笑顔での会話が多かった。次回も雰囲気作りを大切にしたい。</li> <li>・日々保育中は慌ただしく、落ち着いて話しをする機会が少ないので、じっくりと話ができる時間がとれて有意義だった。</li> <li>・相手の話しを十分に聴く姿勢（オウム返し、8：2の会話）ができていなかった。</li> <li>・チューターの方が緊張してしまっていた。逆に相手からパワーをもらうことができた。フォロワーさんも「あっという間に時間が過ぎてしまった」と言ってもらえて安心した。</li> <li>・普段伝えきれないことや思いを聞くことができたので良かった。</li> <li>・不安なことがないか尋ねたが「大丈夫」と笑顔での返事に安心した。</li> <li>・相手の方が、経験豊富だったので、子育てや保育において、逆にアドバイスをもらうこともあり、自分自身のためにも良かった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・先輩方のサポートができているだろうか、逆にご迷惑になっていないかと心配でした。面談で気さくにお話しができ、とても嬉しかった。今後も自分のできる限りの力を発揮し、毎日の仕事を頑張りたいという意欲が湧いてきて励みになった。</li> <li>・話しを聞いてくれたチューターさんのように明るく前向きになりたいと強く思った。</li> <li>・自分に足りない部分の発見につながることができた。</li> <li>・ゆったりとした雰囲気の中で、いろいろと話すことができ、チューターさんとの距離が縮まり、これからのことを色々相談しやすくなりました。</li> </ul>
第二回目面談	<ul style="list-style-type: none"> <li>・感謝の言葉を聞くことでお互いに信頼関係が深まりとても良かった。</li> <li>・フォロワーからも色々心に響く良い話しが聞けたので、自分自身も非常に勉強になった。</li> <li>・暑い日の続く毎日の仕事で、そろそろ疲れも出てくる時期ですが、笑顔での会話が多く時間が過ぎるのもあっという間でした。短時間の設定ですが、フォロワーさんの心が和み、楽しく幸せな気持ちに繋がるよう努めたいと思う。</li> <li>・今回は自分自身の話しが多かったような気がする。聞き上手になれるようにしていきたい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・チューターさんの温かいお人柄に触れ、いろいろなお話しを伺うことが本当にありがたいと思う。また、面談場所の選定、テーブルにさりげなくお花を飾って下さる優しい心遣いに、緊張がほぐれ、ますます保育士としてのやりがいを感じることができたり、励ましてもらうことで幸せな気持ちになり、勇気が湧いてくるなど、感謝でいっぱいです。</li> <li>・疑問に思っていた、行事の流れについてもしっかりと聞くことができたので心の安定につながりとても良かった。</li> <li>・いつも笑顔で対応してくれるので、気持ちが明るく前向きになります。</li> <li>・気になっていることなどを聞くことができ、心が和み落ち着きました。</li> </ul>
第三回目面談	<ul style="list-style-type: none"> <li>・私自身が励みになった。</li> <li>・なかなかゆっくり話をする機会がなかったので、コミュニケーションがとれて、楽しい時間を過ごすことができた。現在は問題もなく、そして無理なく仕事ができているとのことで心から安心している。</li> <li>・前回の面談から気持ちがすっきりし、感謝しているという言葉聞いて嬉しかった。</li> <li>・逆にアドバイスをもらい私自身気持ちが落ち着くことができたので良かった。</li> <li>・フォロワーさんの仕事に対する前向きな姿勢が感じられ、反対に私が良い刺激を受けていることに、かえって感謝している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・短い時間ですが、楽しく話ができ良かった。ありがとうございました。</li> <li>・チューターさんが、じっくりと話しを聞いて下さるので、心を開いて話しをすることができ本当に感謝です。仕事の面においても、いろいろとアドバイスを頂けることが嬉しく勇気もらってます。</li> <li>・次回の面談が楽しみです。</li> </ul>

### ③チューター会議

- ・面談を終えて問題解決への会議を行う。(チューター

が感じたフォロワーの問題点について)

問題点	解決策
①コミュニケーション力の弱い職員がいる。	①チューター全体で該当職員へ常に声をかけその都度、コミュニケーションのヒントを与えていく。またコミュニケーションスキルアップに関する研修受講を勧めていく。
②自身の保育や仕事について、常に不安を感じている職員がいる。	②該当職員の仕事ぶりやアイデア、言葉使いなど、日常の中でその都度良いと思ったことを素直に褒め、感謝の言葉を伝えながら、自信を持たせていく。
③特定の保育士の保育の仕方に疑問を感じている職員がいる。相手が自分より経験者のため反論できず受け入れている。	③疑問を感じている保育の仕方をしっかりと聞き出し、個人が特定できないように十分配慮しながら、保育の仕方についてケース会議を持つ。必要に応じて全職員共有、または個別に指導を行っていく。
④家庭の事情で出勤体制に依頼があった。	④可能な限り、該当職員の事情を考慮し、出勤体制を考えていく。
⑤書類（児童票など）の記入の仕方に不安を感じている職員がいる。	⑤リーダー職員が統一した文章の表現方法記入の仕方を再確認し、全体の勉強会などで各クラス内での声かけを行い、下書きに目を通しながら清書をする習慣づけを行っていく。

## 7. 考察

- ・クラス会議、職員会議等を定期的に行っているものの、クラス内での問題解決、また人数が増えると発言する時間も限られてくるため、一つの疑問を納得するまで話し合うことができない。しかし、個別に面談を行い、チューターから相談を聞き出してもらうことで、フォロワーの問題解決へとつながっていることがわかった。また、あえてクラス年齢の違うペアにすることで、第三者の意見を聴く良い機会になっている。
- ・面談を通して、フォロワーに必要な知識を見出すことができ、研修へと繋げることができるなど、新人育成や指導のヒントが得られた。指導を行う事や話を聞く側になることで、結果的にチューター（リーダー）の資質向上やコミュニケーション力のアップへとつながっている。
- ・全職員の会話、声かけが増えてきていることで、保育園全体の笑顔が絶えない雰囲気になっている。また、面談を通して、持ちつ持たれつつの関係性ができ、お互いが惜しみなく感謝の気持ちを持ち相手に伝えることで、より良い保育へのモチベーションアップへとつながっている。
- ・全職員がお互いに成長できる良い取り組みだと感じている。
- ・面談を通して職場に対するフォロワーの求めているポイントが分かったので、チューター（リーダー）としての役割が明確になり、問題点を持ち寄り考えることで、結果的には全職員が同じ方向を向いて心をひとつに仕事に取り組むことができている。
- ・お互いに相手を気遣うことで職員間の気持ちの変化やその日の体調の変化などにも自然と心配りができ、声かけがスムーズに行われるなど、気持ちが安らいで幸せを感じる。

- ・不安が解消されることで、表情が常に明るくなった。

## 8. まとめ・今後の課題

チューター制度と聞いて、難しい取り組みのように感じ、実際にスタートした当初はお互いが構えてしまい、意図するところと違った方向へと進みかけていたが、全職員で必要性や取り組みの仕方を確認することで不安はなくなり、和気あいあいとした雰囲気の中で面談を通し、チューターとフォロワーが「助け合い、励ましあい、そしてありがとうという感謝と思いやりの心など」保育士としての資質向上とお互いの成長へとつながってきている。また保育士の成長が、子ども達への成長へとしっかりつながってきていることも嬉しいことである。このような保育士同士の笑顔でのやりとりや思いやりの心と感謝の気持ちを表わすことのできる「心の輪」は、保育士から子ども達へ、そして保護者へと伝わり広がっているように感じて嬉しく思う。また子ども達のことや保護者の問題点はこれまでケース会議として話し合う場はあったのですが、保育士の問題解決についての話し合いの場はなかなか取り組むことができていなかった。しかしこうしてチューター制度に取り組むことで、お互いの心のケアにもつながってきていることをありがたく思う。今後も取り組んでいく中で、フォロワーの資質向上に必要な内容を見極め研修計画に取り入れたり、全職員の絆へと信頼関係がしっかりと深まるように、面談のペアを毎回変えてみることも更なる資質向上並びに自信へとつながっていくのではないかと期待している。まだ実践の道半ばだが、今後も継続して内容を深めていきたいと思う。

### 参考文献

- ・沖縄県の福祉・介護分野における人材育成ガイドライン

資料①

\*\*\*\*\* 面談ノート（フォロワー用） \*\*\*\*\*

氏 名	
面 談 日	平成28年 月 日 曜日( 回目)
面 談 時 間	時 分 ~ 時 分
面 談 場 所	保育室・階段の踊り場・休憩室・その他( )

◆今回の面談について、当てはまる項目に☑チェックをして下さい。(複数回答可)

- 面談時間は適切だった。
- 面談時間は短かった。
- 面談時間は長かった。(理想の面談時間… )
- 面談場所は話しやすい雰囲気だった。
- チューターと話しやすく、うちとけることができた。
- チューターと話しにくく、うちとけづらかった。
- 仕事のことで不安が解消できる内容があった。
- これから仕事をする上で前向きになり、気持ちが充実したことが嬉しい。
- プライベートな話しができて良かった。
- 楽しかった。
- 次回の面談が楽しみ。
- 特に相談内容は無かった。
- チューターさんと距離が縮まり良かった。
- チューターから上司へ伝えてほしい内容があり、相談できて良かった。

※意見や感想がありましたらご記入下さい。

## \*\*\*\*\* 面談ノート（チューター用） \*\*\*\*\*

氏名	
面談日	平成28年 月 日 曜日( 回目)
面談時間	時 分 ~ 時 分
面談場所	保育室・階段の踊り場・休憩室・その他( )

◆今回の面談内容について、当てはまる項目に☑チェックをして下さい。(複数回答可)

- 面談の内容に特に問題はなかった。  
仕事内容について、疑問質問があった。  
上司(スーパーチューター)や組織に報告したい内容があった。

※フォロワーの同意を得た上で、面談の内容をご記入下さい。

※面談をしての感想をご記入下さい。

◆今回、チューターを終えて、当てはまる項目に☑チェックをして下さい。(複数回答可)

- 時間は十分確保できた。  
仕事内容について、疑問質問に適切にアドバイス、指導ができた。  
相手の話しを十分に聴くことができた。(8:2の割合)  
自分本人のことも含めてアドバイス又は、相談を希望したい。

## \*\*\* 面談の際の留意点 \*\*\*

- 守秘義務を守る。  
 業務の一環として就業時間内に行う。  
 一人で悩まずに、スーパーチューターへ相談する。  
 相手が身体等の不調を訴えた場合は、激励するのではなく現状を受け止め、上司に報告・相談し対応を確認する。

## \*\*\* 面談の流れ \*\*\*

- ① 相手が安心感を持ち、心を開いて話ができるように距離を近づける。
- ② 相手の話しを十分に聴く。(8:2の割合、オウム返し)
- ③ 相手が上手く話ができるよう、質問を駆使して訊く。
- ④ 相手の想い(理由、言い訳なども)を受け止める。
- ⑤ 必要であればその時々状況にあったアドバイス、指導をする。

※チューターさんも一人で悩まず、疑問に思ったことは話しやすい同僚や上司へ相談して下さい。

講評：子どもの笑顔は、保育士の笑顔から！

～保育士の幸せな笑顔が絶えない保育園は子どもの笑顔もあふれている～

評者：石川 昭義

人材育成ガイドラインモデル園として、チューター制度の導入によってどのように組織づくりに取り組んだかが描かれており、一連の経過の記述は、離職率の軽減あるいは同僚性の構築をめざす各園にとって大いに参考にすることができると思われる。報告書では3回目までの面談のまとめが記述されているが、計画では年7回の面談が行われることになっており、人材育成に係るその後の面談の成果が期待される。

チューターフローチャートによれば、チューターと指導職員（主任）、指導職員と責任者（園長）は双方向の矢印で結ばれている。チューターはどのように指導職員に報告したのか。チューターからの報告に対して園長はどのように対応したのかが記述されていると組織の仕組みがわかりやすくなったと思われる。さらに、チューターによる面談が一つのきっかけとなって、園としての問題解決につなげた事例の紹介があると、この制度の意義と組織づくりについてのより充実した報告になったと思われる。

評者：小林 芳文

本研究のテーマ設定を拝見して、今子どもの保育で最も大切にしたい保育のキーワード「幸せ」の理念が取り上げられ、心がひかれ大変暖かいものが伝わって来ました。これに対しての研究の取り組みをどうするのか、展開に興味を持ちました。研究は、チューター制度の導入でこの課題に取り組まれたこと、そして実践方法のやりとりに向けての定期的な取り組み、年間計画を作成、問題解決への道を繋げたこと良いアイデアでした。実践

研究の結果としてまとめた、面談を通しての感想分析（チューターとフォロワーの意見）、更にはチューター会議での問題解決への整理にも説得力があり良い研究になりました。同じ職場での保育士同士の思いやり、感謝の気持ち、やりとりが、「心の輪」を作り保育士の笑顔を生み成果が見られましたね。今後、可能でしたら資料としてあげている「面談ノート」の結果を整理してこの大切な研究課題にさらに深みを入れて 取り組まれたらと願っています。

評者：酒井 かず子

34年の実績から人材育成ガイドラインモデル園として選ばれ、人材育成の一環としてのチューター制度に取り組む事になったのは、時期にピッタリの取り組みだと思います。待機児童対策で保育所が増える中、保育士不足が大きな問題となっています。質の高い保育を行う為には質の高い保育士が必要ですが、研修だけでは補いきれず、貴園で取り組まれたようなチューター制度により、職員間の信頼や意思の疎通、相談しやすい関係を築く事により、しっかりした職員関係となる事が必要と考えます。

考察にも記載されていましたが、個別に面談を行う事により、チューターから相談したかった事を引き出してもらったり、問題解決につながったり、チューターの資質向上につながったり、全体のコミュニケーション力のアップにつながったりと、効果は大きいと思います。まとめとして謙虚に「実践の道半ば」と記載されていますが、大きな目標に向かっている事に大きな期待を寄せています。



## (4) 奨励賞

### 〈課題研究部門〉

- ・ 課題研究②遊びと学び

「絵本の環境設定」強まる親子の絆・広がる心の世界」

北村 法子・飯嶋 和美・石井 美沙紀

(東京都・社会福祉法人東京弘済園 弘済保育所 (おひさま保育園))

### 〈実践報告部門〉

- ・ 「見直そう保育—よりよい保育をするために—」

渡部 忍 (兵庫県・宗教法人願行寺 みなと保育園)

- ・ 「月齢にあった歩育生活を楽しむ

～体を動かして楽しく園生活を送る為の体づくりを目指して～」

中崎 朋美 (鹿児島県・幼保連携型認定こども園建昌保育園)



## 課題研究② 遊びと学び

### 「絵本の環境設定」強まる親子の絆・広がる心の世界

東京都・社会福祉法人東京弘済園 弘済保育所（おひさま保育園） 飯嶋和美・北村法子・石井美沙紀

#### I. はじめに

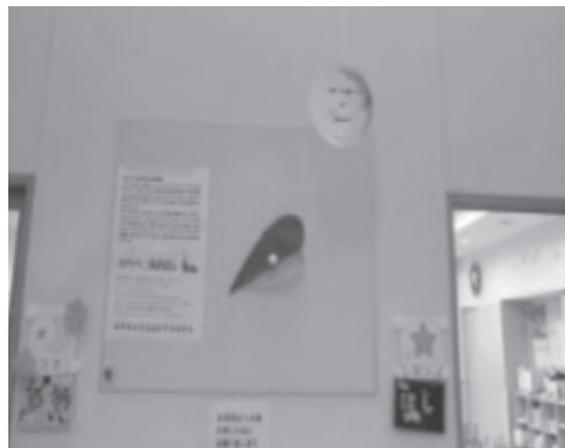
今、子どもたちの心が危ういと言われている。人の痛みが分からない、思いやりがない、すぐにキレるなどの問題が指摘されている。

まず、大切なのは情緒の安定ではないかと考え情緒の安定を図るためには、親とのコミュニケーションが1番ではないかと考えた。しかし、当園では親子で絵本にふれる環境が整っていなかった。絵本コーナーがなく玄関に絵本棚があったが絵本の数も少なく親子でゆっくりと読める環境ではなかった。そこで、自宅に帰る前に絵本を読み親子の時間をゆったりと過ごしてもらいたいと思い1、2歳児室前の廊下に本棚とベンチを設置し絵本コーナーを作った。



1、2歳児室前の絵本のコーナー

面の展開を行っていった。併せて『はらぺこあおむし』の絵本を本棚の上に置くと保護者が子どもや他の子に読んでいる姿が多くみられるようになってきた。園児は、保育者とは違う読み手に楽しそうに絵本を見入っていたことがとても印象的であった。他の絵本にも興味を持ってもらいたく、本棚の前に絵本の紹介スペースを新設し新しく購入した絵本の表紙と内容やみどころを書いたものを掲示した。数日が経つと、保護者から「これ、おもしろそう。」と反応を得ることが出来た。中でも、井の頭自然文化園著『日本で一番手のかかるぞう』は地域にある動物園が舞台となっていることもあり、保護者が先に興味を持ち立ち止まって読む姿が見られ、その後子どもにも読んでいた。



#### II. 研究の目的・方法

本に触れる機会が増えることで子どもたちにどのような効果があるのかを検証したい。

#### III. 研究の方法

- ・絵本に興味を持ってもらうための環境設定
- ・読み聞かせを通しての心の変化を探る

#### IV. 事例と考察

【事例】興味を持ってもらうためのコーナー作り

- ・1、2歳児保育室前 絵本の紹介

保護者と園児が絵本に興味を持ってもらうためにも園で人気のエリック・カール著『はらぺこあおむし』の絵本を立体にし壁や空間を利用しページをめくるように場

この事を通して“もっといろいろな絵本に興味を持ってもらいたい”という思いが保育者の間で強まり、新しい絵本だけでなく既存の絵本等を季節に合ったものを選び、それに合わせて装飾も変えていった。すると、子ど

もや保護者からも「絵が変わった」「かわいい」「あの絵本読んで」など絵本コーナーへの関心が高まったように感じた。

紹介スペースを設置してから以前より降園の時間に親子で絵本にふれあう時間が増えていった。

登園した際にも絵本を読む親子の姿も見受けられるようになり以前は、朝の入室を渋る子どもが、絵本を1冊読むことで気持ちが落ち着くのかスムーズに入室できるようになったという効果がみられた。

また当園は、高齢者施設と併設しており世代間交流がある。その中で、利用者が作った布絵本「おおきなかぶ」の読み聞かせに来てくれたこともあった。その布絵本を飾ると「おじいちゃんたち読んでくれたね」と園児も喜び、登場人物に関するクイズを設けると、保護者も積極的にクイズに参加してくれ「これ、高齢者の方が作られたのですか？細かくって凄いですね」と歓声の聲が上がったこともあった。

#### 【考察】

絵本コーナー・絵本紹介の設置により、保護者も子どもも絵本に対して関心が高まったように感じた。また、保護者に関しては紹介してある絵本を保護者自身が読んだり、ベンチに座り子どもに読み聞かせをする姿が多く見られるようになった。保育園で読んでもらうことは、兄弟がいる子にとっては保護者を独り占めできる特別な時間であり、また絵本を読むことは必ず読み手が必要なため大好きな人に本を読んでもらえるかけがえのない時間となったのではないかと。また、絵本の楽しさを親子で共有できるひとときは充実した時間になったと思う。絵本のコーナーが“親子のつながり”になっていったと感じた。

#### 【事例】保護者とのコミュニケーション(Tちゃん2歳児)キノヨ サチコ著『あかんべノンタン』

Tちゃんは、絵本が好きで家でもよく読んでもらいお話しの内容を覚えるのも早かった。なかでもノンタンシリーズの『あっかんべ』を好んで見ていて、Tちゃんも楽しんで保護者や友だちにあっかんべをしていた。保護者は絵本にあまり良い印象はなく「読むには、(年齢が)まだ早かった」と気にしていた。また、保育の中で注意されると保育者に見えないように「あっかんべ」をするようになり、楽しいあっかんべが反抗のあっかんべに変化してきているように感じた。このような出来事から、何故絵本の最後に『あっかんべはおもしろい、やめられない』で文が締めくくられているのか、読む年齢を考えた方がいいのか、「あっかんべ」は良いことではないのかにかかわらず、何故ベストセラーになっているのかと疑問が生まれた。そこで直接、絵本の出版社に問い合わせた。

出版社からの返答は「作者は、子どもは“いけないこと”が楽しいので最後に“やめられない”で締めくくら

れています」とのことだった。また、ノンタンシリーズの初めの作品は『ノンタンあっかんべ』であったが、内容的に親からよくないと思われる。とのことで、『ノンタンぶらんこのせて』を先に出版したと言う話であった。あたり前だが、絵本にはいろいろな種類があり『ノンタンのあっかんべ』は子どもの好奇心をかきたてる内容になっていることが分かった。保護者にも、年齢的に早いことはない。ワクワク・ドキドキする絵本で何より、Tちゃんが大好きと思える絵本に出会えたことが素晴らしいことだと伝えた。

#### 【考察】

この事例を通し、注意されると『あっかんべ』をする行動についてはその都度、丁寧に対応していくことにした。保護者の方からは家での子どもの話が出たり保育における質問も気軽に話してくれたりするようになってきた。この絵本がきっかけで以前より保護者との関係が良いものになってきたように感じた。

#### 【事例3】好奇心の育ち(2歳児クラス)

本棚を設置してから室内の絵本に興味を持ち自分で選ぶようになってきた。特に男の子は虫の図鑑に興味を示しみんなで見ようになった為、保育者が仲川道子著『ころちゃんはだんごむし』を読むと、より一層虫に興味を持つことができた。敷地内の芝生であそんでいると

R君「だんごむしいない」

T君「だんごむしは石の下に住んでいるんだよ」

R君「ふーん」

と言い、二人で石の下を探し始めると徐々に周りに友だちが集まり、

T君「いた、だんごむしいたよ」

R君「どれー」

保育者「ここだよ」

R君「本当だ」

H君「Hも(触らせて)」

R君(ギュッと握りもつ)

Y君「ころちゃんが死んじゃう」

H君「優しくだよ」

T君「こうだよ(優しくつまむ)」

#### 【考察】

この絵本を通してころちゃんへの親近感が生まれ、生き物を大切にすることが育ってきているのではないかと感じた。その一方でS君は虫を見つけると手で握りつぶしたり、足で踏みつける姿も見られる。S君に対しすべての生き物には命があることを分かってもらおうとクラスでいとうえみこ著「うちに赤ちゃんがうまれるの」という絵本を読んだがS君は全く興味を示さなかった。S君にはまだ「命」の意味が難しかったのではないかと感じた。3歳児クラスになり2匹のカタツムリを飼いはじめると、タマゴが生まれ観察をしていったところタマゴが

ら赤ちゃんカタツムリがふ化した。S君も その様子を見て

S君 『タマゴから赤ちゃん生まれたね』

保育者 『S君より小さいね、優しく触らないとね』

S君 『赤ちゃんは優しくしなきゃいけないからね』

と話、それから虫をみると

S君 『これは、赤ちゃん？』

T君 『大きいから、お母さんかも』

と、踏まずに観察するようになった。

S君のことを命に興味がないと保育者側が判断してしまっていたが、逆に命に興味があり虫を潰したり、踏みつぶしたりし動かなくなった虫を観察していたのかもしれないと感じた。保育者側の視点のみでS君のことを見ていたと反省した。

#### 【事例4】想像・創造の育ち（2歳児クラス）

造形あそびで段ボールを使い子どもと

一緒にお家づくりをすると段ボールの家に入り

Y君 「七ひきの子やぎの家みたい」

T君 「おおかみくるかな？」

H君 「開けちゃダメなんだよ」

S君 「とんとん、おおかみだぞー」

と、自然と絵本の世界（七匹の子ヤギ）を表現して遊び出した。また、別の日にウレタンブロックで遊ぶと家を作りはじめ

H君 「これ、三匹の子ブタのお家ね」

Y君 「レンガのお家だからオオカミ来ても壊れないんだよ」

Tちゃん「オオカミさん、食べないでー」

Kちゃん「今、ご飯作ってあげるからオオカミさん待ってて」

S君 「Sも、ご飯作ってあげるね」

と、遊びが始まった。黒田愛著『三匹の子ブタ』の話をごっこ遊びで再現しているようであった。

また、ウレタンブロックの家が壊れると電車を作りはじめ

R君 「電車つくる！せんろはつづく・・・」

I君 「どんどんつづく」

T君 「山があったどうする？」

H君 「トンネルつくる」

R君 「みんなー、汽車しよー」

竹下文子著『せんろはつづく』の物語が自然と始まっていった。

子どもたちが恐竜の紙芝居に興味を示し、「もう一回見たい」と続けて見たがるような声が挙がった。室内遊びで、大エブロックを使うと「ブロキオサウルスだよ」と言い紙芝居の中に出てくる恐竜を作るようになった。そこに別の子が、ブロックで「お肉だよ」と言い、その恐竜に食べさせるなど、ブロック遊びだけではなく遊びが広がっていった。

#### 【考察】

保育者が、意図として絵本の遊びを始めたわけではないが、子どもたちが絵本の内容を覚え、

ごっこ遊びへとつなげていく様子を見て、保育者が読んだ絵本が心に届いていたと感じた。絵本の世界に入り込む姿から、子どもたちの想像力も豊かになってきているのではないかと思えた。また、創造する力が豊かになってきたからこそ様々な方法で表現できるようになり“ブロックで恐竜を作る”という発想からさらに“ブロックでお肉を作る”という発想に展開していった。想像する力がついているからこそ子どもたちが目で見たり耳で聞いたものをブロックで造りあげる力（＝創造力）が身についたのではないだろうか。

#### 【事例5】意欲の育ち H君（3歳2か月）

昨年度から生野菜（特にトマト）が苦手で給食のサラダは残すことがほとんどだった。2歳クラスになり、サラダは少しずつ自分から食べ進めることができるようになっていったが、トマトに関しては相変わらず口にするのも嫌がっていた。

保育中に山口マオ著『わにわにのごちそう』を読んでいると

T君 「あー牛乳こぼしている」

と絵本の中の絵の変化に気付き

保育者「本当だ、わにわに牛乳こぼしているね。かっこ悪いね」

S君 「牛乳こぼすのかっこ悪いね」

次のページでは、トマトを落としている絵があり、

Y君 「あーわにわにトマト落としている。かっこ悪いね。」

T君 「Tくんはトマト落とさないよ、ちゃんと食べるもん」

それ以降、この絵本を読むたびにトマトを落として食べないわにわにを『かっこ悪い』と話すようになりそのやりとりが繰り返されていたが、H君はそのやりとりを聞いているだけであった。ある日、『わにわにのごちそう』を読んでいると

H君「わにわにトマト落としている！いけないんだ。Hくんはトマト全部食べるよ。」

と言いつその日の給食に出たトマトを完食することができた。その日以降「トマト食べるから見ていてね」と言いトマトを残さず食べられるようになった。食べられるようになったと同時にこの絵本を読むと、食べ物物を落とす場面で話に加わるようになった。

#### 【考察】

本児はわにわにに対するかっこ悪いは、トマトを食べない自分にも「かっこ悪い」と言われたかのように感じたのではないか。普段から負けず嫌いの本児は、かっこよくなりたいという気持ちの表れからトマトを食べようとする意欲が出たのではないか。「わにわに」がH君の

心を大きく動かしたのかもしれない。

## V. まとめ

今回、絵本を研究のテーマにしたことで保育者自身も絵本に興味関心が高まり、子どもたちに『こんな本を読みたい』『子どもと一緒にこの絵本を楽しみたい』という思いが生まれる良いきっかけとなった。絵本コーナーを設置することで絵本を読む姿が多くなり、親子での時間が増えることで情緒の安定にも反映しているように感じた。幼児期に絵本を読んであげること子どもは大人になっても本を読むことを楽しむようになるのではないかと。保護者に声をかけると、どのような思いで子どもに本を読んでいるのかを聞くこともでき、保護者からおすすめの本を紹介してもらえ保護者と、保育者とのコミュニケーションも取れるきっかけとなった。

絵本は、ただ読んでもらい楽しむだけではなく、普段体験できない冒険などを友だちと一緒に疑似体験し楽しさを共有していけるのではないかと。様々な絵本に出会った子は意識せずに日本語を言葉の引き出しに入れ、その言葉は文脈の中で使える言葉として身についていくのではないかと。イメージ（想像）する喜び、沢山の言葉との

出会いからやがて豊かな「創造」が生み出されていくのではないかと。人との関わりあい自然との触れ合いが少なくなってきた今、人間性を育てていくためにも、子どもたちの将来が豊かなものになる絵本の読み聞かせ、絵本と触れる機会や絵本をゆっくと読める場所を今後も大切なものとしていきたい。

## 参考文献

- ・瀧 薫 著  
『保育と絵本』  
発達道すじにそった絵本の選び方  
エイデル研究所（2010/03）
- ・徳永 満理 著  
『よくわかる0歳～5歳児の絵本読み聞かせ』  
チャイルド本社（2013/01）
- ・渡辺 弥生 著  
『絵本で育てるソーシャルスキル』  
明治図書出版（2009/05）

評者：井桁 容子

本実践研究は、自園の絵本の保育環境が十分整ってないことに気付き、さまざまな絵本に触れ合える環境の工夫を試みることで、子ども達の変化、親子のコミュニケーションへの影響を検証するというものである。具体的には、人気のある絵本に登場するものを立体的にしてみたり、新しく購入した絵本の内容や見どころを分かりやすく紹介するなど、保護者や子どもが興味を引くための工夫がなされ、保護者が先に興味を持つことを引き出すことで、子どもが興味を持ち、結果的に親子の触れ合いが増えていくことにつながるという保育所の果たす役割の有効性が見えた実践である。しかし、実践研究の動機はなかで、「情緒の安定を図るには、親子のコミュニケーションが一番ではないかと考えた」と表現されている。この実践研究の内容からは、むしろ保育環境の工夫、保育者の気付きや努力が親子の安定的な関係性を支えるということではないだろうか。また、残念なことは、実践がユニークで素晴らしいのに、事例の中に考察がふくまれたり、考察の中に事例が含まれてしまっているなど、内容の精査が不十分だったことが惜しまれる。

評者：酒井 かず子

絵本のコーナーを作る理由として、人の痛みが分からない、思いやりがない、すぐにキレるといった、現代の子どもたちの不安定な心を、絵本に触れることで心がどのように変化をしていくのか検証したいという思いから始め、先ず、1、2歳児室前の廊下に絵本のコーナーを作り、保護者と園児が興味を持ちそうな絵本を置き、また、季節に合った絵本や、コーナーの装飾も変えたりして、できるだけ興味を持ったり、落ち着いたりできるように配慮されていました。その成果、朝の入室

がスムーズに出来たり、親子共に絵本への関心が高まったり、創造や想像が豊かになったり、保護者と保育者とのコミュニケーションをとるきっかけになったりと、当初の予想をはるかに超える効果が表れたと感じています。

今後も先生方の小さな気づき、ちょっとしたアイデアの積み重ねで、子どもたちが主体的に活動できる土台が出来ることを期待いたします。

評者：日吉 輝幸

乳幼児期に与える絵本は、「読むものではなく、読んでもらうもの」とも言われている。絵本への興味はもとより、読み手の声や表情を感じ、また時には肌の温もりも感じられることが、乳幼児の情緒の安定のためには欠かせないものだとは筆者は考えている。

研究園でも、絵本は“読んでもらうもの”と位置付け、読み手と聞き手のコミュニケーションや愛着を形成するものとし、園児の成長に影響を与える絵本の力を様々な観点からとらえている。加えて、絵本の内容を、生活や遊びの中での出来事とつなげて考察しているところが大いに評価できる。しかし、事例5で、絵本の中での園児の気付きに対して、保育者がその場面について自身の主観で「かっこ悪いね」という感想を發したことにより、他の場面でも園児が「かっこ悪い」と發するなど、園児の意識の中に「かっこ悪い」という保育者の言葉がキーワードとして刷り込まれたように思えることが残念であった。また、サブテーマである「強まる親子の絆・広がる心の世界」についての考察がもの足りないと感じた。研究題材としては大変興味深いものなので、今後の更なる実践及び考察に期待している。

## 見直そう保育 ～よりよい保育をするために～

兵庫県・宗教法人願行寺 みなと保育園 渡部 忍

### 1 はじめに

みなと保育園は、宗教法人願行寺を経営母体とする園である。

昭和29年の設立から62年の間、『一人ひとりを大切にする保育』を理念に掲げ、仏教保育を実践し、地元根ざした保育をしてきた。

平成23年に園長がかわったことをきっかけに、より質の高い保育を目指すために、外部講師を招聘し、今までの保育を見直した。

この「保育実践研究・報告」は、近年、子どもを取り巻く家庭環境など社会全体が大きく変化していく中、講師と共に今のままの保育でいいのかを検証し、見直してきた「平成23年3月から現在に至る5年間」の記録である。

### 2 園の概要

わが園は、兵庫県美方郡香美町香住区に立地し、四周を海に囲まれ、主な産業は漁業と水産加工で、漁業を中心として発展している。

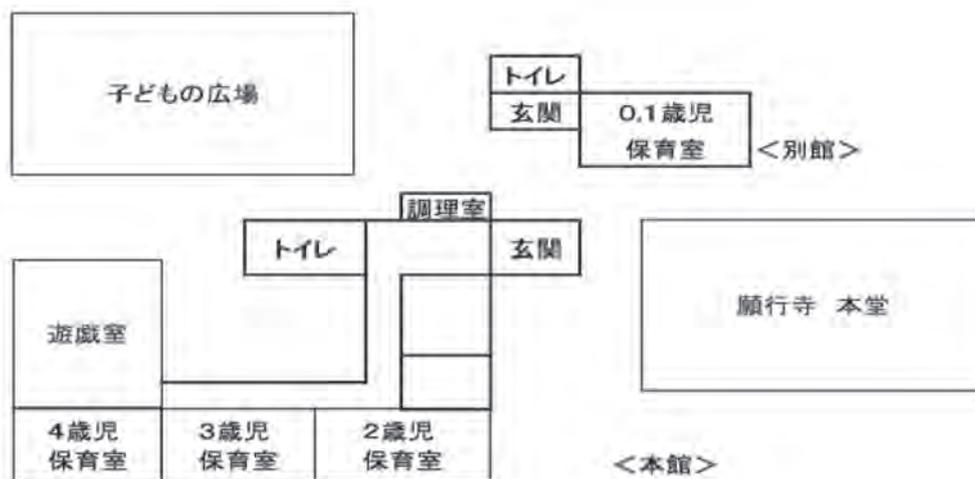
保護者の多くは、漁業・自営業に従事しているため、両親共働きが多い。

また、近年、核家族・母子家庭等も多くなっていることから、3歳未満児が多い。

保護者の就労形態の多様化、通勤時間の必要等から延長保育の希望も多くなっている。

認可日	昭和29年11月1日
定員	90名
園児数	0歳児 10名
	1歳児 19名
	2歳児 19名
	3歳児 24名
	4歳児 30名
	計 102名
	(平成28年10月1日現在)

〈園舎等の見取図〉



- ・ 本館（4・3・2歳児）と別館（0・1歳児）がある。
- ・ 園庭としては、隣接する地区の広場を借用している。
- ・ それぞれの保育室から直接広場へ出ることができない。

### 3 これまでの振り返り

まず、私達が行ったのは、日々、当たり前に行ってきた自分たちの保育の振り返りである。

平成23年3月において、勤務歴30年以上の保育士2名、20年以上の保育士2名、10年以上の保育士3名、計7名に、「自分たちの保育」について聞きとりを行った。

その内容は、次のとおりである。(複数回答)  
 = 平成23年3月 =

(1) 子どもたちの特徴

- ・元気が良く、人なつっこい子が多い。(4名)
- ・活発な子が多い。(2名)
- ・新しいことや物にとびつきやすいが、集中したり継続させることが苦手。(1名)
- ・感動がやすい。(1名)

(2) どのような環境で過ごしているか？

- ・設定保育がしやすいように何も無い広い保育室。(3名)
- ・戸外での自由遊びのとき…リーダー的な子を中心にグループでの遊びが多い。(2名)
- ・室内での自由遊びのとき…ブロック・粘土・自由画が中心となっている。(3名)

(3) 園・自分が行っている保育

- ・基本、クラス単位で行っている一斉型保育である。(3名)  
 (自由あそび時間と設定保育時間をわけている。)
- ・6月～8月は、クラスを解体し、夏ならではの遊びが

楽しめるようコーナーを設置している。(4名)  
 (砂・泥あそび・色あそび・集団、伝承あそび・ごっこあそび・音楽リズム)

- ・5領域を中心としたカリキュラムを作成し、計画どおり保育を進めている。(3名)  
 (健康・人間関係・環境・言葉・表現)
- ・仏教保育を実践している。(7名)
- ・運動会や保育発表会にむけての指導に力を入れている。(1名)

(4) まとめ

どの保育士も、子どもたち一人ひとりが成長して欲しいという思いを持ち、保育している。よりよい保育を目指し、平成23年7月から外部講師の力を借りながら取組みを始めた。

4 園の現状を知る。

自園の現状を知るため、次の実践を行った。

【☆実践① 「園にあるおもちゃ調べ」】

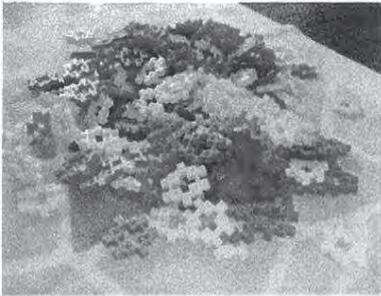
= 平成23年7月 =

- 《方法》 (1) 園ある全てのおもちゃを集める。  
 (2) おもちゃについて調べる。

〈園にあるおもちゃ〉

写真番号	玩具名	数	写真番号	玩具名	数
1	学研オリジナルブロック		29	木製玩具 輪投げ	3
2	プラレール		30	木製玩具 こま	
3	ドールハウス		31	木製玩具 ひも通し	
4	ブロック(大) レゴ風	2セット	32	木製玩具 五段パズル	1
5	文字積木(大)		〃	木製玩具 木の絵本	2
6	文字積木(中)	4セット	33	木製玩具 ハンマーボール	1
7	文字積木・四角(小)	2セット	34	木製玩具 木製パズル	1セット
8	積木	1セット	35	木製玩具 着せかえ	
9	ブロックカー		36	手作り 人形	
10	キングブロック		37	手作り 動物マラカス	
11	プラスチック積木		38	赤ちゃん玩具 ミニゆびあそびラッパ くるくるおしゃぶり	
12	(モンテ教具)メタルインセット		39	手作り 缶積木・牛乳パック積木	
13	(モンテ教具)円柱さし		40	布ソフト絵本	2
14	(モンテ教具)幾何タンス		41	マラカス	
15	(モンテ教具)幾何学立体		42	メロディ玩具	
16	(モンテ教具)ピンクタワー		43	布ソフトおもちゃ	
17	(モンテ教具)音感ベル		44	ファンファンキーボード	2
18	(モンテ教具)文字版		45	Bブロック(ソフト)	1セット
19	(モンテ教具)数字版		46	木製アニマルカー	
20	(モンテ教具)算数棒		47	よちよちウォーカー	1
21	(モンテ教具)色版		48	アニマル人形	6
22	(モンテ教具)英語版		49	ソフトビークルパート	
23	(モンテ教具)わり算版		50	手作り タオル棒	
24	(モンテ教具)音階版・音符		51	カラーボール	
25	ブロック(小)レゴ風		52	アニマルボール	
26	箱庭	1セット	53	ボーリングピン	
27	木製玩具 指あそび		54	カラー積木	1セット
28	木製玩具 型ぬきパズル	1セット	55	ママごと玩具	
〃	木製玩具 汽車つみき	1	56	てんとう虫みつばちカー	

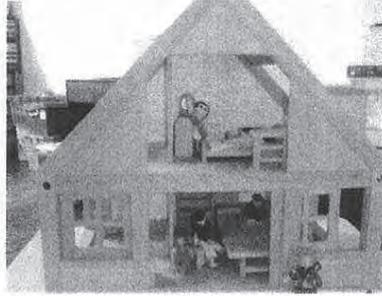
1



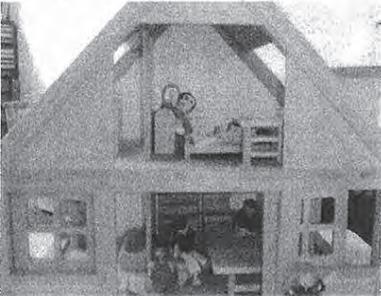
2



3



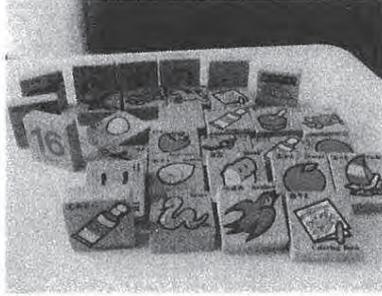
3



4



5



6



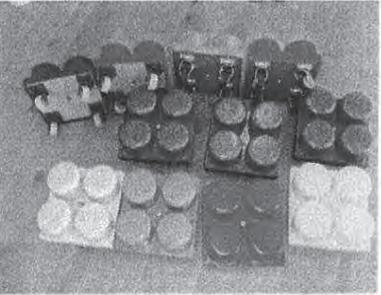
7



8



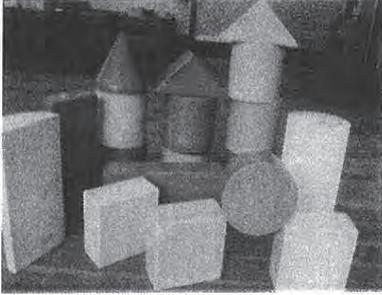
9



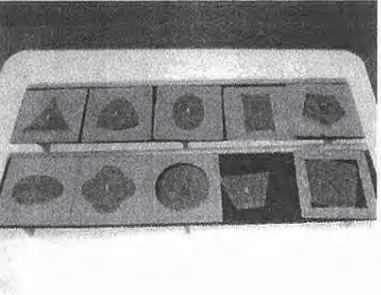
10



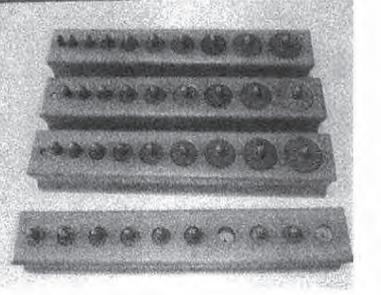
11



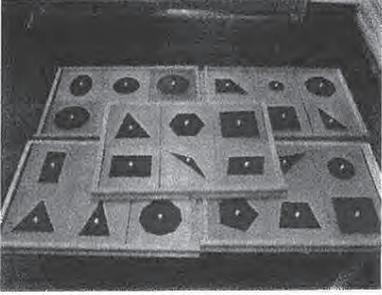
12



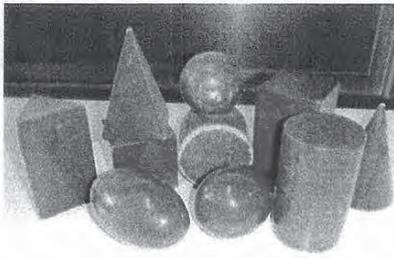
13



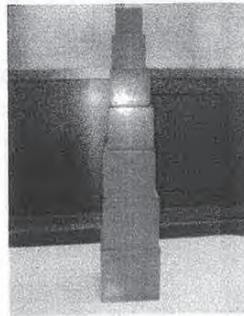
14



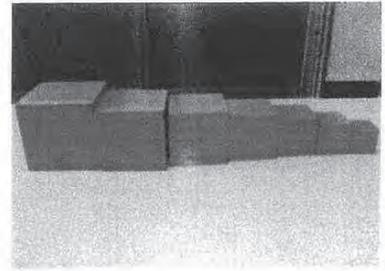
15



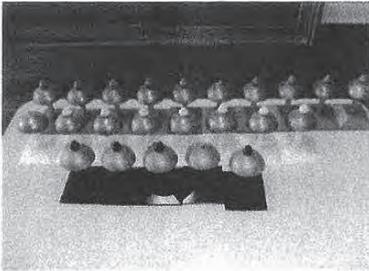
16



16



17



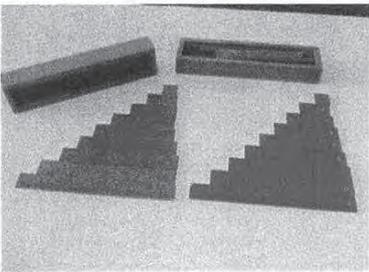
18



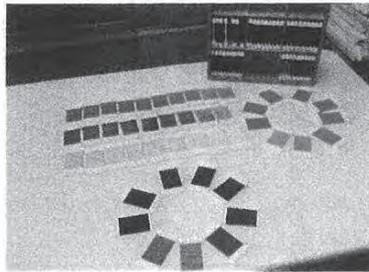
19



20



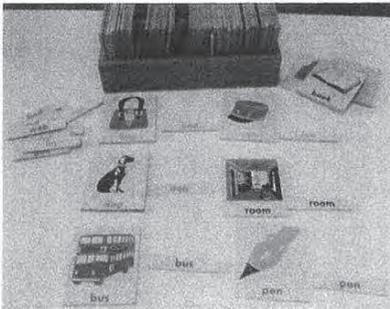
21



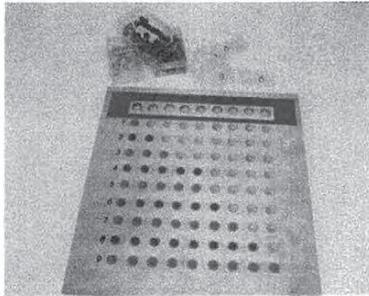
22



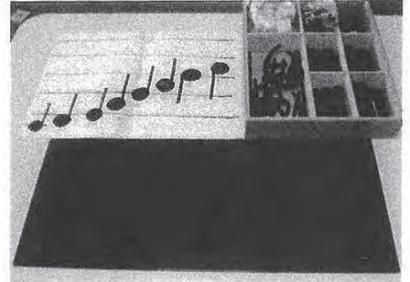
22



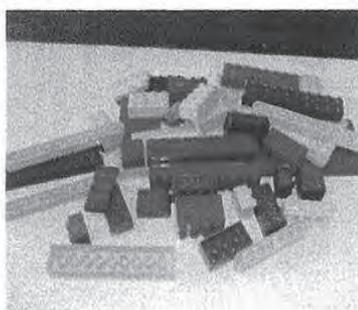
23



24



25



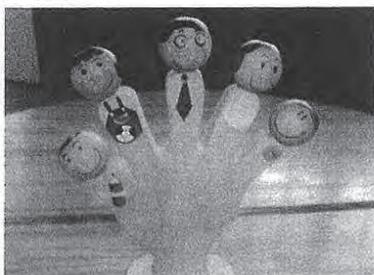
26



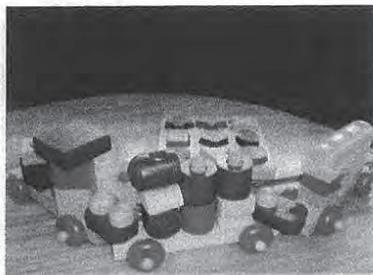
26



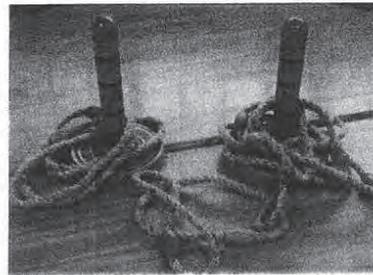
27



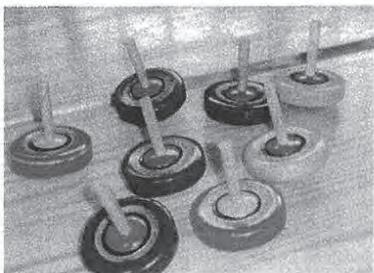
28



29



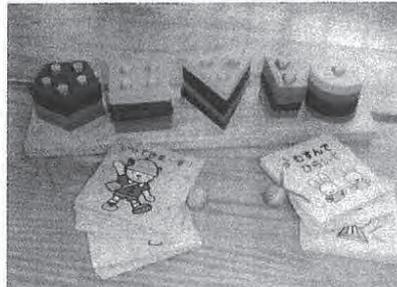
30



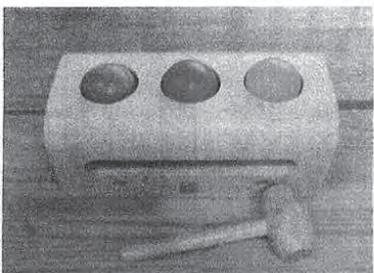
31



32



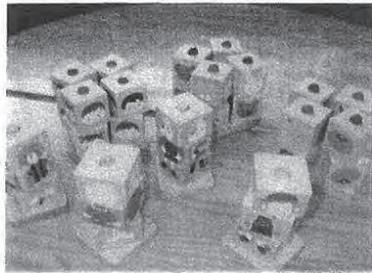
33



34



35



36



37



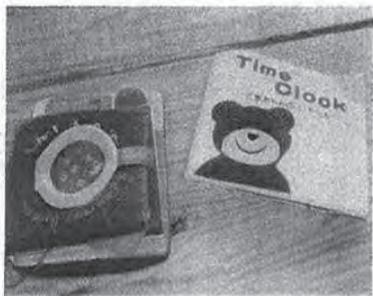
38



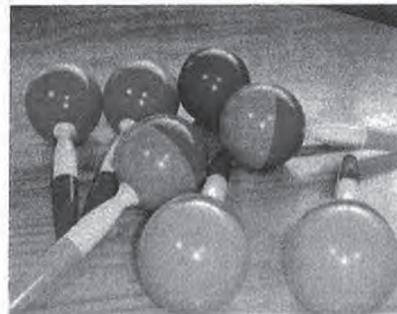
39



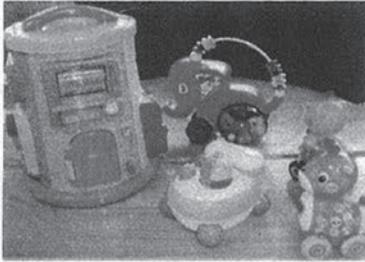
40



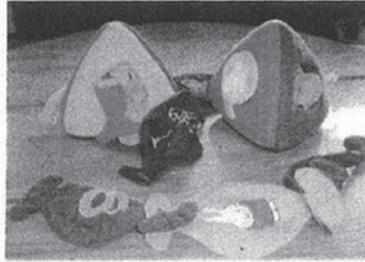
41



42



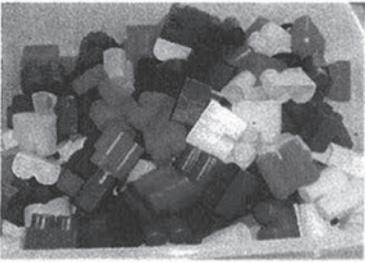
43



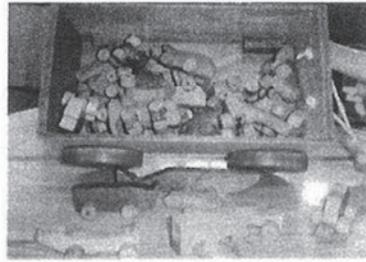
44



45



46



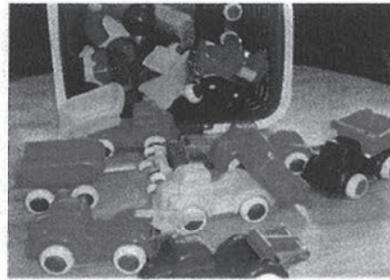
47



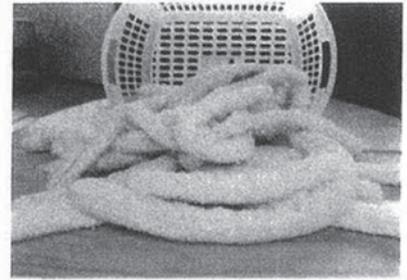
48



49



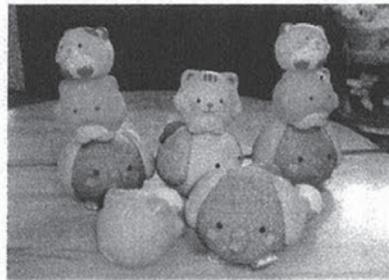
50



51



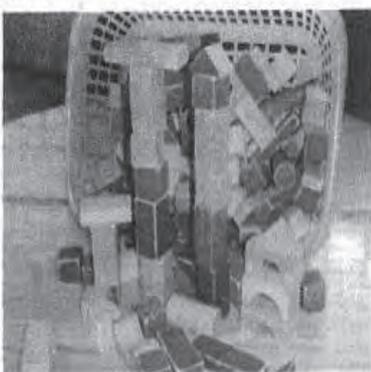
52



53



54



55



56



《結果》

- どのクラスも毎日使っているのは、ブロックや各種積み木である。
- 3・4歳児は、キングブロックやブロックカーでもよく遊んでいる。
- 0・1・2歳児は、アニマル人形や手作りのタオル棒で遊んでいる。
- 見たことのないおもちゃや使い方のわからないおもちゃもある。
- 決まった時期にしか出さないおもちゃもある。(モンテ教具…夏期のみ)

《課題》

- 年齢、発達に合ったおもちゃを準備できているか。
- 保育士はおもちゃを通して、どのような関わりができるか。

【☆実践② 「子どもの一日を振り返る」】

= 平成23年11月 =

- 《方法》
- (1) 現在の子どもたちの一日の流れをメモにする。
  - (2) 子どもたちが自由に過ごしている活動に○印を、保育士の思いや指示の活動に△印をつける。

3・4歳児		1・2歳児	
7:00	早朝保育	7:00	早朝保育
8:00		8:00	
9:20	自由あそび (戸外又は室内) …○	9:20	自由あそび (戸外又は室内) …○
9:30	体操 …△	9:30	おやつ …△
10:00	仏様礼拝 設定保育 …△	10:00	仏様礼拝 …△
11:30		11:00	
12:00	給食	11:20	自由あそび …○
12:45	自由あそび (戸外又は室内) …○	11:30	給食
14:00		12:30	着脱
14:00	設定保育 …△	13:00	午睡
15:00		15:00	おやつ
15:10	おやつ	15:30	仏様礼拝 …△
15:30	仏様礼拝 …△	16:00	降園
16:00	降園 延長保育		

《結果》

○印がつけられた活動は

[3・4歳児]

- 登園から午前中の設定保育開始までの自由あそび時間と給食後から午後の設定保育開始までの自由あそび時間のみであった。

[1・2歳児]

- 登園から午前中の設定保育開始までの自由あそび時間と給食まえの自由あそび時間のみであった。

それ以外の活動は、全て△印がついた。

《反省》

- ・一日の子どもの流れを保育士がコントロールしすぎていないか。
- ・自由あそびの時間が短いのではないか。
- ・唯一〇印がついた自由あそびの時間の中でも指示していることが多いのではないか。
- ・保育士によって言葉掛けや対応の仕方、手順に違いがあり、子どもたちが戸惑ったり、指示を待つ子が多いのではないか。

《今後の実践》

子どもたちが安心安全に過ごし、主体的に動けるように『習慣と決まり』を決め、『コーナーを設置すること』にした。

5 子どもたちが主体的にすすむために

子どもたちが自己選択・自己決定し、子どもの主体性を導き出すために、次の実践を行った。

【☆実践③ 「習慣と決まりを決める」】

＝平成24年3月＝

・一日の流れ、登降園時の対応、排泄、食事、遊びについて

- 《方法》
- (1) 各クラスごとに話し合う。
  - (2) 本館（4・3・2歳児）と別館（0・1歳児）ですり合わせをする。
  - (3) 園全体での共通認識を図る。

〈一日の流れ〉

	本 館		別 館	
	桃組・黄組（3・4歳児）	赤組（2歳児）	ひよこ組（0・1歳児）	
7:00	早 朝 保 育（場所：ひよこ組保育室）			
8:00	○登園 持ち物の始末 排泄 ○コーナーあそび	8:00 ○登園 持ち物の始末 排泄 ○コーナーあそび	8:00	○登園 持ち物の始末 ○コーナーあそび オムツ交換、排泄
9:00	○戸外あそび、体操  ○排泄、手洗いうがい  ○仏様礼拝（クラスごと） サークルタイム その日に応じたあそび	9:30 ○おやつを食べる 9:45 ○仏様礼拝  ○コーナーあそび ○戸外あそび	9:30 ○おやつ  ○戸外あそび	11:00 手洗い ○給食 オムツ交換、排泄
12:00	○給食	12:00 排泄、着脱 12:30 ○午睡	○着脱 ○午睡	
13:00	○戸外あそび 又は コーナーあそび 排泄、手洗い、うがい	14:20 ○起床 排泄、着脱	14:30 ○起床 オムツ交換、排泄 着脱	
15:00	○おやつ	15:00 ○おやつ	○おやつ	
15:30	○降園準備 仏様礼拝 （桃組・黄組合同）	○コーナーあそび	○コーナーあそび	
16:00	○降園	16:00 ○降園	16:00 ○降園	
17:00	延 長 保 育（場所：ひよこ組保育室）			

《習慣と決まり》

（ 子どもの習慣と決まり ◎  
 保育士の習慣と決まり ○ ）

登降園時

- ◎持ち物の始末
- ◎手洗い・うがい
- ◎降園前のあいさつの仕方
- 子どもへのあいさつの仕方
- 保護者へのあいさつの仕方

トイレ

- ◎トイレへの行き方
- ◎おしこの仕方
- おもらしをした時の着がえさせ方
- 処理の仕方

食事

- ◎食事をする場所
- 食事を準備する人
- ◎配膳の仕方
- ◎食事の終わり方
- ◎食事の片付け方
- ◎食事後何をするか。
- 机のふき方
- 食事のはじまり

(例)「食事をする場所」

<以前>

全乳幼児
<ul style="list-style-type: none"> <li>・保育室を活用していた。</li> <li>・自分の好きな場所で食べていた。</li> </ul>



<現在>

桃・黄組（3・4歳児）	赤・ひよこ組（0・1・2歳）
<ul style="list-style-type: none"> <li>・遊戯室をランチルームとする。</li> <li>・決まった席で食べる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・各保育室を活用する。</li> <li>・決まった席で食べる。</li> </ul>

(例)「食事をする場所」

<以前>

全乳幼児
<ul style="list-style-type: none"> <li>・全員が、食事の準備ができるまで待つ。</li> <li>・一斉に、「いただきます」を言ってから食べる。</li> <li>・自分が食べ終わっても待つ。</li> </ul>



桃・黄組（3・4歳児）	赤・ひよこ組（0・1・2歳）
<ul style="list-style-type: none"> <li>・食事の準備ができた子から「いただきます。」を言ってから食べる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・保育士が配膳した子から食べる。</li> </ul>

あそび

- ◎遊んでもよい場所と遊んではいけない場所
- ◎片付け方
- 片付ける時の合図  
 など、一つひとつ手順について話し合い、決めていった。

【☆実践④ 「コーナーを設置する」】

《方法》 (1) 今まで使っていた玩具を使ってコーナーを作る。

(2) 継続して遊び、各クラス「今できていること」と「困っていること」を話し合う。

《取り組み結果》

4 歳児

- ・自分で遊びたいコーナーに行き、遊べる子が増えてきた。
- ・はじめは、遊びを見つけられず遊べなかった子も、少しずつ遊べるようになった。
- ・コーナーの人数を\_\_人と決めると意識して遊ぶ姿が見られるようになった。
- ・いろいろな考えを出して遊んでいる。

2 歳児

- ・元に戻せるようになってきている。
- ・自分の好きな遊びで楽しめるようになってきている。
- ・保育室を走り回る子が減ってきた。



3 歳児

- ・自分のしたいことを見つけて遊ぶようになった。
- ・遊び方がわかり、発展した遊びへ。

0・1 歳児

- ・決まりが少しずつわかってきた。
- ・登園するとすぐに、自分の使いたい玩具を取り出して遊ぶ子がでてきた。
- ・元に戻す場所がわかってきた。

4 歳児

- ・同時に同じコーナーに行きもめる。
- ・コーナーの数が少ないように思う。
- ・うまく保育室が仕切れていない。
- ・生活とあそびのスペースがわかれておらずごちゃごちゃしている。

2 歳児

- ・玩具の取り合いで、トラブルになる。



3 歳児

- ・ルールが守れない子がいる。
- ・どんどん遊ぶ子がいる反面、遊びが見つけられずウロウロしている子がいる。

0・1 歳児

- ・玩具を持ち歩く。
- ・このコーナーの作り方がいいのか。
- ・人数のわりにおもちゃが少ない。



コーナー設置する前の  
保育室



コーナーを設置



本館改修工事



遊戯室



本格的にコーナーを設置し保育室をデザインしていった。



【☆実践③④をとおして】

良くなった点	問題点
<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもが見てわかる工夫ができようになった。</li> <li>・職員が共通の認識を持ち、保育するようになった。</li> <li>・今まであたり前だと思っていたことを見直すようになってきた。</li> <li>・気になる子のそばにいて、必要があれば手助けできる環境。</li> <li>・子ども一人ひとりの様子をしっかりと観察できるようになった。(遊びの様子、友だちとの関わり、集中力など。)</li> <li>・クラス全体を一斉に動かさないで保育士の指示、命令語が減り、声も小さくなっていると思う。</li> <li>・改装工事をして生活と遊びのスペースを分けられるようになった。</li> <li>・コーナーを設置することで、一つの遊びに人数が集中しなくなった。</li> <li>・子どもたちが選んだり、決めたりする機会が増えた。</li> <li>・コーナーあそびでは、人数が分散されているため一人ひとりの観察ができるようになった。</li> <li>・設定保育時はよく遊んでいた子がコーナーあそびだと遊べないなど、今まで気づかない点が見えてきた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・コーナーの作り方は、これでいいのか不安。</li> <li>・ねらいを持ってコーナーを考えたり、おもちゃが出せているか。</li> <li>・今までの一斉型設定保育、保育士主導型保育から子ども主体的なコーナー保育への切り替えが難しい。</li> <li>・今までの一斉型設定保育では、短い期間で仕上げる習慣しか身につけておらず、保育士自身も、もっと長いスパンで遊びこむ習慣をつける必要がある。</li> <li>・子どもを見守ることが難しくつい指示・命令語が多くなってしまう。</li> <li>・おもちゃや遊びの準備ができていても「やっていい？」とたずね、保育士の許可があってから遊び出す子がいる。</li> </ul>



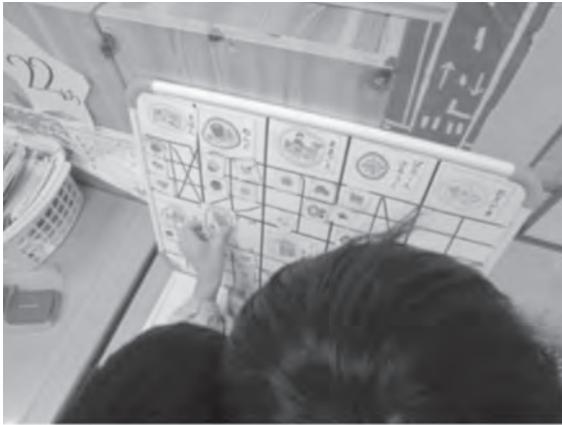
- ・「習慣と決まり」を決めることで、子どもたちが安心して安全な環境の中、主体的に動けるようになってきている。
- ・保育経験の違いにより、保育に対する考え方、子どもへの関わりに大きな差がある。

課 題

- ・問題点を改善し、保育の質を高めるにはどうしたいか。

## 6 保育の質を高めるために

(1) 毎月テーマを取り入れた「プロジェクト保育」と「コーナーあそび」



「きょうは、なにしようかな？」  
「きのうのつづきしよう！！」



自分のやりたいあそびを  
選んであそんでいますよ。



テーマ「水」



テーマ「数える」



日々の遊びや経験をとおして学びます。



テーマ「色と形」

「赤いトマトを1つください。」  
「はい、どうぞ。おいしいですよ。」

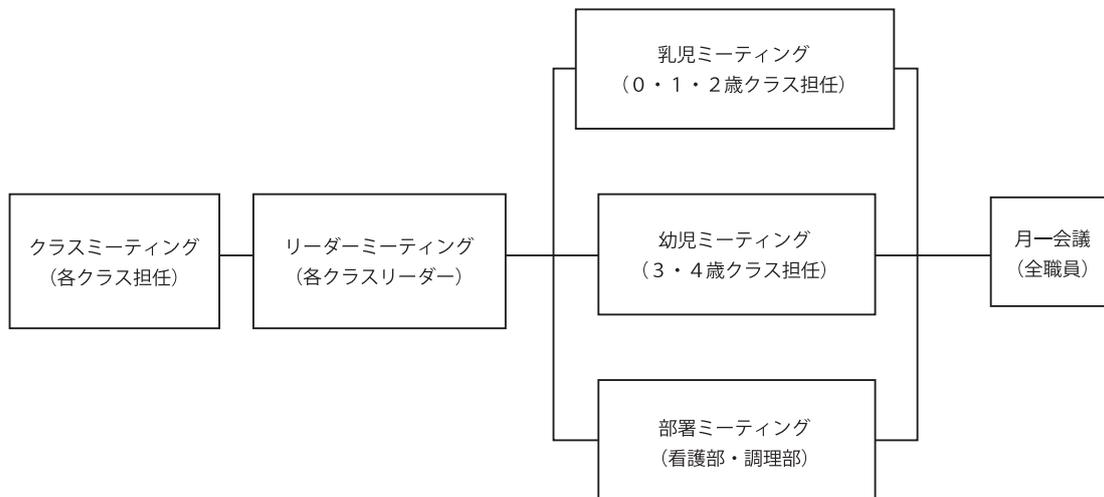


お店屋さんごっこ

「こんなにいっぱいかつちゃった。」  
とても満足そうです。

- (2) 環境図を中心としたカリキュラムへ…別紙資料①～④  
 (3) 他のクラスのことを知る。  
 ・自分のクラスのことだけでなく、他のカリキュラムに

- も目を通す。  
 ・ミーティングを充実させる。



- ・10分間ミーティング  
 ☞ その日の子どもの様子、連絡事項を伝え合う。  
 ☞ クラスリーダーが参加し、クラス保育士に報告する。

- (4) 自分たちの保育の振り返り、次に生かす。  
 ・計画したことがきちんと実行できたかをともに振り返る。  
 (1日、1週間、1ヵ月、半年、1年など)  
 ・常に問題意識を持つ。

- (5) 自分たちの保育を発信する  
 ・園だより、クラスだよりの配布  
 ・毎日のよい子ネットの発信  
 ・自分の保育のプレゼンテーションをする。

## 7 今後の課題

- ☞ 保育の質を高めるために行っている(1)～(5)を徹底していく。

### 経験の長い保育士は

- ・自分の保育のくせを意識しながら、丁寧な関わりができてきているか再確認する。
- ・若い保育士からの疑問、質問に答えていく。

### 経験の短い保育士は

- ・保育でわからないことを自分で整理する。
- ・改善点があれば、できるように取り組み、変わった点・変わろうとした点をまとめる。

### すべての職員は

- ・今後、他クラスのカリキュラムに目を通すだけでなく、他クラスの保育に参加し、良いところや疑問点を見つけ、伝えあったり、実際の保育とカリキュラムのつながりに目を向けていくこと。
- ・今後さらに保育士・職員間の興味関心を高め、園全体のつながりを深めていくこと。

## 8 おわりに

よりよい保育をするために“保育を変える”という新しいことに踏み出す不安や、難しさを感じたこともあったが、習慣と決まりを決め、コーナー保育を取り入れたことで、主体的に遊べる子どもが増えてきた。

園全体の質を高めるために見直し、実践し、改善を繰り返してきた。うまくいったこともあれば、そうでないこともあるが、今取り組んでいることを丁寧に継続させていきたいと思う。

園の質を高めるためには、職員一人ひとりが自分の質を高めようとする意識が必要だということも気がついた。

みなと保育園の理念である「一人ひとりを大切にされた保育」のもと大切にされた子ども達が、グループへ、クラスへ、そして園全体へとつながっていくことを願っている。

子どもたちの幸せな未来のため、子どもの自立と成長を促し、よりよく生きる力を育てていきたい。

子どもも職員も共に成長し合える保育園であるようこれからも学び続けていきたい。

9月保育カリキュラム

目 標	家庭連絡	園、ワラス、給食だよ、月刊之ぼんの配布	行事	4日(木)リミックス教室 7日(日)一畑まつり 8日(月)役員会 10日(水)リミックス教室 15日(月)敬老の日 17日(水)お誕生会	18日(木)園庭整備 親子遊戯練習
<p>生活のリズムを整え、規則正しい生活を営む</p> <p>体を十分に動かして、運動遊びやゲームあそびを楽しく と共、友だちと協力して約束やルールを守ることを大切にする</p> <p>敬老の日、お假岸などの行動を通して、いたわりの気持ち</p>	<p>ねらい 感謝の気持ちをもつ</p>	<p>園、ワラス、給食だよ、月刊之ぼんの配布</p> <p>運動量が増えるので、足に合った靴を履かせる</p> <p>体調を崩しやすいため、時期なので、子どもの様子を伝え合い、異常が見られたら早期に適切な対応をしていく</p>	<p>環境・保育士の援助及び留意点</p>		
基礎的事項	<p>気温の変化に留意しながら健康に過ごせるようにする</p>	<p>身回りのことを自分で (持ち物の始末、汗の始末、着替、水分補給)</p> <p>いろいろな食べ物を食べる</p> <p>様々な運動用具を使って遊ぶ (平均台、玉入れ、ハードル、フープ、マット、はしこ、巧技台、ボールあそび他)</p> <p>順番やルールを守って遊ぶ (リレー、三輪車競争、だるまごっこ、ころんだ他)</p> <p>集団あそびをする (はなごっこ、鬼ごっこ、かくるみ、陣とり他)</p> <p>異年齢児との遊びを楽しむ (散歩に出かけ、虫を採る、草を採る、草であそぶ)</p> <p>自然に触れたい遊ぶ (風、雨、雲の動きを見るなど)</p> <p>運動会に参加する(かけこ、障害物競争、遊戯)</p> <p>絵本や園鑑を見る</p> <p>友だちや保育士と会話をする</p> <p>絵本や紙芝居を見て、茶話会を開く</p> <p>思いのこを話したり、尋ねたりする</p> <p>歌をうたう(こおろぎ、とんぼのめがね、いこいね)</p> <p>楽器あそび(打楽器、ピアノ)表現あそび「秋のお山」</p> <p>描画あそび(運動会、ぶどう、コスモス、自由画)</p> <p>製作あそび(とんぼ、コスモス)壁面構成「秋のお山」</p>	<p>気温の変化による体調に留意し、活動後の休息や水分補給が行えるようにする</p> <p>室内の温度調節や換気に留意する</p> <p>苦手なものは、量を加減し、全部食べられた喜びを味わえるようにする</p> <p>食事のしなやかさを、物の働きを伝え、関心を持ってもらう</p> <p>遊具や用具を、子どもが出入れしやすめに準備し、安全に遊ぶことができるように話し合う</p> <p>思いやりから、だるまごっこやだるまごっこを感ぜられるように言葉を用いて、保育士が積極的に遊びに加わっていく</p> <p>あそび方マニュアルについて話し合い、行っていく</p> <p>年齢返しあそびなど、運動能力が身につくよう援助していく</p> <p>異年齢児でもあそべるような集団あそびや、簡単な、簡単な、簡単なあそびを用意しておく</p> <p>散歩に出かけ、季節の変化を感じられるようにする</p> <p>子どもの発見や疑問、感動を毎感に伝え共感し、おもしろいと感じていく</p> <p>必要に応じて、虫かご、観察ケース、網などを用意しておく</p> <p>とらふなど、大切にして、観察したり、観察したりできるように園鑑や絵本など、取り出しやすさを工夫しておく</p> <p>イメージが豊かに広がるような内容のお話を用意する</p> <p>一人ひとりに、考慮した言葉掛けをし、自分の言いたいことを伝えられるようにする</p> <p>子ども同士や保育士と話す機会を多く持つ</p> <p>子どもがよく知っている曲や親しみやすい曲を用意する</p> <p>保育士も一緒に歌ったり踊ったりして、子どもがのびのびと歌ったり踊ったりできるように準備をする</p> <p>一人ひとりの工夫を認め、満足感が得られるようにする</p> <p>友だちと協力して遊ばせ、遊ばせのしなやかさを感ぜられるようにする</p>		
健康	<p>戸外でからだを動かして、運動遊びを楽しむ</p>				
人間関係	<p>友だちと役割を決めたり、協力し合いながら遊ぶ</p>				
環境	<p>異年齢児と積極的に遊ぶ</p> <p>火の自然現象に、興味関心を持つ</p> <p>園や地域の行事に喜んで参加する</p>				
言葉	<p>経験したこと、考えたことを話し合う</p>				
表現	<p>絵本や園鑑で知りたことを調べる</p> <p>友だちと一緒に歌ったり踊ったりする</p> <p>いろいろな素材を使って作ることを楽しむ</p>				





月間保育計画(No.2) 9月 4歳児

絵本	うた	楽器、表現	プロジェクト	絵画、造形	運動	行事
<p>よしい、ドン おつきさまはどんな形? ババはお月さまと、 からだのほかにどうして できるといふか? おつきさまは どんな?</p>	<p>よほのめかお おつきさま 頭、肩、ひざ、 おつきさま おつきさま</p>	<p>・バレーン ・楽器のあそび (まねたてまよし) ・ピアノカ(きらきら星)</p>	<p>あそびのテーマ からうた ねら 体を動かして遊ぼう 本、種を動かして遊ぶ</p>	<p>自由画 好きなポーズの絵</p>	<p>・オリンピアボール ・おつきさま ・おつきさま、おつきさま ・おつきさま</p>	<p>3日 園庭遊歩 19日 敬老の日 7日 100ボール 22日 秋分の日 10日 100ボール 24日 ハートボール 11日 100ボール 26日 秋分の日 12日 100ボール 27日 秋分の日 13日 100ボール 29日 秋分の日</p>
<p>第1週 ① 発見コーナー ・鏡を興味して 自分の顔を見 顔のパーツ(目、鼻、口、 頬)を、顔の形に ・パーツの置きか 顔の表情が変 変か (笑、泣、怒、困、 驚)</p>	<p>① ままじりコーナー ・おつきさま、おつきさま の部位を認識し 洗うように行 ・前後左右の位置 ・おつきさま、おつきさま の部位を認識し 洗うように行</p>	<p>④ 鏡コーナー ・鏡 ・顔のパーツ</p>	<p>環境図 ③ パズルコーナー ⑤ おつきさま コーナー ⑥ パズルコーナー ⑦ パズルコーナー ⑧ パズルコーナー ⑨ パズルコーナー ⑩ パズルコーナー</p>	<p>⑩ 輪本コーナー ・秋に関する絵本 ・絵本の輪本 ・絵本の輪本 ・絵本の輪本</p>	<p>第2週 ・本、輪本、 ・本、輪本、 ・本、輪本、 ・本、輪本、</p>	<p>第3週 ・本、輪本、 ・本、輪本、 ・本、輪本、 ・本、輪本、</p>
<p>第4週 ② ぐるぐる ・本の題名に ・本の題名に ・本の題名に ・本の題名に</p>	<p>⑤ おつきさま ・おつきさま、おつきさま の部位を認識し 洗うように行</p>	<p>④ 鏡コーナー ・鏡 ・顔のパーツ</p>	<p>環境図 ③ パズルコーナー ⑤ おつきさま コーナー ⑥ パズルコーナー ⑦ パズルコーナー ⑧ パズルコーナー ⑨ パズルコーナー ⑩ パズルコーナー</p>	<p>⑩ 輪本コーナー ・秋に関する絵本 ・絵本の輪本 ・絵本の輪本 ・絵本の輪本</p>	<p>第3週 ・本、輪本、 ・本、輪本、 ・本、輪本、 ・本、輪本、</p>	<p>第4週 ・本、輪本、 ・本、輪本、 ・本、輪本、 ・本、輪本、</p>

## 講評：見直そう保育～よりよい保育をするために～

評者：天野 珠路

5年間にわたり、講師とともにこれまでの保育を見直し、保育の改善を図った記録で、その取り組みの範囲は多岐にわたります。全体に流れているのは、主体的に遊べる子どもを育てたいという思いと一人ひとりの子どもの自立と成長を促すという園の理念です。

園の現状を把握するためにおもちゃリストを作成したり、デイリープログラムの見直しを行ったり、保育士や子どもの動きを確認しています。さらにコーナー保育やプロジェクト型保育を取り入れカリキュラムの改善を図ったことなどが記されています。園全体で保育士主導の一斉保育から子ども主体の環境による保育を目指したことは評価できますが、肝心の保育の内容や子どもが変化していった過程が十分に伝わってきません。

子どもの興味や関心からどのような導入を行い、どのようなコーナーを作り、どのような遊びが展開されたのか。また、どのように遊びが発展し、子どもたちが遊びを創り出していったのか、環境の構成と再構成がどのように行われたかなど、保育を継続的かつ総合的に掘り下げていくとよいでしょう。その中で子どもの育ちと学びを可視化し、保育の発信につなげていかれることを願っています。

評者：石川 昭義

従来の保育のやり方を変えるための様々な実践例が描かれている。本報告ではPDCAという用語は使われていないが、このサイクルを意識して実践しようとする様子がかがえる。「園にあるおもちゃ調べ」による「結果」は、自園が見落としてきたところに光を当てた感がある。したがって、せっかく「見たことのないおもちゃや使い方のわからないおもちゃもある」と出されているの

で、「だからその後どうしたか」という記述がほしかった。

同じように、実践についての「問題点」では、「今までの一斉型設定保育、保育士主導型保育から子ども主体的なコーナー保育への切り替えが難しい」などのいい指摘がたくさん出されているが、それらへの対応が記述されていればより充実した報告になったと思われる。

また、「子どもの主体性を導き出すこと」と「習慣と決まりを決める実践」との関連がわかりづらかった。いずれも大事な実践と思われるが、テーマである「よりよい保育」の視点から、両者の関連性を位置づける研究が継続されることが期待される。

評者：岡田 澄子

保育を見直すことは大変重要なことでよいのですが、せっかくの報告書の量が膨大で読みづらいのが正直な感想です。講師を招聘した5年にわたる記録なのではないのかも知れませんが、もっとポイントを絞った方がよい報告書になったと思います。また、せっかくですから、保育の質向上プロジェクトチームの構成も記しておいた方がよかったですね。

実践を通して課題が見えてきましたが、その課題に対して今後の対応が十分ではないように思います。

歴史ある保育園ならではの「保育を変える」という新しい一歩を踏み出す不安や難しさなどは共感できます。だからこそもっと踏み込んだ細やかな報告が欲しかったと思います。

「一人ひとりを大切にしたい保育」という理念のもと、子ども達の幸せな未来のため、子どもの自立と成長を促し、よりよく生きる力を育てたいとあります。そのためにも職員の資質向上のため更なる研鑽、実践されますよう期待しております。

## 月齢にあった歩育生活を楽しむ ～体を動かして楽しく園生活を送る為の体づくりを目指して～

鹿児島県・幼保連携型認定こども園建昌保育園 中崎 朋美

### 【はじめに】

建昌保育園は、鹿児島県中央部に位置し、南に錦江湾と雄大な桜島をのぞむ始良市にある。日豊本線の沿線にあり、鹿児島市のベッドタウンとして位置し、人口は約7万5千人である。近くに高速道路も通っており大型のショッピングセンターイオンタウンも建設された。

建昌福祉会では平成23年度から職員の資質向上を目的とし、実践研究発表に取り組んでいる。以前の実践研究でまず大切なのが、「基礎的運動全身」を使った粗大運動であることを学び、昨年度1歳児を対象とした実践研究で、四つん這いを取り入れたあそびを多く経験し運動機能が向上したという結果から、このことの大切さを知った。

今年度の1歳児クラスは日々の生活の中で、活動量の少ない傾向が見られた。また1歳児の全国平均体重を調べると、男の子の平均体重は、10.5キロ、女の子の平均体重は、9.9キロとなっている（2000年小児分泌学会資料より）そのなかで、今年度の1歳児は、その平均体重を上回る子どもたちが多かったことから今年度は、はいはい運動を基本とし、運動機能の向上、さらには子ども一人ひとりの発達に合わせた歩行につなげる実践を目指すことにした。また、実践を行う際に「できる」ことばかりに注目せず子どもたちがいかに「楽しむ」かに重点を置いて取り組むこととした。

### 【研究目的と仮説】

昨年度おこなったはいはい運動を取り入れながらより良い歩行にもつながるよう体を動かす遊びを実践し、発達に合った体づくりを目指すことを目的とした。

仮説として、「はいはい運動や歩く運動を取り入れた遊びを多く経験することで、運動神経やバランス感覚が安定し、活動量が増え、体を動かすことの楽しさを知り、園生活を楽しむことができるのではないだろうか」とした。

#### ☆歩育とは

「日常の習慣的な歩行、非日常の行事などにおける歩行体験を通じて、子どもたちの生きていく力＝人間の基礎力を育む活動」とし、五感を使った歩く喜びの体験を通じて前向きにたくましく生き抜く力を培い、健やかな心身をつくり、人や自然とふれあい、生きていく幸福感を育むこと。

### 【研究方法】

#### ＜対象＞

建昌保育園の0歳児クラス12名  
1歳児クラス24名 計36名

### 【5月・6月】

○歩くことの大切さを調べる。

#### 《バランス感覚を育む》

赤ちゃんは、ハイハイによって手足を交互に出すことを覚える。1歳ごろになるとバランス感覚が整い、5本の指がしっかりと床をつかんで、足全体で立てるように。歩くことを繰り返しながら、バランス感覚を養う。

#### 《脳を活性化》

足を踏み出すとき、どう動けばよいか、体全体のバランスはとれているかななどの情報が脳の運動を司る感覚野に瞬時に届く。そこから足の筋肉に指令が伝わり、一歩が出ることに。そのたびに脳は活性化される。

#### 《骨・筋肉の発達を促す》

腰や腕の骨や筋肉が発達してくると、寝返りができるようになる。ハイハイで、腕や足の骨や筋肉も鍛えられ、つかまり立ちの準備もできてくる。歩けることは、体重を支えられるほど、骨や筋肉が発達している証拠である。

☆二足で歩行するまでの準備期間0～5歳の「歩育」が大切なわけ

#### 《0歳》

寝返り・はいはい・四足から二足への筋トレ中

・4ヶ月頃から寝返りを始める子もいる。6ヶ月頃にはお座り、8ヶ月頃にはハイハイをする子もいる。筋肉も下半身に集中してつき始め、四つん這いから二足歩行へと画期的な成長を遂げる時期。

#### 《1～2歳》

○脚からX脚へ歩き方を練習中

・1歳頃には運動神経やバランス感覚が安定し体全体を自分の足で支える筋力もつく。重心移動ができるようになると歩き始める。そして、たくさん歩くことで正しい歩き方を身につける。

#### 《3歳》

ペタペタ歩きから親指を蹴って歩く

・この時期あたりから土踏まずが形成されてくるため足裏全体も地面につけるペタペタ歩きを卒業する子もいる。かかと、土踏まず、足指の機能をフル活動させて

正しく歩けるようになるのが3歳頃である。走ったり、ジャンプすることも上手になってくる。

《4～5歳》

歩くことが上手に土踏まずが徐々に完成へ

- ・歩く一連の動作がスムーズになる。片足立ちやスキップをするなどのアレンジされた運動や足指で何かをつかんだりする細かい動作もできるようになる。それに伴い、運動神経がぐんと伸びる時期でもあるので積極的に体全体を使った遊びに導いてあげるとよい。

- 毎月の遊びを計画する。
- 階段の上りのタイム測定を行う。(1回目)
  - ・歩いて階段を上る。
  - ・手すりは使わずに上り、制限時間は決めずに最後まで上りきった時間のタイムを測定する。
  - ・歩行が安定しない子などは、保育士が援助をしながら階段の上りをおこなう。

○保護者へアンケート調査を実施。

《アンケート内容(1回目)》

①お子様の歩き始めはいつごろですか？  
( )

②お子様は体を動かすことが好きですか？  
はい いいえ

③お子様は歩くのが好きですか？  
はい いいえ

④お子様は抱っこをせがむことが多いですか？  
多い 少ない

⑤歩くことを心掛けていますか？  
はい いいえ

⑥子どもたちはどのような時に歩いていますか？  
登降園 買い物 散歩  
その他( )

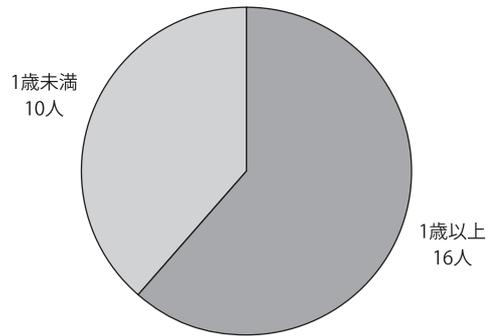
⑦お子様が楽しく歩く工夫をしていますか？  
はい いいえ  
「はい」と答えた方はどのような工夫をしているか記入してください。  
( )

⑧お外遊びは週にどれくらい行きますか？  
(公園・家の庭・散歩など)  
0回 1～2回 3～4回  
5回以上

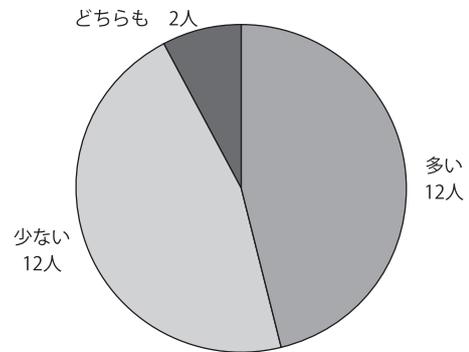
⑨お子様のはいはいや歩くこと、遊びの中でおもしろエピソードや、また気になることがありましたら自由にお書きください。

《アンケート結果》

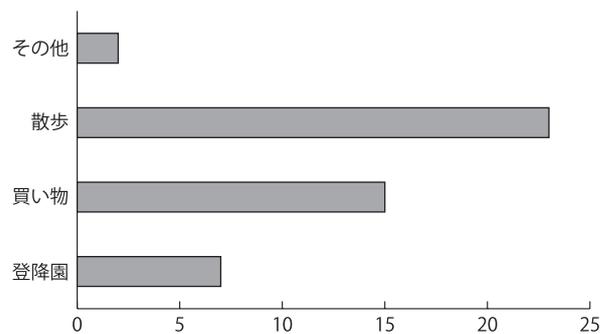
①お子様の歩き始めはいつごろですか？



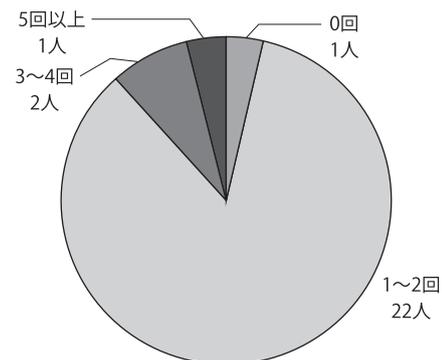
④お子様は抱っこをせがむことが多いですか？



⑥子どもたちはどのような時に歩いていますか？



⑧お外遊びは週にどれくらい行きますか？



⑦お子様が楽しく歩く工夫をしていますか？という質問  
「はい」と答えてくださった保護者の意見。

- ・でこぼこ道や砂利道など危険でなければ行きたい所にかせる。
- ・周りの景色を見せる。
- ・「ピッピッ」と一緒に行進したり、「よーいどん」の声掛けで楽しく歩くようにしている。
- ・歌を歌う。
- ・兄弟と一緒に手をつないで歩く。
- ・親の後をついてくるので、なるべく親が動くようにしている。

⑨お子様のはいはいや歩くこと、遊びの中でおもしろエピソードなどの保護者からの意見。

- ・高さがあるところからジャンプすることが好きで、縁石・階段など段差を見つけては嬉しそうにジャンプしています。
- ・最近横歩きをするようになってびっくりしました。
- ・祖父の歩き方を真似して、手を後ろで組んで歩くことが多い。
- ・誰が教えたわけでもないのに、歩いてるところから抱っこしようとするので笑いながら逃げ回って「おにごっこ」をしているみたいになるところに成長を感じます。なかなかこっちに来ないときは、食べ物があるとすぐに来ます。
- ・最近親子4人で三代目のランニングマンをよく踊っています。人差し指を立てて、足踏みを一生懸命していて笑えます。あと、よく玄関からヒールのある靴を持ってきて家の中をコツコツいわせながら歩き回っています。そしてかならずシンデレラになってます。(片方の靴が置き去り・・・)
- ・テンションが上がると両手を上げ、上を見ながらクネクネ歩く。音楽が鳴り始めると買い物中でも踊りだして、他の子どもの前で見せつけるかのようになついでいく。

○このことの大切さを廊下に掲示。

- ・昨年度の実践でおこなった「このことの大切さ」を保護者に掲示して伝えた。

### 【7月～11月】

○このことを取り入れた遊びを実施。

- ・毎月の遊びでは、子どもたちがスムーズにおこなえるように保育士が始めに手本を見せてからおこなった。

### 【7月】

目的：四つん這いを取り入れた遊びで、顔をしっかりと上げることで胸・首。腕が鍛えられる。また、体幹機能を高めて姿勢と運動能力が身に付く。

<トンネルくぐり>

トンネルを二つ用意して、その中を四つん這いでくぐる。

<フラフープくぐり>

フラフープをいくつか用意して踏まないように、四つん這いでくぐる。

### 【8月・9月】

\*歩くことを取り入れた遊びを実施。

目的：バランスを取りながら踏み石の上を渡ったり、山の上り下りをおこなうことで身体の中心の筋肉を使って手足の位置や身体のバランスをコントロールしながら動き、体幹を鍛える。

<踏み石渡り>

大、中、小の石の上をバランスをとりながら渡る。難しい場合は、保育士の手を握りながら一緒に渡る。

<山の上り下り>

跳び箱の一段の上にマットを敷き山をつくり、そこを歩いて山の上り下りをする。

\*五感を育む遊びを実施

《五感を育むことの大切さ》

・足から触った感覚や、踏み込んだ圧迫感など、はだしであれば足が敏感にたくさんの情報が行き渡り、五感を刺激する。

<裸足で水遊び>

ベランダのコンクリートを水で濡らし、その上を裸足で歩き感触を楽しみながら遊ぶ。

<裸足で砂遊び>

裸足で砂の感触を楽しみながら遊ぶ。

### 【9月】

目的：走る、ジャンプなどをおこない足・腰を鍛える。

<かけっこ>

約10メートルの直線走る。

<遊戯（親子体操）>

おかあさんといっしょ「ブンバボン」の曲に合わせて親子で触れ合いながらジャンプをしたり、走ったりして全身を使った運動を楽しく行う。

### 【10月・11月】

目的：はいはい運動、歩く運動など今までしてきた遊びを全て取り入れて、全身を使いながら楽しくおこなう。

<サーキット遊び>

①踏み石を渡る→平均台の上をバランスをとりながら歩く→滑り台を滑るの順に行う

②トンネルを四つん這いでくぐる→マットを四つん這いで渡る→跳び箱（1段）を乗り越える→マットを歩いて渡る→フラフープの輪の中を渡る→滑り台を滑るの順に行う。

○子どもの靴のサイズ測定

○正しい靴の履かせかた、選び方を廊下に掲示。

☆2歳をすぎて運動が活発になっている時期なら、靴底が厚めでもやわらかく曲がって、けり出しをサポートしてくれるものがよい。3歳ごろまでは、半年に5mmくらい足が成長するので、3ヶ月に1回ぐらいのペースでサイズの見直しをするとよい。靴選びはもちろんです。履かせ方にも配慮があると、足への負担がまったく違って来る。きちんと履かせたつもりでも、靴の中で指が曲がっていたりすることがあり、靴の履かせ方が間違っていたり、サイズが合わない、フィット感に欠け、スムーズな歩行の妨げになるうえ、外反母趾などの足トラブルの原因につながる可能性がある。

○階段の上りのタイム測定を行う。（2回目）

- ・1回目と同様歩いて階段を上る。

## 【12月】

○保護者へ2回目のアンケート調査を実施。

《アンケート内容（2回目）》

①子どもの成長を通して「歩くこと」が大切だと感じましたか？

- 感じた 感じない

②歩くことが増えましたか。

- はい いいえ

「はい」と答えた方はどのようなところを歩いていますか？

- 登降園 買い物 公園 散歩  
階段 その他（ ）

③足・腰が強くなったと感じますか？

- はい いいえ

「はい」と答えた方はどのような場面で足・腰が強くなったと感じましたか（ ）

④階段の上り下りはしていますか？

- はい いいえ

⑤活動内容を掲示してきましたが、一番興味を持ったものはどれですか？

- 足を育てることの大切さ 足の発達について  
這う運動 正しい靴の選び方  
歩く運動 ※複数回答可

⑥1年間歩くことを中心とした活動を取り入れてきました。お子様に成長を感じたことをご自由にお書きください。

《アンケート結果》

①子どもの成長を通して「歩くこと」が大切だと感じましたか？ ⇒100%

②歩くことは増えましたか？ ⇒100%

③足・腰は強くなったと感じますか？

⇒26名中1人の方が「いいえ」でしたが、残りの方は「はい」と強くなったと感じたそうです。

◎「はい」と答えてくださった保護者の意見。

- ・転ぶことが少なくなってきており、踏ん張る力もでてきた。
- ・つまずいた時にも転ばなくなった。
- ・坂道や階段が1人で歩けるようになった。
- ・つま先歩きをしたり、両足ジャンプをするようになった。
- ・すぐく急な坂でも体勢を維持し、転ぶことなく降りられるようになった。

◎「いいえ」と答えた保護者の意見として、保護者主観が強いが入園してから1年間実践してきたが（まだ足が強いとは思えない）と感じたようだった。ただ、これからも続けていって効果がでると良いですと前向きな意見をいただいた。

⑥1年間歩くこと中心とした活動を取り入れてきましたが、お子様に成長を感じたことをご自由にお書きください。

- ・入所したばかりの頃は、抱っこが多かったが、今では自ら歩きたがるうえ、たくさん走ることも増えた。
- ・しっかりと足に力をいれてヨレヨレせずに歩けるようになった。
- ・年度当初は歩き始めにもかかわらず、それほど動き回っている印象がありませんでしたが、保育園での実践的な活動により足腰がつよくなり、お姉ちゃんたちには見られなかった遊び（傾斜のある滑り台を軽々と上ったとき、丸太のアスレチックを自分だけで上りきったとき）が見受けられ、たくましさを感じました。
- ・入園した当時は歩けたけど、まだまだ足元がフラフラしていて安定感のない歩き方だったが、この1年でだいぶ安定してきて、階段をのぼれるようになったり、自分で靴を履いて楽しそうに歩く姿を見てとても成長したなと嬉しく思います。
- ・平均台のような一本道でも手を繋いで上手に足を交差してバランスをとりながら歩くことができることにびっくりした。

## 【結果と考察】

7月におこなったはいはい運動を取り入れた遊び〈トンネルくぐり〉では、二つのトンネルを使って二列でおこなったのでスムーズに進めることができ、ほとんどの子どもたちが上手にはいはいすることができていた。〈フラフープくぐり〉では、慣れない遊びでもあり、フラフープを踏んでしまう子がいた。はいはいではなく飛び越えようとする子もいた。何度か繰り返し遊ぶことによって踏まずにはいはいでフラフープをくぐることができていた。

8月におこなった〈踏み石渡り〉では、バランスを上手にとりながら自分で渡ることができる子もいたが、まだうまくバランスが取れず一人では踏み石を渡れない子、踏み石の上にも立つことができない子もいたので、その子たちは保育士が手を繋いで一緒に渡った。〈山の上下り〉では、歩いて山を越えることができると思っていたが、歩いて越えることができず四つん這いで山を越える子もいた。スムーズに山を越えられる子、四つん這いでも時間がかかる子とそれぞれだった。〈裸足で水遊び〉〈裸足で砂遊び〉では、楽しそうに遊ぶ子もいれば裸足で砂の中に入ること、水に足が触れることを嫌がる子もいた。時間がたつと裸足での感覚にも慣れて、楽しそうに遊ぶ姿が見られていた。

9月は、10月におこなわれる運動会に向けて〈かけっこ〉〈お遊戯（親子体操）〉を遊びに取り入れて走ったり、ジャンプしたりと全身を使った運動をおこなった。運動会でもみんなが約10メートルの距離を走りきり、お遊戯の親子体操でもジャンプしたりと楽しそうに体を動かす姿が見られた。

10月・11月におこなった〈サーキット遊び〉では、2ヶ月間で同じ内容のサーキット遊びではなく、内容をかえておこなった。始めは、はいはい運動がうまくできなかった子どもも、この頃にはスムーズにはいはいができるようになっていた。平均台については、一人で渡れる子どもが少なかったが、保育者が援助して続けることでバランス感覚が付き、上手に足を交互に出して渡ることができる子どもが多くなった。しかし、中には一人で渡ることが難しい、また横歩きならできる等見られたので、それぞれの発達段階に合わせた進め方に留意した。その結果、同じやり方ではなかったがクラス全員楽しんで取り組むことができていた様だった。サーキット遊びをおこなった際にトンネルや平均台などは二つありスムーズにできたが、そのあとのとび箱や滑り台など一つしかないところで少し混雑してしまうことや、前の人の後をついていき、片方ばかりに人が集まってしまっていたのでスムーズにおこなえるようにもう少し工夫が必要な部分もあった。

5月に階段の上りのタイム測定を行った結果、階段の上りの平均タイムは79秒だった。11月に同じ内容でタイム測定を行った結果、平均タイムは42秒と子どもたちの

階段を上るスピードが速くなっていた。また、4月当初、全国平均体重を上回る子どもが1歳児クラス24名に対して14名いた。しかし現在、24名に対して7名になった。

はじめは日々の生活の中で、活動量が少なかった子どもたちだったが、実践を通じて計画した活動を取り組んでいくと音楽に合わせて体を動かしながら踊ったり、戸外遊びでは、園庭を走り回ったりと自ら体を動かしている姿が多くみられるようになった。これは、約6ヶ月の実践期間中に、身体が発達成長したのも理由の一つとしてあげられるが、やはり、日常の保育の中でははいはい運動や歩く運動（坂の上り下りなど毎月の遊び）を取り入れた遊びを多く経験できたことが、体を動かすことの楽しさを知ることにつながったと考える。また、今回の実践を通して、子どもたちも体を動かすことが好きになり、活動量も増え、日々の園生活を楽しむことができるようになっていと感じた。五感を育む遊びとして、裸足で砂遊びや水遊びをおこなったが、泥んこあそびなど砂遊び、水遊び以外にも五感を育む遊びを取り入れることができたよかったです。また、毎月の遊びを計画してきたが、室内だけの遊びではなく、外での遊びも計画して実践することができたよかったです。

## 【まとめ・課題】

はじめは、日々の活動の中で活動量の少なかった子どもたちも自ら体を動かすようになり、生き生きと過ごす子どもたちの姿を見ることができた。色々な遊びに興味を持ち、8月に行った運動遊びではまだバランスが安定せずふらつきが見られ、保育者の手を借りながら踏み石を渡ったり、山の上下りでは自分の力では登りきれず滑っていた子どもたちも11月に行ったサーキット遊びではバランス感覚が鍛えられている姿が見られ、踏み石や山の上下りを保育者の手を借りずに自分の力でやり遂げ、楽しんでいるようだった。

保護者にもアンケートや日々の遊びの様子を写真や文章で掲示したことで、遊びを通して足を育てることの大切さを知ってもらうことができた。取り組みの最後のアンケートでは「急な坂でも体勢を維持し、転ぶことなく降りられるようになった。」「走っても転ぶことが少なくなった。」「物を押すときふんばる姿を見て、足腰が強くなったと感じた。」「両足でジャンプをするようになった。」「保育園や家での階段を自分で上ったり、下りたりするようになった。」「平均台のような一本道でも上手に足を交差してバランスをとりながら歩くことが出来るようになった。（手をつないで）」「入園した当時は歩くことはできたけど、まだまだ足元がフラフラしていて安定感のない歩き方だったが、だいぶ安定してきて階段を登れるようになったり、自分で靴を履いて楽しそうに歩くようになった。」などの返答があり良い取り組みだったと感じることができた。

今回の研究は、昨年度おこなった研究（はいはい運動）

を基本として歩行につながる研究を取り入れたが遊びの種類や活動の内容が固定化していたように感じる。今後は、より多くの遊び等考え保育に取り入れていきたい。また、五感を育む遊びについては、触覚のみに焦点をあててしまったので、その他の感覚（聴覚・視覚）にも目を向けていきたい。今後も研究で取り組んだ内容を継続していき、よりよい子どもの成長・発達につながるように保育していきたい。

【参考文献】

- ・ AERA with Baby 2012年8月号
- ・ 「這う運動あそび」で育つ子どもたち 今井寿美枝  
～インターネットより～
- ・ 歩育のすすめ！①足の役割とは…

## 講評：月齢にあった歩育生活を楽しむ

～体を動かして楽しく園生活を送る為の体づくりを目指して～

評者：井桁 容子

日本の子ども達の体力及び身体的能力の低下が心配されて久しい。特に近年は、遊びの質の変化から低下が加速していると言われていたことから、保育園という長時間すごし、専門家が対応する場が果たす役割に大いに期待したいところである。そのような観点から、子どもの発達に合わせた歩行に着目した実践によって、保護者が子どもにとっての歩行の意味に気づき、日々の関わりの中で意識化され変化していくことにつながったことの意義は大きい。しかし、報告の内容が、保育者側の働きかけが中心に記載されており、“テーマ”の「月齢に合った歩育」とのズレ、“はじめに”にあった「できる」ことばかりに注目せずという視点のポイントと報告内容にズレのある内容となっていることが惜まれる。0歳、1歳児の歩行には、当然個人差があり、子ども一人ひとりの心身の発達、その日の心身の状況等への一人ひとりへの配慮や工夫があってこそそのものであるため、その部分が欠けていることは、テーマとの一致した内容になっているとは言えない。さらに、0歳1歳の子どもたちに「鍛える」という言葉は、保育の姿勢として誤解を招きやすいので避けるべきではなかろうか。

評者：岡田 澄子

前年度は「はいはい運動」を取り入れ、今年度は「歩行」に注目し、ウォーキング指導者も推奨している「歩育」の研究です。継続しての研究は素晴らしいですね。

保護者へアンケート調査を実施したことにより保護者も「歩く」ことに注目したようです。保育園の働きかけで保護者も子どもの「歩く」ことに注目しているようです。子どもの成長を通して「歩

くことが大切」「歩くことが増えた」と感じた人が100%なのには驚きました。

残念なのは、全国平均体重の小児内分泌学会資料がかなり古いことです。最新の資料を用いるべきだったと思います。また、保育園の規模やクラス構成なども知りたかったです。

他のクラスの歩育はどのようにになっているのか、興味がわきました。次は何に注目した研究になるのか楽しみです。よりよい子どもの成長・発達につながる保育に期待いたします。

評者：日吉 輝幸

報告園の建昌保育園は、昨年度「這うことの大切さ」と題して、ヒトが出生後から2足歩行へ至る成長段階で、「はう」という行為の重要性に着目した実践の様子を報告された。それを踏まえて今回は、次のステップとして歩行を通した体づくりを「歩育」と位置付け、継続的に心身の発達について実践と観察を行われていることに敬意を表したい。

しかしながら、実践報告を行う「レポート」として見ると、参照しているデータが最新版ではないこと、レポート自体の体裁が適切ではないなどの問題点も散見されたことが残念であった。実践内容がとても興味深いので、今後は適切なデータの引用と、内容が分かりやすい記述をされることを望むものである。

今回の報告は1歳児の活動を中心に記載されているが、文中には0歳から5歳に至るまでの「歩育」の重要性についても一部触れられていた。発達の連続性の観点からも、他の年齢の活動の様子が知りたいと思うのは筆者だけだろうか。是非とも次の機会には、報告者が述べているように、「できる」ことばかりに注目せず、子どもたちがいかに「楽しむか」という視点で行った、他の年齢についての「歩育」の実践報告を待ちたい。

## 第11回 保育実践研究・報告集

平成29年3月31日発行

発行：社会福祉法人 日本保育協会 保育科学研究所

〒102-0083 東京都千代田区麹町1-6-2

アーバンネット麹町ビル6階

TEL 03-3222-2111 (代)

FAX 03-3222-2117